

北陸新幹線関係発掘調査報告書Ⅱ

仲 田 遺 跡

2003

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

# 北陸新幹線関係発掘調査報告書Ⅱ

なか だ  
仲 田 遺 跡

2 0 0 3

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

## 序

北陸新幹線は、東京都を起点に上越新幹線高崎駅から分岐して、長野市・上越市・糸魚川市・富山市・小浜市を経て大阪府に至る総延長600kmの新幹線鉄道です。開通により北陸地方と首都圏・関西圏は短時間で結ばれ、日本海沿岸地域の産業・経済・文化の交流発展に多大な効果をもたらすものと期待されています。

本書は、この北陸新幹線建設に先立ち、平成14年度に実施した仲田遺跡の発掘調査報告書です。調査の結果、川辺に営まれた平安時代後期から室町時代にかけての集落の様子が明らかになりました。特に、溝によって整然と区画され、建物が計画的に配置される在り方は注目されます。県内で当該期の集落跡が調査された事例は少なく、今後の中世集落の研究に多くの情報をもたらすものと期待されます。

今回の調査成果が、頸南地域の歴史を解明するための資料として広く活用され、埋蔵文化財に対する理解と認識を深める契機となれば幸いです。

最後に、この調査に関して多大な御協力と御援助を賜った板倉町教育委員会、並びに地元の方々、また発掘調査から報告書刊行に至るまで格別のご配慮を賜った日本鉄道建設公団北陸新幹線建設局、同上越鉄道建設所に対して厚くお礼申し上げます。

平成15年6月

新潟県教育委員会

教育長 板屋越 麟一

## 例　　言

- 1 本報告書は、新潟県中頃城都板倉町大字熊川字仲田87ほかに所在する仲田遺跡の発掘調査記録である。
- 2 発掘調査は、北陸新幹線の建設に伴い日本鉄道建設公団（以下、鉄建公団）から新潟県が受託したもので、調査主体である新潟県教育委員会（以下、県教委）の依頼により財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）が平成14年度に実施した。なお、印刷・製本は、平成15年度契約とした。
- 3 出土遺物及び調査に係わる各種資料は、すべて県教委が新潟県埋蔵文化財センターにおいて保管・管理している。遺物の注記は「ナカタ」とし、出土地点や層位などを続けて記した。
- 4 本書に掲載した遺物番号はすべて通し番号とし、本文及び挿図・遺物観察表・図面図版・写真図版の番号は一致している。
- 5 引用文献は、著者及び発行（西暦）を文中に〔 〕で示し、巻末に一括して掲載した。
- 6 作成した図版のうち、既成の地図を使用した場合は、それぞれにその出典を記した。
- 7 航空写真撮影は、国際航業株式会社に委託した。
- 8 自然科学分析は花粉分析・プランクトン分析・木製品の樹種同定・井戸出土の種実同定について株式会社パレオ・ラボに委託して実施した。
- 9 道構平面実測及び図化は株式会社桑原測量社に委託し、成果品はデジタルデータ（DXF形式）での納品とした。
- 10 道構断面図のトレース及び各種図版作成・編集は、株式会社セビアスに委託してデジタルトレースとDTPソフトによる編集をし、完成データを印刷業者へ入稿して印刷した。遺物写真是デジタルカメラ（ニコンD100）で撮影し、デジタル化した道構写真と合わせて編集を行った。なお、図版作成・編集作業に係り、業者に支給した資料は以下のとおりである。

本文・挿図：テキスト形式・Excel形式のデータ・トレース原図・貼り込み版下  
道構平面図版：平面図データ・断面図原図（修正済）・レイアウト図・文字データ  
遺物図面図版：トレース図（個別）・拓影・レイアウト図  
写真図版：デジタルデータ（CD）・レイアウト図

- 11 本書の執筆は、加藤 学（埋文事業団文化財調査員）、高階敏昭（株式会社野上建設興業）、沢田福宏（株式会社野上建設興業）があたり、編集は加藤が担当した。執筆分担は以下のとおりである。  
第IV章1・2・第VII章1：高階・加藤、第IV章3・1～8）：高階・沢田・加藤  
第V章2 A～C・4：沢田・加藤、その他：加藤
- 12 発掘調査から本書に至るまで、下記の方々から多くの御教示・御協力を得た。厚くお礼申し上げる。（敬称略  
五十音順）  
相羽重徳 伊藤啓雄 伊藤秀和 卜部厚志 大平理恵 坂井秀弥 笹沢正史 佐藤 憲 高野裕子 高瀬信行  
高林真人 田辺早苗 立木宏明 鶴巻康志 野村忠司 秦 繁治 藤沢文雄 藤沢雄一 細野高伯 水澤幸一  
宮尾 亨 森沢 勉 矢田後文 山田昌久 横山勝栄 吉川俊久 渡邊ますみ

## 目 次

第Ⅰ章 序 説 .....	1
1 調査に至る経緯 .....	1
2 調査と整理作業 .....	1
A 試掘確認調査 .....	1
B 本発掘調査 .....	2
3 調査体制 .....	2
4 整理・報告の体制 .....	3
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境 .....	4
1 遺跡の位置と地理的環境 .....	4
2 周辺の遺跡 .....	5
A 古代 .....	5
B 中世 .....	5
第Ⅲ章 調査の概要 .....	8
1 グリッドの設定 .....	8
2 基本層序 .....	8
第Ⅳ章 遺構 .....	10
1 概要 .....	10
2 基本方針 .....	10
3 遺構各説 .....	11
1) 川跡 .....	11
3) 捩立柱建物 .....	13
5) 杭列 .....	17
7) 土坑 .....	19
9) 穫穴住居 .....	20
2) 溝 .....	12
4) ピット .....	16
6) 井戸 .....	17
8) 方形整穴状遺構 .....	20
第Ⅴ章 遺物 .....	21
1 概要 .....	21
2 土器 .....	21
A 古墳時代 .....	21
B 奈良時代 .....	22
C 平安時代 .....	22
D 中世 .....	23
1) 11世紀後半 .....	23
3) 13世紀 .....	25
2) 12世紀 .....	24
4) 15世紀 .....	26

3 石 製 品 .....	27
4 鉄 製 品 .....	28
5 木 製 品 .....	28
A 記述の方法 .....	28
B 観察の視点と図化の方法 .....	29
C 時期別の様相 .....	30
D 遺物の種別ごとにみた特徴 .....	30
6 柱      根 .....	33
 第VI章 自然科学分析 .....	35
1 仲田遺跡出土木製品の樹種 .....	35
2 仲田遺跡から出土した大型植物化石 .....	41
3 花粉分析 .....	42
4 仲田遺跡のプラント・オパール .....	45
 第VII章 ま と め .....	47
1 集落の変遷 .....	47
2 中世の土器・漆器 .....	50
3 川跡SX204における遺物の層位的出土 .....	52
4 木製品にみられる樹種の選択性 .....	53
 《要 約》 .....	54
《引用参考文献》 .....	54
《観 察 表》 .....	56

### 挿 図 目 次

第 1 図 試掘確認調査の結果 .....	1
第 2 図 遺跡の位置と周辺の地形 .....	4
第 3 図 遺跡の位置と周辺の遺跡 .....	7
第 4 図 グリッド設定図 .....	9
第 5 図 調査区内エレベーション図 .....	9
第 6 図 土層柱状図 .....	9
第 7 図 遺構の平面形態と断面形態の分類 .....	11
第 8 図 挖立柱建物の構成と変遷 .....	15
第 9 図 三貫梨遺跡における挖立柱建物 .....	16
第10図 井戸・土坑・溝の計測値と分類別構成比	18
第11図 加工痕の表現方法 .....	29
第12図 切り残し痕の形成 .....	33
第13図 斜面地における伐採と加工痕の構成 .....	33
第14図 平坦地における伐採と加工痕の構成 .....	34
第15図 仲田遺跡出土木製品切片の光学顕微鏡 写真（1） .....	37
第16図 仲田遺跡出土木製品切片の光学顕微鏡 写真（2） .....	39
第17図 出土した大型植物化石 .....	42
第18図 仲田遺跡SX204・SD201の花粉 化石分布図 .....	43
第19図 仲田遺跡の花粉分析 .....	44
第20図 SXS204・SD201遺構のプラント・ オパール分布図 .....	46
第21図 仲田遺跡のプラント・オパール .....	46
第22図 集落の変遷 .....	48

第23図 仲田遺跡における中世の土器・漆器	51	第24図 川跡（SX204）における遺物の層位的 出土状況	52
-----------------------	----	----------------------------------	----

## 表 目 次

第1表 出土銭一覧	28	第4表 試料1g当たりのプラント・オパール 個数	46
第2表 大型植物化石一覧	41		
第3表 産出花粉化石一覧表	43		

## 図 版 目 次

### 【図面図版】

図版1 仲田遺跡全体配置図	
図版2 道構分割図(1)	
図版3 道構個別図(1) 分割図1 (SB3,SB4,SB5)	
図版4 道構個別図(2) 分割図1 (SE501~504・SK505・SX750・P553,648,649,655)	
図版5 道構分割図(2)	
図版6 道構個別図(3) 分割図2 (SB26~28・SE209,210,236)	
図版7 道構個別図(4) 分割図2 (SE208,219,238,242,243,252・SK237)	
図版8 道構個別図(5) 分割図2 (SE235,247,264,267,278,283,506)	
図版9 道構個別図(6) 分割図2 (SE264,507~513・SK276,280,314,380)	
図版10 道構個別図(7) 分割図2 (SD201~203,1322,1413・SX204,279)	
図版11 道構分割図(3)	
図版12 道構個別図(8) 分割図3 (SB13,SB14,SB15,SB16)	
図版13 道構個別図(9) 分割図3 (SE114,115,137,138,141,162,212~215,266・SD201)	
図版14 道構個別図(10) 分割図3 (SE216,918,919,1035,1036,1039,1043,1107,1108・SK122,139)	
図版15 道構個別図(11) 分割図3 (SK118,116,174,217,939,1032,1034,1100,1103,1289・SD201・SX204)	
図版16 道構分割図(4)	
図版17 道構個別図(12) 分割図4 (SE144,194,1023・SK193・SD101,102,106,116,117)	
図版18 道構分割図(5)	
図版19 道構分割図(13) 分割図5 (SB22,SB23・SA1,SA2・SE16,31・SK15,1720,25,996,1017・SD13,14・SX23)	
図版20 道構分割図(6)	
図版21 道構個別図(14) 分割図6 (SB1,SB2・SE18,19,22・SK21・SX23)	
図版22 道構分割図(7)	
図版23 道構個別図(15) 分割図7 (SB7・SB9)	
図版24 道構個別図(16) 分割図7 (SB8・SB31)	
図版25 道構個別図(17) 分割図7 (SB11,SB12)	
図版26 道構個別図(18) 分割図7 (SB10,SB25・SE211,223)	
図版27 道構個別図(19) 分割図7 (SE222,224,225,234,239,258,283,312,315・SD203)	
図版28 道構個別図(20) 分割図7 (SE317,381,388,392,393,442・SE269,313,382,384)	
図版29 道構分割図(8)	
図版30 道構個別図(21) 分割図8 (SB6,SB30)	
図版31 道構個別図(22) 分割図8 (SB24,SB29・SE205,206)	
図版32 道構個別図(23) 分割図8 (SE207,220,221,260,265,227・SK218,268)	
図版33 道構分割図(9)	
図版34 道構個別図(24) 分割図9 (SB17,SB18,SB19,SB20,SB21・SE316・SD107,111)	
図版35 道構個別図(25) 分割図9 (SE108,1040・SK112,113,961,1031・SD111・SI1038)	
図版36 古墳時代の土器・古代の土器(1)	

図版37 古代の土器（2）・中世の土器（1）  
図版38 中世の土器（2）  
図版39 中世の土器（3）  
図版40 中世の土器（4）  
図版41 中世の土器（5）・石製品

【写真図版】

図版47 SD201区画内完掘、石組井戸検出  
図版48 挖立柱建物（1）  
図版49 道跡遠景・近景、航空写真、溝（1）、掘立柱建物（2）  
図版50 道跡近景、メインセクション、掘立柱建物（3）  
図版51 挖立柱建物（4）、川跡（1）  
図版52 川跡（2）、溝（2）  
図版53 溝（3）、井戸（1）  
図版54 井戸（2）  
図版55 井戸（3）  
図版56 井戸（4）、土坑（1）  
図版57 井戸（5）  
図版58 井戸（6）  
図版59 井戸（7）

図版42 石製品・金属製品・木製品（1）  
図版43 木製品（2）  
図版44 木製品（3）  
図版45 木製品（4）  
図版46 木製品（5）・柱根  
図版60 井戸（8）  
図版61 井戸（9）、土坑（2）  
図版62 土坑（3）  
図版63 土坑（4）、ピット（1）  
図版64 ピット（2）  
図版65 ピット（3）、竪穴住居、作業風景  
図版66 土器（1）  
図版67 土器（2）  
図版68 土器（3）  
図版69 土器（4）  
図版70 土器（5）、石製品、鉄製品、木製品（1）  
図版71 木製品（2）、柱根（1）  
図版72 木製品（3）、柱根（2）

# 第Ⅰ章 序 説

## 1 調査に至る経緯

北陸新幹線は、全国新幹線鉄道整備法に基づき建設される新幹線鉄道である。長野市・上越市・富山市・小浜市を経由して東京都と大阪市を結ぶ総延長600kmのうち、高崎・長野間は平成9年10月に開業している。その後、長野市を起点とし、長野県飯山市を経て上越市にいたる長野・上越間の延長60kmは、昭和47年に基本計画が、昭和48年に整備計画が決定され、平成10年3月に長野・上越間の工事実施計画が認可された。これを受け、鉄建公団北陸新幹線建設局と県教委との間で、建設用地内における埋蔵文化財の分布調査・試掘確認調査等に関する協議が本格化した。

平成10年9月、鉄建公団から分布調査の依頼を受けた県教委は、平成10年11月に調査を実施した。その結果、埋蔵文化財の具体的な規模・内容等は不明であり、今後、試掘確認調査を実施して取扱いを判断する必要があると回答した。平成14年3月、鉄建公団から板倉町内（米増・熊川新田間 17,500m<sup>2</sup>）の試掘確認調査の依頼を受けた県教委は、埋文事業団に調査を委託した。平成14年6月に調査した結果、五反田遺跡 5,680m<sup>2</sup>、仲田遺跡 5,100m<sup>2</sup>について本発掘調査が必要であると回答した。

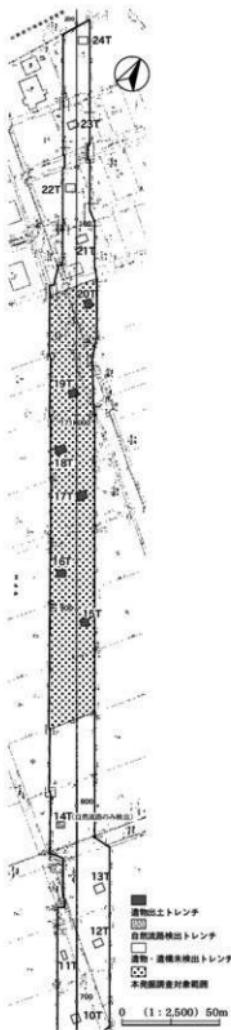
試掘確認調査の結果を受けて、鉄建公団は県教委に本発掘調査を早期に実施するよう要望した。急な要望で調査体制の整備に難航したが、平成14年8月、鉄建公団から県教委が受託し、9月9日から埋文事業団が本発掘調査に着手した。

## 2 調査と整理作業

### A 試掘確認調査

試掘確認調査は、平成14年6月3日～6月11日に実施した。米増～熊川新田区間の17,500m<sup>2</sup>を調査対象とし、338.45m<sup>2</sup>（確認率1.9%）について調査した。調査は、対象地に任意に確認トレンチを設定し、重機（バックホー）及び人力で徐々に掘り下げ、遺構・遺物の有無を精査した。

調査の結果、五反田遺跡に係る1～6トレンチにおいて古代の



第1図 試掘確認調査の結果

### 3 調査体制

遺構・遺物が、仲田遺跡に係る15～20トレンチにおいて古代及び中世の遺構・遺物が検出され、五反田遺跡5,680m<sup>2</sup>、仲田遺跡5,100m<sup>2</sup>について本発掘調査が必要と判断された（第1図）。なお、仲田遺跡に係る15～20トレンチからは、溝・井戸・柱穴等の遺構が多数検出された。

#### B 本発掘調査

仲田遺跡周辺における北陸新幹線法線は、水田地帯を横断するように位置している。したがって、1枚の水田を新幹線法線が分断することとなり、調査着手を予定した平成14年8月中旬の段階では法線内は、用排水の通路となっていた。このような状況から調査範囲内は著しい湿地の状態にあり、8月下旬から表面排水を開始した。しかし、水田に給水する時期と重なったこともあり状況は改善されず、調査のために設計された暗渠工事を開始できたのは9月2日まで遅延した。

実質的な発掘調査は、9月9日から開始した。表土除去には重機を利用して、慎重に掘削を進めた。その過程で、遺跡の旧地形は西側ほど高く、東側ほど低くなっていることが明らかになった。また、遺物包含層が過去の場所整備によって大部分が損壊していることも明らかになり、包含層が残存する北東側の一部を除いて遺構確認面まで重機で慎重に掘削した。

人力による掘削調査は9月12日から開始した。包含層掘削と遺構精査を並行して行ったところ、遺構密度に濃淡のあることが明らかになり、調査区の北端と南東端では遺構が検出されなかった。このような状況から、調査区本体と農道を挟んだ北端の区画（第1図・20T周辺）及び調査区南東端から50mの範囲について確認調査を追加した。

その結果、北端の区画からは磨耗した土師器の碎片1片が出土したものの遺構は検出されなかつた。また、調査区本体における遺構の分布状況を勘案すれば、旧河道の延長上にあたると判断された。このような状況から、北端の調査区には遺跡の広がりを認めることはできず、県教委と埋文事業団で協議した結果、調査不要とした。一方、南東端の遺構未検出範囲からは旧小熊川の流路（SX23）が検出され、地表下3mの川底砂礫層から古代の遺物が多数出土した。これについては調査が必要と判断し、11月上旬に重機と人力で旧流路を掘削して遺物を取り上げた。

多数検出された遺構の調査は、溝・井戸・土坑→掘立柱建物・柱穴という順序で進めた。遺構密度が高いこと、調査に時間を要する井戸が85基検出されたこと、例年になく雨天が続いたことにより調査は難航した。特に、雨天による作業休止は調査の進捗に大きな影響を与えたため、2間×3間の簡易テントを14棟設営して雨天でも作業できるよう環境を整えた。以後、天候に左右されずに作業が進み、11月末で遺構を完掘、12月3日に空撮した。その後、人力掘削が必要と判断された旧流路（SX204、SX750）の調査及び現地測量を12月19日まで実施し、12月20日に調査を終了して鉄建公團に引き渡した。

### 3 調査体制

#### 試掘確認調査

調査期間 平成14年6月3日～11日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 板屋越麟一）

調査 財團法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

<b>總 括</b>	黒井幸一（事務局長）
<b>管 理</b>	長谷川司郎（総務課長）
<b>度 務</b>	高野正司（総務課主任）
<b>調査總括</b>	岡本都栄（調査課長）
<b>調査指導</b>	高橋 保（調査課国土交通省・鉄道建設公団担当課長代理）
<b>調査担当</b>	尾崎高宏（調査課文化財調査員）
<b>調査職員</b>	田中一徳（調査課嘱託員）

#### 本発掘調査

鉄建公団からの調査要望が年度途中であったことから、埋文事業団では調査体制を整えることが不可能であった。県教委と埋文事業団で協議の結果、調査担当として職員1名を県教委から埋文事業団へ新たに派遣し、発掘業務を受託した業者からも調査員2名の参加を得て対応することとなった。調査体制は、以下に示すとおりである。

調査期間 平成14年9月9日～12月20日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 板屋越麟一）

調 査 財團法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

<b>總 括</b>	黒井幸一（事務局長）
<b>管 理</b>	長谷川司郎（総務課長）
<b>度 務</b>	高野正司（総務課主任）
<b>調査總括</b>	岡本都栄（調査課長）
<b>調査指導</b>	高橋 保（調査課国土交通省・鉄道建設公団担当課長代理）
<b>調査担当</b>	加藤 学（調査課文化財調査員）
<b>調査員</b>	高階敏朗（株式会社 野上建設興業） 沢田福宏（株式会社 野上建設興業）

#### 4 整理・報告の体制

遺構図面の基礎整理及び出土遺物の水洗・注記・接合・復元作業は、調査現場で発掘調査と並行して行った。遺構の図版編集・原稿及び遺物の実測・トレイス・図版・原稿は、平成14年12月から平成15年3月にかけて亀田町に作業所を設置して実施した。整理体制は、以下に示すとおりである。

整理期間 平成14年12月24日～平成15年3月31日

整理主体 新潟県教育委員会（教育長 板屋越麟一）

整 理 財團法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

<b>總 括</b>	黒井幸一（事務局長）
<b>管 理</b>	長谷川司郎（総務課長）
<b>度 務</b>	高野正司（総務課主任）
<b>整理總括</b>	岡本都栄（調査課長）
<b>整理指導</b>	高橋 保（調査課国土交通省・鉄道建設公団担当課長代理）
<b>整理担当</b>	加藤 学（調査課文化財調査員）
<b>調査員</b>	高階敏朗（株式会社 野上建設興業） 沢田福宏（株式会社 野上建設興業）

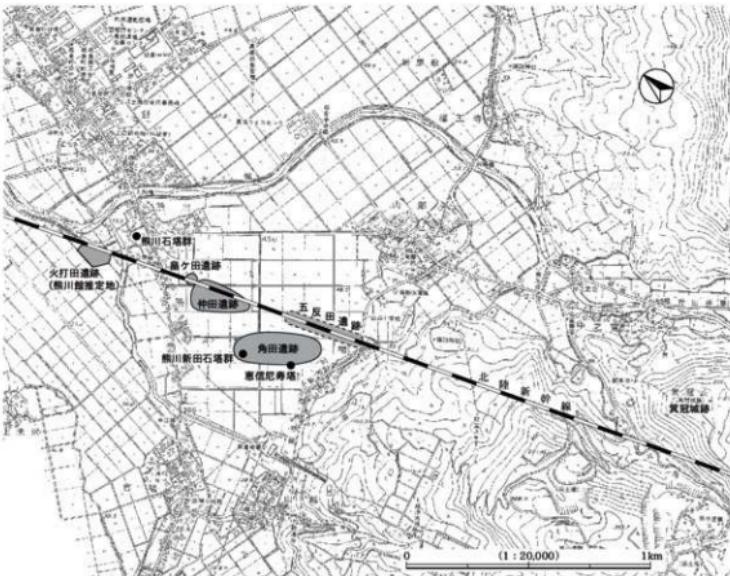
## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

### 1 遺跡の位置と地理的環境

仲田遺跡は、中頸城郡板倉町大字熊川字仲田87番地ほかに所在する。板倉町は、新潟県の南西部に展開する頸城平野の南東縁に位置する。頸城平野は、新井市周辺を頂点とし北側の海岸に向かって開く三角形を呈する平野であり、その中央西側には関川が北流し、南西に妙高山麓、南東に関田山地を控える。このような地勢により、平野は大局的に南から北に傾斜する。

本遺跡は、関田山地から連続する丘陵地帯の緩傾斜地に立地する。この緩傾斜地は、関川の支流である別所川・大熊川により作出された扇状地にあたる。本遺跡が所在する熊川集落は扇状地の末端部分に位置することから、熊川の「くま」は「隈」を指しているとも考えられている〔森沢2001〕。

周辺地域について、過去の絵図や更正図と照らし合わせると、大熊川の流路は大きく変更されてはいることがわかる。しかし、遺跡周辺を流れていた小熊川は、ほ場整備により直線的に変更されている。かつての小熊川は、細かな蛇行を繰り返しており、周辺地域はたびたび洪水に見舞われていたという。今回の調査範囲内からも大きく蛇行した旧流路が検出されており、そのことを窺い知ることができる。



第2図 遺跡の位置と周辺の地形  
(板倉町役場作成「板倉町全図その1」 1:10,000原図)

## 2 周辺の遺跡

頸南地域の古代・中世の遺跡分布は、第3図に示すとおりである。遺跡分布図は県教委の遺跡カードをもとに作成したものであり、沖積地の調査が進めば更に多数の遺跡が発見される可能性が高い。

### A 古代

古代の遺跡は、関川左岸の新井市と右岸の板倉町に集中する。『和名抄』にみえる頸南地域の郷名は栗原郷と板倉郷であり、遺跡の分布状況にも反映されている。このうち、発掘調査が実施された例は数少ないものの、新井市栗原遺跡は頸城郡衙か郡司層の居宅と推定されている〔坂井 1982・1983〕。そして、その周辺が頸城郡衙の中心地域であった可能性が指摘されている。また、上越市今池遺跡周辺は、発掘調査の結果から国衙・郡衙・国分寺の有力な候補地のひとつとされており、関川を挟んで対岸に位置する板倉町内の遺跡を考える上で重要である。

関川左岸の調査が進展する一方、右岸は調査事例が少なく不明な点が多い。しかし、板倉町の扇状地上には多数の遺跡が存在し、むしろ左岸よりも密集する状況にある。また、採集遺物の質・量を見る限り、小規模な遺跡が点在するという状況とは考えられない。近年、町史編さん事業に伴って収集された採集資料からは8・9世紀代の良好な遺跡の存在を窺い知ることができる。特に、旧小熊川沿いに位置する角田遺跡からは「厨」の墨書き土器が出土しており、有力な遺跡である可能性が高い。本調査においても旧小熊川の川底から「里」「南」の墨書き土器等の良好な資料が出土しており、関連性が想定される。周辺地域の開発史を検討する上で興味深い点といえよう。角田遺跡は、北陸新幹線建設に伴い発掘調査が計画されている五反田遺跡と隣接しており(第2図)、その成果を踏まえて総括する必要がある。

### B 中世

城館跡を除く中世遺跡の分布状況は、古代の状況と大きく相違しない。

中世遺跡の調査事例は少ないが、新井市において宮ノ本遺跡・馬場遺跡・月岡遺跡・田中前2遺跡などが調査している。特に、高柳館と隣接する宮ノ本遺跡・馬場遺跡の調査からは、中世村落が一般の住居が単独で存在するのではなく、館と寺院という重要施設を村落の中心施設として位置付け存在していたことが指摘されており注目される。また、遺跡群は12世紀から16世紀にかけて継続するが、14世紀に起きた焼山の噴火という自然災害が大きな画期となっている。そして、これを境に館と寺院の配置が転換されているという〔高橋 1999〕。中世集落の変遷と画期を具体的にたどることができる貴重な事例といえよう。

城館についてはいくつかの詳しい研究〔伊藤 1966、加藤 1973、植木 1980、坂井 1986〕がある。頸城平野には、上杉謙信の居城として著名な春日山城をはじめ数多くの城館跡が存在するが、頸南地域においても春日山城の支城である鰐ヶ尾城(新井市)、烏坂城(新井市)、箕冠城(板倉町)があり、信越国境を守る重要な拠点となった〔花ヶ前 1986〕。特に、仲田遺跡を考える上で箕冠城の存在は重要である。遺跡が所在する熊川地区は、戦国期に箕冠城の城下町の一部であったものが、近世に集落へ移行したものとされており〔小村 1989〕、関連性を視野に入れておく必要がある。

箕冠城は、板倉町山部に位置する標高237mの独立峰に築かれた典型的な山城である。宝曆6(1756)

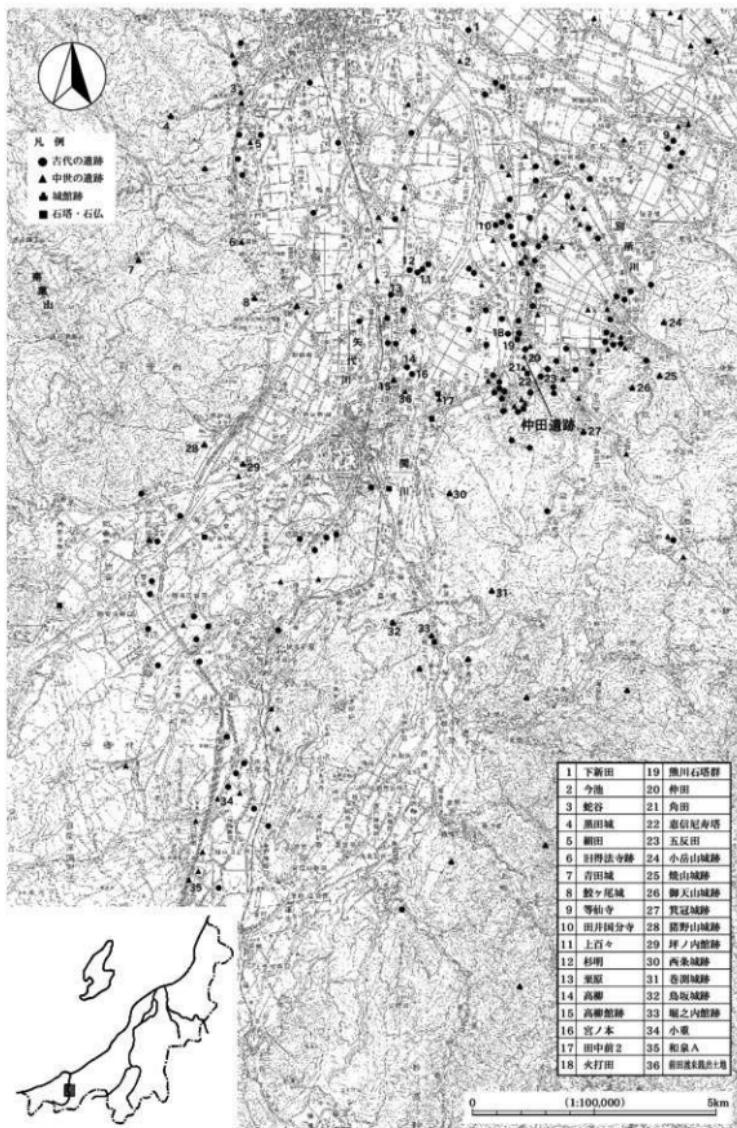
年の『越後名寄』では「ミカブリ城」、天保2（1831）年の『越後古城誌』では「美加不里城」と記録されている。越後上杉家の重臣である大熊備前守政秀の居城であったが、弘治2年（1556）に城主・大熊朝秀が武田信玄の誘いに応じて謀反を起こした際に謙信に攻め落とされたという伝説がある。これ以降、箕冠城については文献に登場していない〔花ヶ前1986〕。城山全体には郭・空堀・土塁・鎧井戸・清水などの遺構が良好な状態で残存しており、周囲には御天山城・焼山城・小岳山城などの砦群もある。

箕冠城主の館跡は明らかでないが、熊川館跡（大字熊川・大字大熊川）が箕冠城築城以前の大熊氏の旧跡と考えられている〔浅見・平野1986〕（第2図）。天和3（1683）年の「熊川村御検地水帳」には「たてノ内」「中田」の地名が登場する。この「たてノ内」が初期の大熊氏の館跡と推定されている。しかし、平成12年には板倉町教育委員会が、平成13年には北陸新幹線建設に伴い埋文事業団が熊川館推定地（火打田遺跡）を確認調査しているが、館の存在を裏付ける資料は得られていない。なお、箕冠城の近隣には、熊川館のほか針館・山越館・山部館・不動新田館・宮島館・国川館などが存在するとされる〔伊藤1966〕が、宮島館を除けばいずれも具体的な位置・時期・内容が明らかでない。

石塔を中心とする中世の石造物は多数分布する。その多くが中世後期に属するものとされている〔加藤1973〕。現在の位置が造立された場所とは限らないが、ことさら遠く離れた場所に運ぶことは考え難いことから、石塔の広汎な分布は、中世後期には広く集落が分布していたことを示すものと思われる。

正保2（1645）年の『正保国絵図』には、頸南地域の地名を確認できる。このうち本田村が分布するのは新井市街地より北側あるいは北東側の地域であり、地形区分の上では扇状地・氾濫原の沖積地である。こうした地域は、古代・中世を通じて安定した耕地が広がっていたと推察される。館跡の分布状況も本田村の分布と重複する傾向がうかがわれ、館の存立基盤が一面では農業生産にあることを示すものと考えられる。ただし、現在みるような一面に広がるという景観は、近世の用水の完備などによって、執拗に水田開発がなされた結果と考えられる〔坂井1985〕。

なお、本遺跡周辺には、淨土真宗の開祖である親鸞聖人の妻・恵信尼によって建立されたとされる供養塔、関山三社権現と並んで信仰の中心となった山岳寺院の山寺薬師等が存在する。本地域には、中世に由来する遺跡のほかに山城・石造物・寺院が多数存在しており、該期の研究において興味深い地域ということができる。また、周辺において中世の集落跡が調査された事例は数少なく、本調査が頸南地域の中世史を解明する上で重要な意味をもつものと考えられる。



第3図 遺跡の位置と周辺の遺跡  
 国土地理院発行「高田東部」「高田西部」「熊山」「妙高山」 1 : 50,000原図

## 第III章 調査の概要

### 1 グリッドの設定

仲田遺跡の本発掘調査対象地は、北陸新幹線法線内の幅23m、長さ230mと細長い範囲である。したがって、グリッド設定を地形や方位にあわせると、調査時に誤認する恐れがあった。そこで、細長い法線に平行するように設定することで、グリッドの誤認を防ぎ、作業の効率化を図ることとした。グリッドの主軸は、センター杭STA171K060（長野市の基点から171.06kmの地点、世界測地系X = 115644.668、Y = -18573.819）を基点とし、センターライン上に設定した。方位は真北から30.44°西偏している。なお、調査範囲内における主なセンター杭の座標は、171K000でX = 115592.736・Y = -18543.768、170K900でX = 115506.182・Y = -18493.684である。

グリッドは、大小2種あり、大グリッドは10m四方を単位とし、小グリッドは大グリッドを2m四方に25分したものである（第4図）。大グリッドの呼称は、センター杭の方向を算用数字、それと直交する方向をアルファベットとし、両者の組み合わせにより表示した。例えば、基準としたセンター杭171K060の南側の区画は「5B」とした。小グリッドは、1～25の算用数字で表し、北西隅を1、南東隅を25とし、「5B15」のように大グリッド表示の後に付して呼称した。

### 2 基本層序

調査範囲の総延長は230mにも及ぶが、土層の堆積状況は基本的に変化しない（第6図）。その内容は次に示すとおりであるが、北東側にむかって大きく傾斜しており、低地部分のみに遺物をわずかに含む特有の土層が存在した。一方、遺構が多数存在する陸の部分では、包含層は存在しなかった。過去の場所整備で遺跡の広範囲に影響が及んだものと考えられ、擾乱部分も存在した。なお、遺跡は古墳時代（7世紀後半）～室町時代（15世紀）にかけて形成されているが、複数の遺物包含層や遺構確認面を認めることはできなかった。

I a層：灰色シルト。表土層。

I b層：暗黃灰色シルト。直徑5mmほどの炭化物をまばらに含む。

II a層：暗黃灰色シルト。I b層を基層とするが、直徑1mmほどの黄橙色粒子を多量に含む。

II b層：灰褐色シルト。II a層と共に鉄分沈着により赤みを帯びる。直徑1mmの白色粒子を含む。

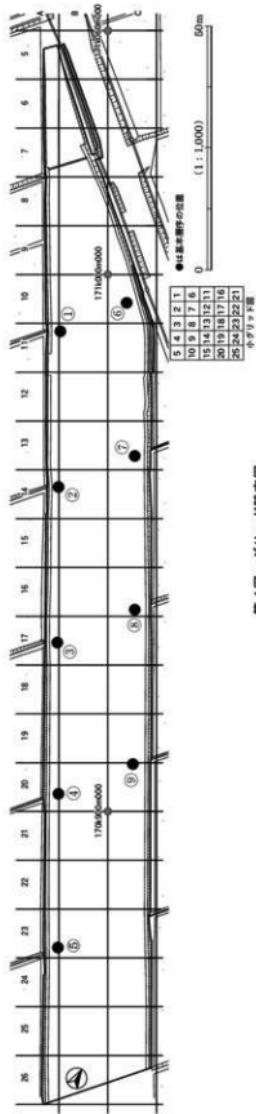
III層：黄灰色シルト。直徑1mmの白色粒子を含みII b層と共に鉄分沈着により赤みを帯びる。

IV層：褐灰色シルト。遺物をわずかに含む遺物包含層。直徑5mm以下の炭化物をごくまばらに含み、III層より砂質。低地側のみに認められる。

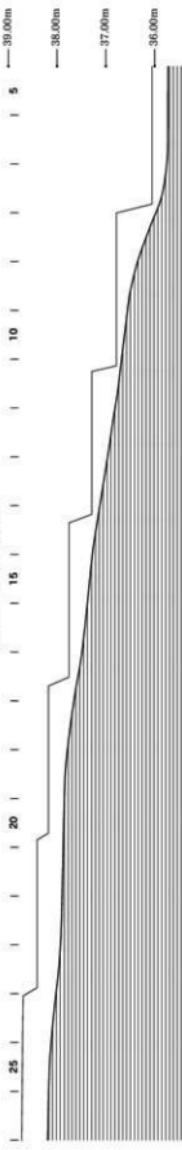
V層：灰色砂質シルト。遺構の地山となるVI層を基層としながらも、褐灰色シルトをマーブル状に含む。

IV層とVI層の漸移層で、低地側のみに認められる。

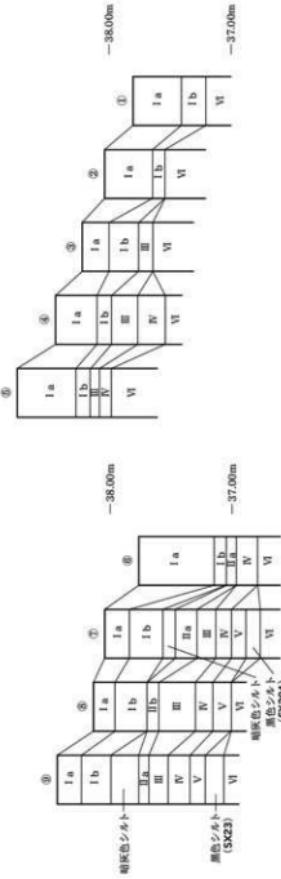
VI層：明黄褐色砂質シルト。砂質の強い地山層であり、遺構確認面である。粒子は細かく均質。部分的に灰色を呈するところもある。



第4図 グリッド配置図



第5図 調査区内レベーショングリッド断面図



第6図 土壌柱状図

## 第IV章 遺構

### 1 概要

遺構は、南から北へ蛇行しながら流れる川跡（SX23・SX204・SX750）の左岸から検出された。この川跡は、かつて遺跡周辺を蛇行しながら流れていた小熊川の旧流路と考えられ、出土遺物から9～11世紀頃のものと考えられる。旧地形は、この川跡が存在する東側に向かって傾斜しており、遺構はより高く安定した西側に集中する。検出された遺構は、溝17条、掘立柱建物31棟、井戸85基、土坑59基、ビット2,466基、方形竪穴状遺構1基、竪穴住居1軒等である。これらの遺構には、古墳時代後期（7世紀後半）、古代（9・10世紀）、中世（11世紀後半～13世紀・15世紀）のものがあるが、竪穴住居と土坑のごく一部が古代以前のものであるほかは、ほとんどが中世に属する。すなわち、多くの遺構が形成された頃に川が存在したと考えられる。集落の範囲は、川跡によって南・北・東の端を把握することができた一方、調査範囲の西側に延伸することは確実である。調査範囲の西側は、は場整備により設置された排水路付近で大きな段差があり、その付近まで集落跡が広がっていたものと考えられる（第2図）。

遺構の分布密度には濃淡が認められたが、の中でも掘立柱建物が集中する2つの範囲（建物A・B群、図版1）が認識された。建物A群（8～12例）は、最も遺構密度が高い範囲で、掘立柱建物・井戸等が多数検出されている。掘立柱建物は17棟認識されているが、1棟を除けば建物同士が重複する。多いか所では、同程度の建物が4棟重複するものがあり、建替えの結果を反映するものと考えられる。また、建物が重複する範囲はビットが密集する範囲とほぼ一致しており、認識された以上に多くの建物が重複する可能性が高い。井戸は、建物を避けるように分布する傾向にあるが、重複するものも認められる。溝は大小5条検出されており、掘立柱建物や屋敷を区画するもの、井戸の排水路の役割を担うもののが存在する。

建物B群（14・15例）は、建物A群よりも密度は少ないものの、多数の遺構が重複する。掘立柱建物は7棟確認されており、うち5棟が重複する。ビットは建物が存在する範囲に集中し、その周辺は稀薄である。井戸は掘立柱建物と一部で重複するが、大半は建物の北側もしくは東側に位置し、配置に規則性が認められる。溝は大小11条確認され、建物の桁行方向の両側に並列しており、雨落ち溝の可能性もあるが、建物は一方の溝に寄って配置されていることから、区画溝と判断したほうが適当と考えられる。

なお、これら多数検出された中世の遺構については、切り合い関係・出土遺物・覆土の分類から、おむね3～4時期に区分することが可能であった。本遺跡は、中世集落の変遷を具体的に把握できる稀有な事例といえ、今後の研究に多くの情報をもたらすものと考えられる。

### 2 基本方針

遺構の説明には、本文・観察表・図面図版・写真図版を用いる。

本文は、遺構の種別ごとに提示することとする。ここでは、個別の記載を行わず、観察表で示しきれないと情報を盛り込むことを基本とした。したがって、個別遺構の情報については、観察表を参照されたい。

観察表は、遺構種別ごとに提示した。遺構の内容を等質的かつ的確に示すべく工夫した。平面形態及び

断面形態の分類は、『和泉A遺跡』の分類（第7図）[荒川・加藤1999]に従った。遺構の切り合い関係については、不等記号を用いて「新>旧」のように示した。また、観察表には検索という側面からの情報も付加することとし、各種観察項目のほかに、図面図版番号、報告遺物番号を加えることで対照しやすくした。

図面図版は、1/400の全体図、1/120の分割平面図、1/40のセクション図、1/80のエレベーション図を基本とし、遺構の個別平面図は分割平面図をもって提示することとした。したがって、分割平面図とセクション図を対照する構成となっている。ただし、遺構密集範囲や遺物出土状況に関する平面図を分割平面図で示すことは難しく、1/60の分割平面図及び1/20、1/40の個別平面図をもって示した。なお、セクション図の土層注記は、農林水産省農林水産技術会議事務局・（財）日本色彩研究所監修『新版 標準土色帖』に沿った色調を記載した。また、注記にあたっては、層位間の相対差を示すことに留意した。

写真図版は、特に重要な遺構、遺存状態の良好な遺構、特徴をよく捉えられるカットを選択して掲載したため、すべての遺構を網羅していない。また、図面図版に反映できなかった情報を補完する観点からも選択した。なお、写真図版については、おむね遺構種別ごとに遺構番号順に掲載することとした。

遺構名は遺構種別の略号と通し番号を組み合わせて表記した。遺構種別の略号は、溝=SD、掘立柱建物=SB、ピット=P、井戸=SE、土坑・方形竪穴状遺構=SK、杭列=SA、竪穴住居=SI、性格不明遺構及び川跡=SXとした。遺構番号は、層位・種別に関係なく通し番号としている。ただし、掘立柱建物及び杭列については、その都度別途に番号を付した。

### 3 遺構各説

#### 1) 川 跡

調査区の北東側には、小熊川の旧流路と考えられる川跡が検出された。蛇行しながらおむね南から北に向かって流れおり、調査範囲内外を出入りするよう検出された。便宜上、SX23・SX204・SX750と分割して呼称したが、川跡は一連のものである可能性がある。出土遺物からは、古代～中世前期の流路と想定され、遺跡の形成時期に存在したものと考えられる。遺構は、この川跡と平行するように分布しており、また川跡に向かって分布が稀薄になる。すなわち、流路を強く意識して形成された集落と考えられる。

SX23 21・22列付近では南西から北東方向に流れ、両岸は急激に落ち込む。20列付近から流れを大きく北に変え、川岸は緩やかに落ち込み中段を持っている。確認面での最大幅は約15m、幅8m、深さは最深部で2m（現地表-3m）ほどである。覆土上位は、暗青灰色及び青黒色シルトで、中層から下層にかけては腐植物の多い砂層と、砂・小礫を多く含む層とが交互に堆積している。遺物は上位（1層）で珠洲焼等12世紀の遺物（59～61）が、河床の砂礫層（8層）からは古墳時代後期及び奈良・平安時代の遺物（12～20）が出土している。河床出土遺物の年代的下限は9世紀であり、その頃に流路が最も発達したものと考えられる。ただし、上層出土遺物も川縁（岸寄り）で50cmほどの深さから出土しており、中



第7図 遺構の平面形態と断面形態の分類

世前期には川は浅くなっているものの埋没しきっていない可能性が高い。

**SX204** 12・13列の東側に位置する。検出は左岸の川縁のみであり全貌は不明であるが、SX23同様に段を有して急激に落ち込むことが明らかになった。流路は南東から12列付近で大きく屈曲して北東方向へ流路を変える。発掘した深さは1.4mほどであるが、河床面まで検出されておらず実際はさらに深い。覆土は、上位～中位にかけてオリーブ黒色シルトと黒色シルトが互層堆積し、下位には腐植物を含むオリーブ黄色シルトが厚く堆積していた。これらの土層には、イネを主体にヨシ属やウシクサ族、キビ族などの灰や灰化しきれなかった炭片が多量に混入していることがプラント・オバル分析から指摘されている。そして、灰を廃棄した結果SX204が埋没したとされている。遺物は、1層からは12世紀、2～4層からは11世紀後半、5層からは9世紀の土器が出土している。遺物の層位的出土状況を鑑みれば、12世紀には浅い流路が残存した可能性があるが、13世紀以降は川縁がほぼ完全に埋没したものと考えられる。

**SX750** 川縁のみの検出の為、規模等の詳細は不明である。川縁は東西方向を示し、SX23・SX204と同様に段をもちらん緩やかに落ち込む。覆土上層は、暗青灰色砂質シルトで、下層は砂質土である。遺物は上層から珠洲焼V期に比定される擂鉢（62）が出土している。検出された川跡の中では、最も新しい段階まで継続された可能性がある。

## 2) 溝

本遺跡では計17条の溝が検出された。SD106以外はすべて東西方向を示しており、SD201はL字の区画溝である。そして、これらと平行して掘立柱建物が構築される状況にある。したがって、その多くは、建物や屋敷を区画したものと考えられる。溝は、規模と断面形状によって4種類に分類することができる。

**1類** 断面が弧状をなす、幅40cm、深さ10～20cmほどの小規模な溝である。SD13・107・111・116・117・1021・1022が該当する。掘立柱建物に隣接して配置されるものが多く、主軸方向も共通する。したがって、これらの建物に伴う区画溝あるいは付帯溝と考えられる。SD101にはSB18～21が<sup>a</sup>、SD107にはSB15が<sup>b</sup>、SD117にはSB23が平行して配置される。いずれの建物も東西棟であり、溝に沿うように構築される様子が理解される。また、SD111・1022・116は、特に規模の小さな溝であるが等間隔で並列しており、同時期に位置付けられる可能性がある。このほかの溝の時期については、隣接して主軸が共通する建物と同時期と考えられる。時期決定の詳細については後述する。

**2類** 断面が弧状をなす、幅120cm、深さ30～40cmほどの規模の大きな溝である。SD14・101・102・106が該当する。1類に比べ規模が大きく掘り形もしっかりしている。SD106を除けば、主軸方向はほぼ東西方向を示しており、溝同士はほぼ平行関係にある。細い溝と平行して分布するのが特徴的であり、SD102にはSD117、SD14にはSD13が付帯するような状況にある。SD13とSD14は合流していたものの、相互に切り合い関係を認めるることはできなかった。SD101の西側は細く、階段状に掘り込まれていることが特徴的であった。建物との関係は、SD14とSD102の間にSB22とSB23が、SD101の西側部分の北側にはSB17～SB21が位置する。このうちSB17～SB21は、SD101とSD111もしくはSD107とに挟まれた範囲から検出されており、雨落ち溝として機能した可能性もある。しかし、三者は方向が異なることから並存しなかった可能性が考えられる。並存したとすればSD111に可能性を見出せる。しかし、建物はSD101・SD111のどちらかに沿うように建てられていることを勘案すれば、雨落ち溝というよりは区画溝の可能性がより高い。なお、これらの溝は、川跡側に明瞭な立ち上がりを認めることができなかつた。溜まった雨水は自然に流れ落ちる構造になつておらず、排水溝としての機

能も果たしたことが予想される。時期については出土遺物が少なく判断しかねるところがあるが、12世紀の遺物が主体である。

**3類** 平面形はほぼ直角に曲がるL字をなし、断面形はV字を基本とする規模の大きな溝である。建物A群を区画するSD201が相当する。溝の内側には掘立柱建物・井戸・土坑が多数存在するが、主軸方向が共通する建物が5棟(SB4・5・24・25・30)存在する。本遺跡で最も規模の大きな溝で幅180～120cm、深さ70cmなどを測る。断面形状は東西方向がV字状であるが、南北方向が台形状をなす。

覆土は、東西方向と南北方向とで、土色・土質は若干異なるものの基本的に共通する。そのうち最上層(1層)は地山ブロックを主体とする堆積で人為的に埋め戻された可能性が極めて高い。切り合い関係はSE208・212・213・266・SD202・203・SX204との間に認められるが、これらの遺構すべてを切っている。本遺跡で最も新しい段階の遺構であり、出土遺物も珠洲焼Ⅴ期に比定され15世紀に位置付けられる。遺物は大半が1層からの出土であるが、埋め戻し土であることから遺構に伴わない珠洲焼Ⅰ期が混在する。下位の3層においては、南東角の底面から被熱した人頭大の礫十数個がまとまって出土した。3層からは、木製品(226)及び鉄製品(161)が1点ずつ出土したのみである。

SD201は、平面形状から方形を意識した区画溝と考えられるが、調査範囲内からは対応する溝が検出されていない。そのかわりに川跡SX750が検出された。SX750はSX23・SX204と一緒にものと考えられるが、珠洲焼Ⅴ期に比定される資料(62)が覆土上部から出土しており、SD201が機能した段階では完全に埋没していないものと考えられる。SX750の川縁は、SD201の東西方向とほぼ主軸方向も共通しており、自然地形を利用して方形区画を作出した可能性がある。SX750の川縁を区画の他端と想定した場合、規模は南北約50mの方形区画が想定される。また、SD201は西～東・南～北に向かって緩やかに傾斜している。すなわち、区画溝内の雨水等は河川に流れ込む構造であったと考えられる。

**4類** 井戸と低地を連結する小規模な溝である。SD32・SD202・SD203が該当する。SD32はSE31と、SD202はSE205あるいはSE206と連結している。SD203は直接連結していないが、溝の延長上のSE265と連結していた可能性が考えられる。井戸と溝との切り合い関係は不明であるが、覆土・配置の様子からほぼ並存した可能性が高い。溝は井戸を起点として川跡に向かって緩やかに傾斜し、直線状またはクランク状に流れている。井戸の排水に関する施設と考えられよう。この井戸と溝が機能した段階では、川跡SX204はほぼ埋没していたと考えられるが、排水先は低地であることから不都合はなかったと考えられる。

### 3) 掘立柱建物

調査区内では31棟の掘立柱建物を確認した。その分布は、調査区のほぼ全域にわたるが、調査範囲の西側にさらに建物群が展開することが推測される。最も密度が高いのは建物A群(8～12列)で17棟、建物B群(14・15列)で7棟であり全体の77%を占め、前述のとおり少なくとも4～5棟重複するものもある。この分布は、ピットの分布状況とほぼ合致しており、認識された31棟より多数の建物が存在したことが推察される。また、側柱建物はピットが密集する範囲から、総柱建物は稀薄な範囲から検出されている。すなわち、側柱建物は一定の範囲でほぼ重複して分布するのに対し、総柱建物が完全に重複して検出されることはない。これは、建替え頻度の相違を反映している可能性が高い。

構造は、側柱建物が24棟(SB1・2・4・7・9・10～21・23・25・27～31)、総柱建物が7棟(SB3・5・6・8・22・24・26)で側柱建物が全体の77%を占める。庇または張り出し部分を持つ可能

性がある建物は、側柱建物で3棟 (SB4・7・9)、総柱建物で3棟 (SB6・22・24) の計6棟である。桁行は、2間の建物が1棟 (SB13)、2間+1間が4棟 (SB4・7・9・22)、3間が12棟 (SB1・8・10・11・17~20・26・27・28・31)、3間+1間が2棟 (SB6・24)、4間が5棟 (SB2・12・21・25・30)、5間が1棟 (SB15)、2間以上が3棟 (SB14・23・29)、3間以上が3棟 (SB3・5・16) で、3間の建物が全体の40%を占める。梁間は1間の建物が6棟 (SB15・16・18~21)、2間が20棟 (SB1~8・11・13・14・17・22~24・26・28~31)、3間が5棟 (SB9・10・12・25・27) で、2間の建物が全体の65%を占める。本遺跡で主体となる建物の柱間数は桁行3間・梁間2間の建物といえる。

棟方向は、南北棟15棟、東西棟16棟が認められた。建物A群では、南北棟13棟、東西棟5棟が認められ、南北棟が主体をなすことがわかる。建物B群では、すべて東西棟で、南北棟は確認できなかつた。これは、並列する溝による区画と関係をもつて設置された可能性がある。総柱建物は7棟の内6棟 (SB3・5・6・22・24・26) が南北棟であり、東西棟はSB8の1棟のみであった。

規模は、最大級の建物で48.8m<sup>2</sup>、最小のもので16.56m<sup>2</sup>であり、総柱・側柱建物を問わず総体的に南北棟が大きく、東西棟が小さい傾向にある。建物A群は、大型の建物が比較的目立ち、面積は48.8m<sup>2</sup> (SB24) ~ 44.89m<sup>2</sup> (SB2) で、本遺跡で最も大型の建物に属する。総柱建物や規模の大きな側柱建物は南北棟に限定され、東西棟はSB25のように面積40.48m<sup>2</sup>と規模の大きなものも存在するが、概して建物の面積は約30m<sup>2</sup>前後のものが多い。また、建物B群は、建物A群よりも小規模な建物であった。東西棟の細長い側柱建物で、SB17を除き梁間は1間に限定されていた。桁行が調査範囲西側に延伸することから、観察表に示した面積より規模の大きな建物である可能性が高い。

柱穴は、平面形状が円形または梢円形のものが最も多く、長梢円形・台形・方形・不整形も僅かながら存在する。直径や深さについては、建物内でも相違がある。覆土最上層は、黒色シルト・暗褐色シルト・地山ブロックを多量に含むシルトの3種類がある。それらの切り合い関係を観察すると、概して黒いほど古く、明るいほど新しい様相を示し、地山ブロックを多量に含むものが最も新しい段階に位置付けられる。堆積状況は、柱痕が認められるもの、その周囲を固めたものが認められた。また、SB6のP299は、底面全体が堅く紺まり、鉄分が沈着していた(図版63)。土層の堆積は単層で、柱根・柱痕は認められなかつたが、柱が掘えられた痕跡と考えられる。なお、SB6の他の柱穴ではこのような状態は見られなかつた。

主軸方向については、本報告では南北方向に対する建物軸の傾きを示すこととする。したがつて、南北棟は桁行(長軸)を、東西棟は梁間(短軸)を主軸方向とし、南北棟と東西棟の組み合わせを示すこととした。このような前提で建物の主軸方向をみると、南北を軸にしてN7°E~N7°Wの14°の範囲に収まるが、大きく3群に分類することができる(第8図)。1群は、N4°E~N7°Eの3度以内に収まるもので、SB3・10~12・15・18・20・28・29・31の10棟が該当する(第8図・段階I)。分布は、建物A群とB群にほぼ限定される。2群は、N0°~N2°Eの2度以内に収まるものでSB1・6~9・16・17・19・21・23・26・27・31の12棟が該当し(第8図・段階II・III)。1群と同様の分布状況を示すが、調査区南側の17列で1棟 (SB23)、19列で1棟 (SB1) が存在し、より広く分布している。3群はN5°W~N7°Wの2度以内に収まるものでSB2・4・5・13・14・22・24・25・30の9棟が該当する(第8図・段階IV)。建物A群の5棟 (SB4・5・24・25・30)を中心、建物A・B群の間に位置する13列で2棟 (SB13・14)、調査区南側の17列で1棟 (SB22)、19列で1棟 (SB2) が存在する。

切り合い関係は、井戸・土坑・溝・ピットとの間に認められ、特に建物A・B群はその度合いが著しかつた。そこで、平面と断面の2面から観察して調査したが、明瞭な切り合い関係を示せるものは、ごく

僅かであった。建物間の切り合い関係を把握できるもの、井戸を介して建物間の切り合い関係を把握できるものは建物A群で認められた。11B7に位置するSB7 (P330) と SB25 (P289) の切り合いから、SB7が切られており SB25が新しいことは明らかである(図版26)。次に、11A25に位置するSE205・SE206・SB6 (P1416)・SB29 (P261)・SB30 (P1476・P1542)の切り合い関係は、SE206がSE205・SB29に切られ、SB29はSE205に切られる。さらに、SE205はSB6・SB30に切られる(図版29・31)。この新旧関係を整理すると、古い順から SE206 → SB29 → SE205 → SB6・SB30となる。さらに、これを主軸方位の分類と対照すると、SB29が1群、SB6・7が2群、SB25・30が3群に属する。このことから、主軸方向1群の建物が最も古く位置付けられ、次いで2群、3群の順に推移するものと考えられた(第8図)。すなわち、建物の主軸方向が、反時計回りに移行していることが読み取ることができ

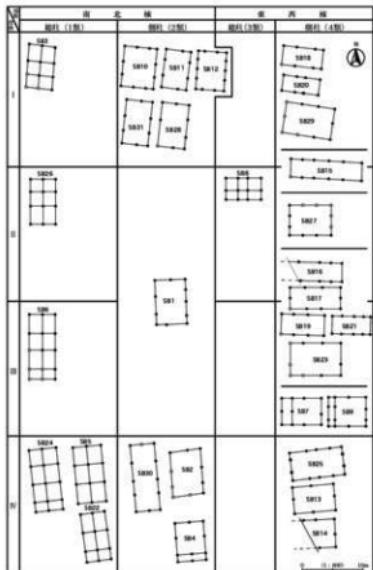
る。また、このような変遷観と建物の形態構成を照合すると、後出のものに建物の大型化、張り出し部(庇)の顕在化を認めることができる。すなわち、この建物の主軸方向による3分類群は時期差を反映しているものと考えられ、さらに各群で建物の形態構成が異なるものと理解される。

このように主軸方向にみられる3分類群は、大きく3時期に区分された。さらに2群については、建物A群で切り合い関係が一部で把握されており、また3群に顕著に認められる大型の総柱建物や張り出し部(庇)を有するものを後出的なものと判断し2期に細分した。そして、主軸方向の1群をⅠ期、2群の古段階をⅡ期・新段階をⅢ期、3群をⅣ期と整理した。Ⅰ期に属するものはSB3・10～12・15・18・20・28・29・31の10棟、Ⅱ期はSB8・26・27の3棟、Ⅲ期はSB6・7・9の3棟、Ⅱ期あるいはⅢ期はSB1・16・17・19・21・23の6棟、Ⅳ期は、SB2・4・5・13・14・22・24・25・30の9棟である(第8図)。

遺物は、柱穴の覆土から僅かに出土しているが、細片が多く時期を特定できるものは少ない。SB21 (P1020) からは錢貨が10枚束ねられた状態で出土しており(168～174)、地鎮祭との関連を想起させる。柱根は、SB5 (P528)・SB11 (P419)・SB13 (P1247)・SB27 (P658)・SB31 (P439)で検出された。

**総柱構造の掘立柱建物について**

総柱建物の分布を見ると、17列で検出されているSB22を除けば、調査区北よりのL字の区画溝(SD201)の内側とその隔壁地に限定される。構造は3間×2間に4棟(SB3・5・8・26)、2間×2間に張出し部が付随したもののが1棟(SB22)、3間×2間に張出し部が付随したもののが2棟(SB6・24)で、3間×2間に張出し部が付随したもののが2棟(SB1・16)であるほかは全て南北棟である。規模は最大で



第8図 掘立柱建物の構成と変遷

48.88m<sup>2</sup>、最小で20.65m<sup>2</sup>である。最小の東西棟SB8を除けば面積30m<sup>2</sup>以上の建物から構成されており、本遺跡で検出された建物では平均的規模もしくはそれを上回る。言い換えると、側柱建物より概して大型といえる。

時期ごとに総柱建物の特徴を見ると、Ⅰ期はSB3、Ⅱ期はSB8・26、Ⅲ期はSB6、Ⅳ期はSB5・22・24が該当する。各期とも数が少いながらも安定的に加わるものと理解される。分布は、Ⅰ期はL字区画溝内・建物A群の北側に隣接する8列に、Ⅱ・Ⅲ期は建物A群に、Ⅳ期は建物A群に2棟と調査区南側の17列に1棟が認められる。構造は、Ⅰ・Ⅱ期が3間×2間で、Ⅲ期が3間×2間に張出し部をもつもの、Ⅳ期が3間×2間と3間×2間に張出し部をもつ建物から構成されている。規模はⅠ期が30.71m<sup>2</sup>、Ⅱ期が20.65m<sup>2</sup>・31.5m<sup>2</sup>、Ⅲ期が47.3m<sup>2</sup>、Ⅳ期が33.62m<sup>2</sup>・44.89m<sup>2</sup>・48.88m<sup>2</sup>である。

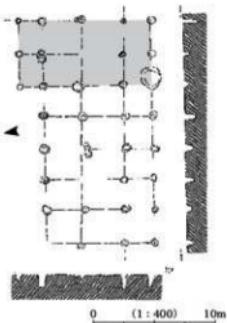
以上の状況を整理すると、構造は3間×2間がⅡ期まで継続し、Ⅲ期になると張出し部が付随する建物が登場し、Ⅳ期に継続することがわかる。面積は、Ⅰ・Ⅱ期がほぼ同規模で推移し、Ⅲ期・Ⅳ期に大型化する傾向を認めることができる。このような建物の変遷をたどれたことは重要であり、特に後出的要素を把握できることは重要である。しかし、15世紀(Ⅳ期)に今回指摘できたような建物が存在することは稀である。類例としては、長岡市三貫梨遺跡第1号建物跡(第9図)【駒形1987】を挙げることができる。三貫梨遺跡の建物は、3間×7間の東西棟が想定されているが、そのうち東端の2間を独立して認識すれば、2間×3間に張り出し部が付随する構造となり、規模の上でも仲田遺跡例に酷似する事例といえる。

#### 4) ピット

ピットは2,466基検出された。分布は、調査範囲のほぼ全域で認められるが、濃淡が明確に読み取れる。最も密度が濃いのは、建物A群とB群であり、建物が密に検出されている範囲と合致する。逆に稀薄なのは、調査区北端で最も標高の低い5~8列、南端で最も標高の高い21~27列、川縁である。

規模は、直径15~67cmで、30cm前後のものが主体をなす。深度は、10cmに満たない非常に浅いものから70cm前後の深いものまで様々あるが、主体は30cm前後である。しかし、深さに関しては、ほ場整備による削平や確認面の掘り下げによる影響を受けており、実際にはこれより総体的に深かったといえる。

堆積状況は、柱痕が認められるもの、その周囲を固めているもの等が認められた。P36・161・245・275・288・319・660・895・960・1037・1044・1174・1195・1199からは柱根が検出された。また、根固め石もしくは根絡み石が検出された事例がある。P623・649・655では拳大ほどの円礫が、P667では珠洲焼がピット底面に敷設されたり、側面に積み重ねられたりしている(図版4・64)。P103では机脚が、ピットの側面に貼りつくような状態で出土しており、これも根絡みに転用された事例と評価できる(図版63)。ただし、これらいずれのピットについても、掘立柱建物としては認識できていない。



第9図 三貫梨遺跡における掘立柱建物

出土遺物は、ほとんどが細片で時期決定が難しいものの、P259（147）・P329（83）・P723（146）からは土師器皿、P462（139）からは青磁碗、P1018・P1019は珠洲焼、P1045からは白磁碗（89）、P467（159）からは馬具（轡）、P468（160）からは鍵が出土した。このうち土師器皿はいずれも完形個体で、覆土最上部から正位の状態で出土している（図版63）。祭祀に関する遺物の可能性を指摘できよう。

また、10B25に位置するP387は特徴的な形状をなす。SE388の覆土を切って構築されており、平面形は楕円形で、断面形はU字状である。長径27cm・短径22cm・深さは120cmで、切り合っている井戸とほぼ同じ深さであった。直径に対する深さが大きすぎ、このような穴を掘り込むことは困難と考えられる。また、ピットは井戸の側壁に沿うように形成されており、側壁に立てかけるように柱を立てた後、井戸が埋め戻された可能性を指摘できよう。それにより、柱の安定化を図ったのであろう。

## 5) 杖 列

SD13・SD14の両脇をほぼ並行する2条の杭列を検出した。当初、2条の杭列を平行とする掘立柱建物の可能性も考えたが、柱間に対応関係が認められず、また溝との配置を考慮して杭列と判断した。時期については、SD13・SD14と平行関係にあることから、それと同时期と考えられる。

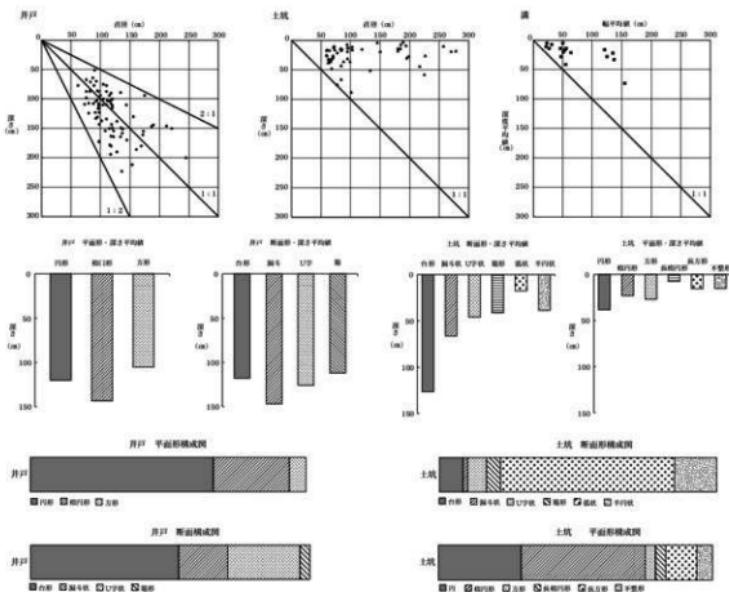
## 6) 井 戸

井戸状の遺構は、85基検出された。調査区のほぼ全域で検出されているが、特に建物A群とB群付近に集中しており、大きく2ヶ所に纏まりをもつ。この纏まりは掘立柱建物や柱穴が集中している範囲とほぼ合致し、建物の北・東側に分布するものが多い。建物に接するかのような分布状況は、中世において普遍的な状況〔水澤1993〕といえよう。しかし、他の遺構分布とは異なり、川縁の低地からも多数検出されていることは特徴的といえる。構造は、SE219・247の2基が石組みであるほかは、すべて素掘りである。素掘りの底部には僅かな凹みが認められるものがあるが、水溜施設と考えられる。

平面形は、円形と楕円形で全体の9割以上を占め、方形（SE205・236・242・502・511）が僅かながら存在する。断面形は、台形状が最も多く、形態的に連続するU字状と漏斗状を含めると9割以上を占め、箱状（SE205・381・506）が僅かに存在する。直径と深さの関係（第10図）は、比率1：1を前後するものが主体で、すべて1：2～2：1の間に収まる。直径は90cm～240cm、深さは51cm～223cmと様々であるが、直径・深さとも1mを前後するものが最も多い。これに対し、深さが140cmを超えるものについては直径100cm～150cm前後に収まり、比率は1：1～2：1に集中する。すなわち、深さに応じて直径が拡張されているわけではない。また、石組構造については掘り方が200cmを超え、直径と深さの比率は1：1ほどである。しかし、石組の内径は100cm前後と開口部径は深さよりも小さく、素掘り構造の傾向と相違しない。

覆土最上層は、大きく黒色シルト・暗褐色シルト・地山ブロックを主体とするものの3種類に分類できるが、黒色シルト・暗褐色シルトが大半を占め、調査区のほぼ全域に分布する。一方、地山ブロックを主体とするものは、区画溝SD201の内側に集中する。井戸から出土した遺物の年代観や切り合い関係の検討から、黒色シルト→暗褐色シルト→地山ブロックを多量に含むものという変遷をたどることができる。出土遺物から年代は、黒色シルトが11・12世紀、暗褐色シルトが13世紀、地山ブロック主体が15世紀に位置付けられる。すなわち、覆土最上層の分類から、おおむねの年代観を把握することができた。

堆積状況は、レンズ状堆積が主体であるが、斜位・水平堆積も比較的多く確認される。斜位堆積は、一



第10図 井戸・土坑・溝の計測値と分類別構成比

方向に偏る傾向が強く、埋土の供給が一方的であることがわかる。覆土は、地山ブロック、黒色・暗褐色シルト、腐植物が交互に堆積する。下位から中位は主に黒色シルト、中位からは腐植物、中位から上位は地山ブロックの堆積が多くみられた。SE213の腐植物層からは、イネ科草本類が一定方向に重なって検出されており、ヨシやアシが意図的に入れ込まれた可能性が高い（図版56）。これらの状況から判断すれば、多くの井戸が人為的に埋め戻された可能性が高いといえる。なお、SE22・206・208・215・221・507・1107の7基からは、炭化物の堆積層が認められた。

出土遺物は、珠洲焼・土師器・陶磁器・木製品・石製品・鉄製品がある。土器は、上位～中位にかけて多く、最上層の1層に集中する。そして、出土量は中位で減少し、下位からの出土はほとんどない。特に、SE208の1層からは土師器皿（96）の完形品が正位の状態で出土したことが特筆される。鉄製品も1層から土器類と共に出土するが多く、SE223の1層からは鉢賈（168）が出土している。このような状況を勘案すれば、井戸の埋め戻し時に一定の意図をもって埋設された可能性を指摘できる。一方、木製品は下位に特徴的に認められた黒色シルトから出土している。しかも、多数の製品が一括して出土するケースがある。特に、SE234（216～224）、SE1108（262～268）が顕著であるが、いずれも15世紀に位置付けられ、特定の年代に認められる事象とも評価できる。こういったケースは特例ともいえるが、出土層位が下位に偏ることは確かである。中位の腐植物層からも一定量出土するが、その量は下位の比ではない。石製品は、下位から特徴的な状態で出土したものがある。SE115の底部からは、凹石と球状の敲石が共伴する状況にあった。凹石と敲石の直徑は近似した値を示しており、セット関係として把握しうる

資料である。これらの状況に見られるように、層位ごとで出土する遺物の内容が異なる状況にあったといえる。

85基検出された井戸状遺構のうち、特徴的な3基について次に個別記載を行うこととした。

**SE247** 10C7・12に位置する石組井戸である。平面は楕円形、断面は下半部で段をもって小さくなるがおおむね台形状を呈する。掘り形の規模は、長径245cm×短径208cm×深さ200cmを測る。確認段階では、平面不整形のシミ状にプランが検出され、直径20～30cmほどの扁平礫が散在的に露呈していた。付近に存在した擾乱の状況と共通したものの遺構の可能性が想定されたため、平面的に掘り下げた結果、石組井戸であることが判明した。井戸側は平面円形、断面台形状である。石組の内径は、開口部で100cm、底部で50cmを測る。また、底面には直径40cm・深さ15cmほどの凹みが検出されたが、水溜施設と考えられる。礫は小口積みで基本的に互い違いに積み重ねられており、在地石材（安山岩・砂岩）が使用されていた。覆土は、上位が黄褐色の地山ブロック、中位～下位が黒褐色または黒色シルトで、水溜め内には1～3cmの小円礫が多量に含まれていた。この水溜状の凹みは、濾過装置と考えられよう。掘り方は、黄褐色シルトで地山に類似した土が充填されていた。裏込めと礫の積み重ねを交互に行って構築されたものと考えられるが、下半については掘り方が小さく、礫と掘り方とが接する状況にあった。なお、この井戸の底部は、透水層と考えられる細砂層を掘り抜いていた。地下水がここから供給され、水溜で沈殿・濾過されたものと考えられる。出土遺物は、上位の地山ブロック層から珠洲焼片3点が出土したが、これから詳細を判断することはできない。井戸の切り合い関係と覆土の状況から判断すれば15世紀の所産と考えられる。

**SE219** 11C11・16に位置する石組井戸である。平面円形、断面台形状を呈する。掘り形の規模は、長径212cm×短径192cm×深さ146cmを測る。当初、素掘りの井戸と認識して調査を進めたが、底部付近から石組構造が検出された。検出された石組は底面から3段のみである。礫は小口積みで基本的に互い違いに積み重ねられている。使用されていた礫は、安山岩・砂岩すべて在地石材である。井戸側の形状は、平面円形、断面台形状を呈する。内径は上面で65cm、底部で50cmを測る。底部に水溜め施設は認められなかった。覆土は、上位が黄褐色の地山ブロック、中位～下位が青灰色シルトである。掘り形の覆土は黒褐色土と黄褐色土の互層堆積で、井戸側の東側約半分には掘り形が存在しなかった。底部のみに認められた石組の配置も片側に偏っていた。すなわち、石組は掘り形の一方に寄せて構築された可能性が高い。出土遺物は上位の地山ブロックからごくわずかに出土しているが、時期を特定できるものは含まれていない。切り合い関係と多量の地山ブロックで埋め戻されている状況を勘案すれば15世紀の所産と思われる。

**SE224** 10B24に位置する素掘りの井戸である。平面楕円形、断面台形状を呈する。開口部で長径190cm×短径135cm×深さ144cmを測る。床面には並列して2つの水溜め施設が設置されている。当初、井戸同士が切り合っているものと考えたが断面観察の結果、単体の井戸であることが判明した。覆土は、中位～下位にかけて黄褐色の地山ブロックが厚く堆積し、水溜め施設を含む下位には黒色シルトが堆積していた。時期を特定できる遺物は含まれていなかったが、上位から鉄釘（162）が出土している。

## 7) 土 坑

土坑と判断した遺構は59基ある。その大半は、出土遺物がなく詳細な時期は不明であるが、中世の遺構と考えられる。分布状況は調査区全体に散在しているが、覆土の状況から古代の土坑と考えられるもの

は調査区南側に多く、中世と考えられるものは堀建柱建物の周辺に多く分布する。古代の遺物を伴うものはSK1017(23)で、中世の遺物を伴うものはSK193(85)・217(103)・122(113~115)・1000(117・116)がある。それぞれの土坑は形態、規模に差が認められるが、特に中世の土坑については、ある程度のまとまりがみられる。第10図は、全土坑の直径と深度および平面形・断面形をグラフ化したものである。これをみると直径50cm~100cm、深さ50cm以下の群と、直径180cm~200cm、深さ30cm以下の2群に大別することができる。また、平面形は円形・楕円形が半数以上を占める点においては井戸と共に通するものの、方形の比率がより高いことは特筆される。断面形は、浅い弧状が全体の約62%を占める。また、平面形と深度平均値の相関関係をグラフ化したところ、平面円形が最も深く平均38cm、不整形が最も低く平均15cmである。

### 8) 方形豎穴状遺構

SK21は、調査区北東側から検出された方形豎穴状遺構である。長軸9.2m、短軸3.1m、深さ0.6mで、主軸はN:9°-Wとほぼ南北方向に向いているものの若干西に偏り、掘立柱建物の主軸方向3群に共通する。断面は弧状で、底部はやや平坦となるが、焼土や硬化面等は確認されなかった。覆土は上位が暗青灰色シルト(地山ブロック)、中位~下位が青灰色シルトであり、中世の新しい段階の遺構覆土と共に通する。遺物は、中位より白磁碗(87)、上位からは珠洲焼の小破片が出土している。川跡SX23の縁に平行するように隣接しているが、主軸方向や遺構覆土の状況を勘案すれば、並存しない可能性も高い。むしろ、西側に位置するSB2とは長軸方向が一致しており、時期的に共通する可能性を指摘できる。

### 9) 豊穴住居

古墳時代後期(7世紀台後半)の豎穴住居1軒(SI1038)が検出された。しかし、中世の遺構が密集する範囲(建物B群)から検出されたため、残存状況は良好でない。また、ほ場整備による影響を大きく受けている範囲でもあり、掘り込みは最も深いところでも10cm程度しか検出できなかった。また、覆土は地山と酷似するため、サブトレンドを設定するなどして平面プランの把握に努めたが、明瞭な立ち上がりを確認することはできなかった。遺構の一部は、すでに損壊している可能性があり、結果として平面プランは歪な形状を示している。しかし、おおむね方形プランを示したであろうと考えられ、1辺4.5mほどの規模になるものと推測される。この住居に付随するであろうビットは3基確認されているが、それらに有意な配置は認められない。方形基調と仮定して、対角線上などにサブトレンドを設定したものの、把握できなかった。また、1基のビットからは瓶1個体(7)が一括出土している。

この豎穴住居を認識する契機となった竈は、南西隅に検出されている。周辺部の掘り込みは浅く、確認面において焼土が露出するような状況にあった。その南側には被熱した扁平な円礫が検出されており、竈の構造物と考えられる。また、焼織の南東側には、長胴甕3個体(1~4)と瓶1個体(6)がかたまって出土した。このような出土状況は上越市一ノ口遺跡の豎穴住居に共通する。ビット出土の瓶(7)、床面直上出土の楕(5)を含めて極めて良好な一括資料であり、土器の編年研究において重要な資料になるものと考えられる。なお、竈と連結する煙道として理解するのに適当な位置から溝状のSK168が検出されている。しかし、中世に特徴的に認められた黒色の覆土であり、豎穴住居に伴う可能性は低いと考えられた。

# 第V章 遺 物

## 1 概 要

仲田遺跡から出土した遺物には、古墳時代後期（7世紀後半）、古代（8・9・10世紀）、中世（11・12・13・15世紀）のものが存在する。遺物量は、平箱で土器が22箱、石製品・鉄製品が1箱、木製品が15箱、柱根が4箱である。古墳時代後期の遺物は、SI1038から一括出土した7世紀後半の上器群が注目される。古代の土器は、主に川跡から出土している。川跡SX23の河床砂礫層中からは、8世紀前半～9世紀の上器がまとまって出土した。8世紀前半の須恵器は、県内でも稀有な事例であり注目される。9世紀の須恵器には、「里」「南」の墨書が認められ、特に「里」は達筆な書体であり識字層の存在をうかがわせるものである。なお、SX23から出土した遺物は消耗の度合いが小さく、供給源となった遺跡は、さほど隔てない上流域にあると考えられる。中世の資料は、主に遺構から出土した。11世紀後半～13世紀及び15世紀の上器の存在が明らかになったが、中でも珠洲焼Ⅰ期の資料については、県内でも数少ない事例として注目される。また、井戸からは土器と木製品が良好なセット関係で出土しており注目される。川跡SX204においては、9世紀・11世紀後半・12世紀・15世紀の土器が層位的に出土しており、またそれらに火山灰が伴うことが明らかになっている。今後の土器編年研究の重要な指標になるものと考えられる。

## 2 土 器 (1~150)

土器の多くは、遺構から出土した。共伴関係を明示するため遺構単位で示し、さらにおおむね年代ごとに掲載することとした。また、すべての遺物について、遺構番号等の出土位置を併記することとした。

### A 古 墳 時 代

当期の遺構はSI1038とSK1022のみであり、そのほかは中世の遺構等に混在して出土した。出土遺物は、土師器甕・瓶・小型壺・椀がある。1～7はSI1038の一括出土遺物である。出土状況は、1～4・6が竈と考えられる周辺からまとめて出土しておりセット関係にあると考えられる。7は住居内ピットから、5は床面直上からの出土で、住居内の良好な一括資料である。

甕（1～4）は、器形から2類に分類できる。1類は、体部が細身かつ直線的で、口縁部は緩やかに外反するタイプ（1・3・4）。2類は、最大径が体部下部にあり下影れた器形で、口縁部は強く外反するタイプ（2）。1・2類とも調整方法は共通で、口縁部内外面はヨコナデされ、体部内・外面ともにハケ調整が行われる。外面は縦方向のハケメが主体で、底部縁辺部のみ横方向のハケ調整が行われる。内面は横方向のハケ調整が主体で、部分的に斜方向のハケメを残す。ハケメの幅は1・2が3cm前後とやや広く、3・4が2cm前後である。底部が残存しているものは1・4で、4は切り離し後、板目状の圧痕を残す。1～3は体部外面に煤の付着が確認され、口縁部内側は若干の摩滅が確認された。

瓶（6・7）は、共に把手を有するものである。体部の調整は、甕と同様に外面は縦方向、内面は横方向のハケ調整が行われる。しかし、甕は縦・横のハケメが顕著なのにに対し、瓶はやや斜方向を意識したも

の顕著である。把手部分は両者ともヘラケズリが行われ、取り付け部分はハケメを残す。6は体部中央部に把手が付き、口径と器高が1:1である。これに対し、7は体部上位1/3部分に把手が取り付けられ、器高は低く、口径と器高の比は1.2:1と口径が器高を上回っている。7には、体部下部に対角2か所の穿孔があり、黄子を受ける部材を通した孔と考えられる。また、器面の外外面に朱色の付着物が少量確認され赤彩された可能性もあるが、通常のそれとは異質である。使用痕は、6の外面体部下部の径12~14cm前後に特に摩滅が認められ、窓との接点と思われる。1~4の窓の頸部内径が12~13cmがあるので、これらの窓に伴つたものと考えられる。

椀(5)は、口縁部はやや内湾気味に立ち上がった後、端部をヨコナデにより外反させている。全体的に厚手に仕上げられ、底部内面はやや凸状である。

これら、SI1038出土資料は極めて良好な一括資料といえる。その形態的特徴やセット関係をみると、おむね一ノ口東編年〔鈴木・春日1994〕のIV期に比定され、7世紀後半に位置付けられると考えられる。なお、8・9は、中世の遺構からの出土であるが、おむね当期に比定される土器である。

## B 奈良時代

旧小熊川の川跡SX23の河床(8層)から、奈良時代の土器が出土した。これらの遺物は河床の砂礫層(8層)からの出土にもかかわらず、流水による磨滅を受けた痕跡はほとんど無い。その供給源はさほど距離を隔てない上流域にあると考えられる。

高杯(11)は、杯部外面下半はヘラケズリされ、内面はヘラミガキ後、黒色処理される。脚部外面は縦方向のヘラケズリが行われ、裾部分はヨコナデされる。内面はナデ調整されるが、輪積み痕を残す。

土師器の無台杯(15)は、全体的に厚手のつくりである。口縁部内・外はヨコナデされ、口縁端部は強いナデにより凹線状をなす。底部から体部下半は、不定方向のヘラケズリが行われる。器形や口縁端部の凹線の状況をみると中世土師器と共通するが、SX23の河床(8層)からは中世の遺物が出土していない。SX23において中世の遺物が出土したのは、間層を挟んだ上位からである。出土状況を勘案すれば、古墳時代後期の須恵器模倣杯と理解したほうが適当と考えられる。

須恵器無台杯(12・13)は、全体的に非常に精巧なつくりである。焼成も良好で器面はにぶい褐色である。体部内外面はロクロナデされ、体部外面下にはロクロナデにより明瞭な稜線を残し、そこから口縁部まで緩やかに外反する。底部はヘラ切後不定方向のヘラケズリが行われ、中央部分に×印の線刻が施される。器形、胎土・焼成等の特徴から信州方面と共通する。

須恵器有台杯(14)は、口径15.5cmの大形品であり、古い段階の様相を認めることができる。

これらSX23の河床から出土した一群の土器は、須恵器の形態・成形方法・セット関係を勘案すれば今池編年〔坂井1984〕のI期に比定され、8世紀前半に位置付けられる。

## C 平安時代

本遺跡における平安時代(9・10世紀)の遺構・遺物は少なく、分布も散在的である。当期の遺物は、川跡からの出土が最も多い。SX204の最下層から9世紀の須恵器(25)が、SX23の河床(8層)からは8世紀後半~9世紀の須恵器が出土している。SX23出土資料は、奈良時代の遺物同様にほとんど磨滅しておらず、供給源から大きく流下していないものと考えられる。中でも、「里」・「南」と記された墨書き土器(17・18)は注目される。特に「里」は正しい筆順で書かれた達筆な書体であり、識字層の存在を想定さ

せる資料である。また、SX23の上流域には角田遺跡があり、「厨」の墨書き土器が採集されている。「里」「南」の墨書き土器は、角田遺跡周辺から流下した可能性が高く、有力な遺跡の存在が想定される。

**SX23** 須恵器無台坏（16）は、回転ヘラ切りであり、内面には部分的に煤あるいは墨の付着が認められる。口縁部の立ち上がりは比較的急であり、8世紀後半に遡る資料と考えられる。

須恵器有台坏（17・18）は、体部内外面にロクロナデが認められ、体部外面にはロクロ目を残す。17に関しては体部内面にも明瞭なロクロ目を残し、丁寧なつくりである。体部外面には、逆位で「里」の墨書きが認められる。18にも底部外面に「南」の墨書きが認められるが、書体は17と異なり、連筆でない。底部調整は17が左回転のヘラ切後ロクロケズリで、18は回転糸切後ロクロケズリである。

坏蓋（19）は、天井部を右回転の切り離し後、つまみ部を貼り付けている。天井部全体に濃緑色の自然釉が認められる。器高は3cmとやや低く、天井部は若干沈み込んでいる。

壺（20）は、遺存率が低く調整は不明瞭であるが、体部外面はロクロ左回転にて調整されている。高台はやや長めで「ハ」の字状に聞く。

これらSX23から出土した古代の土器は、おおむね8世紀後半から9世紀前半に位置付けられるものと考えられる。この一群が、河床出土資料において、最も新しい段階の土器となる。

**SX1017** 体部外面にロクロ回転によるカキ目が認められる壺（23）が出土した。口縁部内外面はロクロナデされ、口唇部は強いロクロナデにより上方につまみ上げられている。その特徴から9世紀のものと考えられる。

**SX279** 12B22グリッドから、1個体の壺（24）がつぶれた状態で出土した（図版10・65）。体部外側中位から下位は幅の広い輻方向のヘラケズリが行われ、中位から上位にかけてはヨコナデされるものの、輪積み痕を明瞭に残している。口縁部は肥厚する特徴的なもので、「く」の字に外反する。底部は平底で不定方向のヘラケズリが行われる。10世紀に比定できる北信系の長胴壺であろう。

## D 中世

古代と中世の画期については、11世紀中葉とする説と、12世紀中葉とする説とがあり〔前川1989〕、両者とも蓋然性の高い根拠が示されている。本遺跡においては、その画期とされる11世紀後半～13世紀の資料が、県内でも有数の質量をもって出土しており、過渡期的な様相を把握するのに好適な状況にある。したがって、その間に境界を設けることは、本遺跡の報告においては適切でないと判断し、11世紀後半以降を中世の遺物として扱うこととした。特に、遺構からの一括資料に良好な共伴関係を認めることができ、遺構単位での掲載を基本とした。最初に遺跡内を区画する川跡や溝から出土資料を示し、次に井戸・土坑等の出土資料を遺構単位で示すこととした。なお、土器の編年的検討にあたっては、珠洲焼は吉岡康暢氏の編年〔吉岡1994〕、輸入陶磁器は横田賛次郎氏・森田勉氏の編年〔横田・森田1978〕、中世土師器は品田高志氏の編年〔品田1991b、1997〕を主に参考とした。

### 1) 11世紀後半

遺構から出土した11世紀後半の土器は、SE210出土一括資料（76～79）があるが、このほかには単発的な出土が数例認められるのみである（72～75）。SE210は、川跡SX204の近くに位置する井戸であり、その底部から黒色処理された椀が一括出土した。器形を復元できた76は、内面に暗文が施される優品といえる。この時期の資料として特筆されるのは、川跡SX204の資料（25～58）である。川縁から遺

物が層位的に出土しており、土器の編年研究に重要な情報をもたらすものである。

1層からは、土師器の無台皿（46）と有台皿（47）、珠洲焼Ⅰ期の甕・壺（53～58）、白磁碗（48）が出土している。土師器の皿が12世紀前半に遡るほかは、12世紀後半の資料と考えられる。なお、内面黒色処理の椀（51）と灰釉陶器の皿（52）は、11世紀の資料の混入と考えられる。

2～4層からは、土師器の椀・皿（28～38・40～44）が多数出土している。無台の椀・皿が多く、有台の椀・皿が少数加わる状況にある。無台の椀・皿は、最も下部の4層から浅身のもの（29・30）が認められ、上部からは比較的深身のものが出土する傾向にある。これとは対照的に有台の皿・椀は3層には深身の椀が、2層には浅身の皿（42）が特徴的に加わる。2層出土の有台皿は、1層出土の類似例（47）と比べるとより深身でシャープに作出されており、より古い要素を備えている可能性がある。

また、2・3層からは灰釉陶器が出土している。2層の45は椀、3層の39は小片であるが皿であり、残存率の大きな椀（45）については編年的位置付けが可能である。原明芳氏の編年〔原1994〕と比較すれば、内端接地の底部は虎渓山1号窯式（10世紀後葉～11世紀前葉）に比定できる。しかし、それに後出する丸石2号窯式（11世紀中葉）との分類がはっきりしていないとも指摘されており、丸石2号窯式まで下る可能性もある。

こうみると2～4層出土資料は、大きくは11世紀後半に位置付けられるが、その中でも上位と下位とで相違が認められる。総じて下位により古い様相を、上位により新しい様相を認めることができる。なお、SD201出土の内面黒色の皿（51）については、SX204の2～4層からの混入と考えられる。

5層からは、9世紀に遡る須恵器・土師器が出土している。11世紀後半の資料とは、明らかに異なる一群が層位的に出土したことは注目される。なお、製塙土器1点（27）が認められた。これは新潟市出山遺跡出土資料〔新潟市史編さん室1994〕と共通する薄手の資料であり、筒状の胴部～底部と朝顔状に広がる形態をなすものと考えられる。ただし、この製塙土器は、他と離れた地点から出土した資料である。同一地点における層位的な出土例ではないが、灰や炭化物を多量に含む特徴的な2～4層相当層より下位から出土していることから、この段階に比定できるものと考えた。

## 2) 12世紀

珠洲焼Ⅰ期及びロクロ手法の土師器を12世紀の資料とした。この段階の資料を出土する遺跡は数少なく、特に珠洲焼のⅠ期の資料が集落から出土した事例は数少ない。類例としては、上越市伝至徳寺跡〔笛澤・水澤2001〕、中条町下町・坊城遺跡〔水澤2001〕、新潟市山木戸遺跡〔新潟市史編さん室1994〕を挙げられる程度で、このほかはほとんどが経塚からの出土資料となる。珠洲焼・土師器・輸入陶磁器の編年観をクロスチェックする上で重要な資料といえよう。なお、ここでは12世紀の資料として一括して扱ったが、大きく前半期と後半期の資料とがある。

### 【遺構一括資料】

SD116からは、珠洲焼Ⅰ期の鉢（66）に青磁碗（67）が出土した。青磁碗の釉色は、やや黄色味の強いといわれる鈍色ガラス質で、同安窯系と考えられる。外面には櫛目、内面上位には一条の沈線が認められ、この沈線を境に上位で若干内側に屈曲する。同安窯系Ⅰ類に相当し、12世紀後半から13世紀に位置付けられる。珠洲焼とおおむね一致する年代に位置付けられよう。なお、これとSD106の割花文が施される青磁碗底部（63）は酷似する個体である。

SE123からは、珠洲焼の甕・鉢と白磁碗が出土している。甕（93）は、細密・鋭利な叩打による薄手

の精品で、倒卵形の体部、「コ」の字の嘴頭口縁を有する。期の典型例である。また、体部外面中位には刻線が、内面には墨書が認められる。いずれも何らかの記号を意味するものと考えられる。鉢についても、口縁が内傾して立ち上がり、Ⅰ期の特徴が表れている。白磁碗は、細く高く直立した高台を有し、体部と高台の境界付近まで施釉された底部資料である。内面には劃花文が施される。白磁V類に相当し12世紀に位置付けられることから、珠洲焼と年代的に整合する。

SE208においては、北陸系の土師器皿(96)と壺R種の静止糸切りの底部(97)が共伴する。北陸系の皿は下ても12世紀中葉までとされており、珠洲焼の年代より古く位置付けられる。年代観に齟齬があり、また土師器皿が覆土上部から出土していることから、両者が共伴しない可能性もある。しかし、本遺跡の井戸やピットの覆土上位からは、土師器皿の完形品が出土することがあまり、覆土上位からの出土をもって共伴しないということはできない。また、同一の層位から珠洲焼と共に出土していることは明らかである(図版55)。これら調査時の出土状況を総合的に判断すれば、遺棄・廃棄段階における両者の共伴関係を積極的に評価しうることを指摘しておきたい。

#### 【その他】

珠洲焼では壺R種の95において回転糸切り痕が認められ、Ⅰ期の典型例といえる。壺についても、「コ」の字の口縁部や、細密・鋭利な叩打による薄手なつくりなどに当期の特徴がよく表れている(55・56・98・99)。また、口縁内面に一条の沈線(102)や段(55・56)を有するものも当期の特徴であろう。鉢においても、口縁部がやや内窵するシャープなつくりは特徴的である(100・102)。

土師器は、ロクロ成形で糸切り痕が認められる(80~86)。底径が小さく口径との差が大きいことが特徴的である。これは、古代の土師器製作技法の伝統によって製作されたもので、北陸系とされるものに相当する。中にはいわゆる柱状高台を有するもの(84・85)もあり、中世土師器の年代観と照らせば11世紀後半~12世紀前半に位置付けられるものであろう。

輸入陶磁器は、P1045出土の白磁碗(89)などが、当期の様相をよく反映している。口縁部を玉縁にするもので体部中位付近まで釉が垂下する白磁IV類に相当するもので、12世紀に位置付けられる。青白磁の皿(64・65・68)も当期に位置付けられよう。64は、薄手でシャープに作られた優品であり、内面に劃花文が施される。65・88は森本朝子氏による青白磁皿の分類I-1類[森本1997]に相当する。口縁は、外に水平に折り曲げられ、三角の刻みが入るものである。底部は、僅かに高台を削り出した平底で、外側は露胎である。

### 3) 13世紀

珠洲焼II・III期及び手づくね手法の土師器を13世紀の資料とした。ここでは13世紀の資料として一括して扱ったものの、大きく前半期と後半期の資料が含まれ、おおむね前半段階の資料が多いようである。

#### 【遺構一括資料】

SK122からは、土師器皿(113)と青磁碗(114・115)が出土している。土師器皿は、稜線がシャープに作出された小型品である。青磁碗(115)は、内端接地の底部資料であり、内面には文様が認められる。龍泉窯系のI類に相当する資料で、12~13世紀に位置付けられることから土師器の年代と齟齬がない。

SE194からは、土師器皿(121)と青磁碗(122)が出土している。SE194と切っているSE193から

は柱状高台のロクロ皿（85）が出土しており、遺構の切り合い関係と遺物の年代観が一致する。

SE211からは青磁が2点出土している。黄褐色の皿（147）は、いわゆる米色青磁であり、龍泉窯系のIII-1類に相当する。13世紀後半から14世紀に位置付けられるものであろう。

SE221からは、土師器皿（118）、青磁碗（119）、珠洲焼の鉢（120）が出土している。土師器皿は稜線が緩やかに作出されており、口縁端部は内側につまみ上げられている。青磁碗は、外面に連弁を削り出し、さらにその上から櫛目を縱に入れるものである。釉色は、青味を帯びた緑色である。龍泉窯系I-6類に相当し、13世紀に位置付けられる。珠洲焼鉢は、内端のつまみ上げがなくなり、外端と同様、丸みを帯びる口縁部であり、III期に位置付けられる。いずれも13世紀に位置付けられるが、総じて後出的な要素が認められる。

SE504からは、土師器皿（104～106）、青磁碗（107）、珠洲焼壺の底部（108・109）が出土した。土師器皿は、残存率が小さいが手づくね技法によるもので、稜線は比較的緩やかである。青磁碗（107）は、2本の沈線によって体部内面を5分割し、一部に文様（キノコ状？）が施されている。龍泉窯系のI-4類に相当し、12～13世紀に位置付けられる。土師器と青磁の年代観はおおむね一致するとみて差し支えなかろう。なお、珠洲焼壺の底部109は砂底である。

SK1000からは、土師器皿2点が出土している。大型品と小型品であるが、いずれも手づくね技法によるものである。116の口縁端部は四線状に整えられており特徴的である。

#### 【その他】

珠洲焼は、時期を決定するための有力な根拠を有する資料が少ないが、II期とIII期の資料が認められる。壺R種の130は、体部外面に櫛目波状文が描かれており、II期もしくはIII期に位置付けられる。梅瓶形の瓶子129は、II期に相当する可能性があるが類例が少ない。壺R種の138は、内面に印花文がスタンプされておりIII期に下るものであろう。鉢は、鉢目が波状文のもの（137）と直線状の（135）とがある。前者をII期に位置付けたがI期に遡る可能性がある。後者の口縁部は、内端のつまみ上げが顕著でなく断面が直角に近い形状であり、II期に相当するものと考えられる。

土師器皿は、すべて手づくね手法によるものである。その多くは、口縁部をヨコナデし、そのままの体部とは稜線によって区画しており、刈羽・三島型に比定される。比較的大ぶりなもの（110・116・118・121・125）と小ぶりなもの（104～106・113・117・123・126～128）とが存在するが、いずれも口径に比して器高が小さく、浅身の資料が多い。稜線はシャープに作出されるものと、緩やかに作出されるものとがあるが、緩くなっているものほど後出的な資料と考えられる。

輸入陶磁器では、青磁碗（140）と青白磁の梅瓶（141）が注目される。青磁碗の外面には片切形の鎬弁文が施されており、龍泉窯系青磁I-5類に相当し13世紀に位置付けられるものである。青白磁梅瓶は、南宋のもので13世紀に位置付けられる。

### 4) 15世紀

15世紀の遺構には、方形に区画される断面「V」字の溝や石組井戸などが存在するが、出土資料は数少ない。15世紀の土器は、珠洲V期の資料を基準としている（144・146～150）。

#### 【遺構一括資料】

当期を特徴付ける断面「V」字の区画溝SD201からは、壺と鉢が出土している（68～71）。このうち69・70には、I期の特徴が認められることから混入遺物と考えられる。鉢（71）は、平坦に作出された

口縁端部に櫛目波状文で加飾しておりⅤ期に比定できる。壺の口縁部（68）も、端部の断面が三角形に作出されており、鉢と同時期に位置付けることができる。

SE234からは、片口鉢（144）が、完形に近い状態で出土した。広く平坦に作出された口縁端面が内傾しておりⅤ期に比定できる【坂井1987】。これにはSE223から出土した1片が接合しているが、これに伴って出土した145は細密で鋭利な叩打痕を有するもので、Ⅰ期に遡る資料の混入と考えられる。

SE510からも、珠洲Ⅴ期の片口鉢149が出土しているが、これには天目茶碗（148）が共伴する。天目茶碗は、厚い施釉が認められる優品であるが、輸入品と比べると軽量であり、瀬戸・美濃焼と判断した。削り出し輪高台のものであるが、口縁部を欠損しているため詳細は不明である。珠洲焼と同年代であれば古瀬戸後期【藤澤1991】の資料となろう。なお、16世紀以降に下る資料は、仲田遺跡ではこの資料に可能性が残るほかは存在しない。この天目茶碗は、遺跡の下限を示す資料と考えられる。

#### 【その他】

珠洲焼では、叩き目が粗い壺（150）や、調査区北端の川跡SX750から出土した卸目の粗い擂鉢（62）に後出的要素を認めることができる。特に鉢は、焼成が不良で褐灰色を呈し、中世前半の資料と比べると異質である。土師器では、2点に後出的要素を認めることができる。146は、口径と底径の差が小さい口クロブクリで、いわゆる関東系に相当する。147についても、12世紀に位置付けた土師器と比べると立ち上がりが急であり、関東系に共通するものと理解される。いずれも胎土は緻密であり、12・13世紀に位置付けた土師器とは明らかに異なる。なお、土師器2点は、いずれもビット覆土の上部からの出土であり、地鎮との関連性が想定されるものである。なお、当期に伴うであろう輸入陶磁器は認められない。

### 3 石製品 (151~158)

石製品には、凹石、敲石、砥石、硯がある。

凹石（151・152）は、粗粒安山岩の円錐を素材としている。平坦面に直径7~8cm、深さ1.4cmほどの大きな凹みが作出される特徴的な形態である。いずれも井戸・土坑の底部からの出土であり、中世に属する製品と考えられる。なお、152はSE115の底部から出土したものであるが、これと球状の敲石（153）が共伴している。凹みと敲石の直径は近い値を示しており、セット関係として理解できるかもしれない。

砥石は、凝灰岩製（154~156）と砂岩製（157）とがある。形状は、角柱状をなすもの（156・157）と、扁平なもの（154）とがある。砂岩製の157は粗粒の石材であり荒砥である可能性があるが、ほかは比較的細粒の石材であり仕上砥と考えられる。

硯（158）は、滑石製である。軟質で平滑な素材であり、硯の石材選択としては異例である。硯としての使用痕跡は明瞭でなく、鑿状工具による粗削りの痕跡が認められる。また、広範囲に煤の付着が認められることも特徴的である。実測図上面・左側面・裏面のほぼ全面と表面のごく一部に煤が付着する。この煤の付着と加工面との切り合い関係をみると、表面の機能面・右側面・下面是煤の付着後に加工されていることがわかる。また、裏面には下方からの剥離痕が認められ、これが煤の付着後に形成されたものと考えられる。すなわち、硯に仕上げる加工以前に被熱した結果、煤が付着したものと考えられる。被熱した時点での形態について考えると、表面のごく一部に煤の付着が認められることから、厚さは大きく変化していないことがわかる。一方、右側面及び下面是、隣接する面と不連続であることから、破損面であ

った可能性が高い。すなわち、右方及び下方に向かって、形状が延伸していたものと考えられる。こういった破損の状況と、破損していない面の整形の状況（殊に滑らかに整形された角）を勘案すれば、もともとの形態は温石であった可能性が高い。すなわち、右側面と下面の破損を契機に、温石から硯に転用されたものと考えられる。温石の破損後、破損面を整形し、機能面が作出されたものと理解できよう。石材選択の特殊性は、こういった事情によるものと考えられる。また、表面と裏面とを貫通する梢円形の孔が認められる。硯への転用以前に作出されたものであり、この中には同一個体の他の部分から削り出した詰め物が認められる。ここは、硯の際に相当する部分であり、孔を埋める必要があったのであろう。

#### 4 鉄 製 品 (159~174)

本遺跡においては、少数ではあるが井戸、溝、ピットから銭、釘、鑿、鎌、馬具、鉄滓が出土している。遺構の年代観と照らし合わせると、おおむね中世前期の所産と考えられる。今回の調査では、鍛治的な遺構は確認されなかったが、楕円形（165）及びフイゴの羽口の小破片が出土している。遺跡内において自家消費的な小鍛冶が行われていたものと考えられる。

銭（166~174）は、12点出土した。168~171は、SB21のP1020から計10枚が連結した状態で出土したものである。銭の孔に薬組で銭サシ状のものを通して束ねられていたものと考えられる。出土位置を勘案すれば、地鎮に関する遺物と考えられる。166は包含層、167はSE223からの出土である。167は、井戸覆土の上部からの出土であり、埋め戻しの祭祀に関連する可能性がある。

釘（162~164）は、共に断面形態は四角形で、頭部は平坦である。162に関しては腐食が進み不明瞭ではあるが、同類と考えられる。鑿（161）は、表と裏では刃部の角度に差があり、おそらく、平坦面を正面にして使用されたと考えられる。鎌（160）は、腐蝕が著しく、刃部、取り付け部等の詳細は不明であるが、曲がり鎌と考えられる。馬具（159）は、脣部分である。腐食が著しく詳細は不明であるが、残存部は立間壺から鏡板部分と考えられる。鉄滓（165）は、SE223からの出土で楕円形である。共伴遺物（144・145）から15世紀のものと考えられる。全体に少量の気泡が開き、凹凸は少ない。メタル度はHである。

#### 5 木 製 品 (175~277)

##### A 記述の方法

木製品の大半は、井戸底部から出土した。したがって、SX23の河床砂礫層から出土した175~178が古代（9世紀）に遡る可能性が高いほかは、中世の資料と考えられる。井戸から出土した資料には、単独で出土したものと、多数の異なる形態が一括して出土したものとがあるが、土器と同様に遺構単位で提示することを基本としたい。また、共伴した土器によって年代が決定されている井戸については、年代ごとに資料を示すこととした。それにより、木製品の年代観を検討する材料としたい。特に、漆器については変遷観が示されており、土器の年代観との関係を示す良好な資料と考えられる。

No.	銭名	書体	裏面	年代	時代
166	熙寧元寶	真書	無文	1068年	北宋
171	開元通寶	真書	無文	621年	唐
167	天祐通寶	真書	無文	1017年	北宋
172	開元通寶	真書	無文	621年	唐
169	天聖元寶	篆書	無文	1023年	北宋
173	天聖元寶	真書	無文	1023年	北宋
170	皇宋通寶	篆書	無文	1083年	北宋
174	嘉泰通寶	真書	三	1201年	南宋

第1表 出土銭一覽

## B 観察の視点と図化の方法

本製品実測図の表記方針は、木器集成図録などに示されている。加工痕・使用痕・他の部材があたった圧痕などの記載を重視し、欠損部分についてもできるだけ復元的に書くことが強調されている〔奈良国立文化財研究所 1993〕。しかしながら、この指摘が実質的に図化されることは意外にも少ない。ともすると、二次的に生じた凹凸をなぞることに終始し、腐蝕部分のみが懸念に図化されているものも存在する。そうした実測図は、「人工物」の表現としては不適切であり、石器実測において新規破損面（いわゆるガジリ面）にリングやフィッシャーを記載することに近い視点といえる。少なくとも、石器や土器の観察視点と異なる（ただし、腐蝕面の記載に一定の「意味」がある場合もある。例えば、柱根は根入れ部分のみが残存し、地上に露出している部分が腐蝕している場合がある。この場合、腐蝕範囲を記載することで、根入れ長を把握できる可能性があるので注意したい）。

このような状況を鑑み、本報告では実測図作成にあたっては、加工痕を示すことに重点を置くこととし、腐蝕面等の記載を最小限に留めることとした。個々の加工痕の形状、単位、方向、切り合い関係、組み合せを意識的に図化することとし、表現方法は石器の実測〔松沢 1959・1960〕に習うこととした。

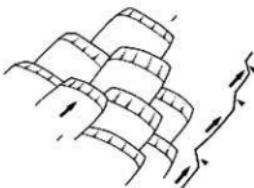
加工痕の形状は、切り合う加工痕との関係を把握しながら、稜線を正確に記載することを第一に考え、加工痕の形状・単位・切り合い関係を捉えていくこととした。正確な稜線を記載できれば、本来、加工の単位や切り合い関係を明示することができるはずである。

加工方向の把握については、加工痕の末端部に認められる階段状をなす部分に着目したい。斧・鎌・刀子など加工工具の侵入が止まった部分から木目に沿って階段状に剥離されることがある。これを把握することで加工方向を認識することができる。この部分の記載にあたっては、加工工具の侵入が止まったライン（石器記載のリングに相当）と、そこから始まる階段状をなす部分（石器記載のフィッシャーに相当）を第11図に示すように図化することで、加工方向を示すこととする。

また、加工痕が群をなす場合、強調して示すことが必要である。一定方向の加工痕が集合する場合や、形状の近い加工痕が集合する場合は、作業単位を示している可能性が高い。したがって、そういった境界を1段階太い線で示すことで強調した。

このような図化の方針をもって作業を開始したものの、木製品の稜線は腐蝕や使用減り？等によりならかなるものが多く、「意識的」に観察しなければ把握できない加工痕がほとんどである。こういった状況に加えて、デリケートな遺物であるが故に生じる損傷痕の存在も理解を困難にしている。第一に、発掘調査時の損傷痕がある。発掘道具がわずか触れただけでも加工痕のような損傷することがあり、注意しなければならない。例えば、柱根においては半截時の露出面に損傷痕が生じることが多く、発掘調査の状況を振り返ることである程度誤認を防ぐことができる。第二に、圧迫により形成される加工痕かのような圧痕である。これについては、年輪や木目の連続性を観察すれば区別することが可能である。こういった本来的でない情報がより目立つことも、本来的な情報を読み取ることを困難にしている。圧迫痕や新規欠損面など、二次的に生じた損傷痕を適切に区別することも観察において重要な要素となる。

以上のように、いくつかの問題を提起したが、いずれにしても問題意識をもって木製遺物を観察するこ



第11図 加工痕（階段状の剥離）の表現方法

とが必要である。わずかな情報を拾い上げようと意識的に観察しなければ、木製遺物を的確に理解することは困難と考えられる。

### C 時期別の様相

古代の土器と共に出土する木製品は、8世紀前半～9世紀の土器が多数出土したSX23の川底出土資料(175～178)が相当する。砂礫層からの出土であり、上流の遺跡から流下してきたものと考えられる。ここからは、挽物の素材(178)、曲物の底板(177)、有頭状の木製品(175)、膾が作出された建築材(176)が存在する。曲物の底板は、残存部の中央に穿孔されており、破損後に再利用された可能性がある。

11世紀の土器と共に出土する木製品は、SX204の3層から出土した棒状の製品(179)のみである。

12世紀の土器と共に出土する木製品は数少ない(180～185)。SE123及びSE1035からは漆器が出土している(180・181)が、いずれも土師器写しのベタ高台であり、漆器の編年観からみても12世紀に位置付けられる。このほかに、杭状の木製品(183)、蘆楕(185)、櫛(182)などがある。

13世紀の土器と共に出土する木製品(186～206、232～235)には、良好な共伴関係が認められる。SE137では曲物(232)・杵(187)が、SE138では白木椀(188)・鉄芯を有する椎(189)・箱の底板(190)が、SE213では曲物(203・205)・鍵杖(204)・板材(建築材? 206)が、SE221では曲物及び長方形曲物の底板(195・196)・有頭状のもの(浮子? 197)・荷札?(198)が認められる。年代観を読み取れる白木椀及び漆器については、ベタ高台のもの(201)と内面が小さく削り出された高台のもの(188)がある。後者は、13世紀に特徴的な形態といえ、前者にはより古い要素が残されているといえる。おむね漆器と土器の年代観は相違しないといえよう。

15世紀の土器と共に出土する木製品は、SD201、SE223、SE225、SE234から出土している(216～228)。このうち、SE234からは、様々な木製品がセット関係をもって出土した。漆器椀(216)・皿(217)・楕(219)・曲物(220・221)・柱根(224)・杭(223)・端部が平坦加工された製品(222)が認められる。漆器(216)は、総黒色であり内面に円に「上」の字が朱書きされている。13世紀の資料と比べれば、より高い高台が作出されており、新しい要素を見出すことができる。しかし、これに共伴する皿(217)には、高台がつかず従来いわれている新しい要素を認めることはできない。また、この段階の漆器としてはSE510出土の碗(225)もある。これは、高台を有する総赤色漆器である。総赤色漆器の出現は15世紀以降であり【田村1999】、土器の年代観と相違しない。

また共伴する土器はないが、漆器の形態から年代を推測できる一括資料がある。SE18では柄杓(241)・漆器(242)が、SE1040では漆器皿(259)・曲物底板(260)が、SE1108では漆器椀(262)・曲物(263～265)・箸(267)・櫛(268)・縄(266)が認められる。漆器の年代観をみれば、SE18・SE1040のベタ高台の皿(242・259)は12世紀、SE1108の椀(262)は高台の状況から15世紀に位置付けられよう。また、SE1043から単独で出土した漆器椀(211)は、ベタ高台であり12世紀に位置付けられる。

### D 遺物の種別ごとにみた特徴

#### 漆器

漆器は、11点出土している。上述のとおり12世紀・13世紀・15世紀の資料が存在するが、それぞれが各期の特徴をよく示しており、品田高志氏、田村浩司氏らの編年観【品田1991b、田村1999】とお

おむね一致する。ただし、15世紀に欠落するとされる小皿〔春日2001〕がSE234に伴っている(217)ことには注意を払わなくてはならない。漆器の素材は、ケヤキ(180・181・188・201・211・241・259)、ブナ属(216・217・225)、トチノキ(262)といった回転成形に適する均質な木材が選択されている。また、時期ごとに樹種の選択が異なる状況が理解された。ケヤキは12・13世紀に、ブナ属・トチノキは15世紀に限定的に選択されている。年代・製作技法・素材の選択が、整合する状況にある。ちなみに、15世紀の資料群に伴った小皿(217)についても樹種はブナ属であり、樹種選択の状況においても後出的要素を認めることができる。また、盤の可能性がある213についても、トチノキが充てられており樹種の選択性において共通する。

## 曲物

曲物は、すべて側板と底板が分離した状態で出土した。出土状況と直径の一一致により、セット関係が把握できたのはSE234における220と221との関係のみである。また、曲物はほとんどが破損した状態で出土したことも特徴的である。底板については、破損後に加工が施されるもの、使用痕が形成されるものがあり、転用の可能性を指摘できる。その状況は、いくつかの在り方に整理できる。破損後の形状の中央付近に穿孔されたもの(177・195・236)、破損面に加工を施すもの(243)、刃物傷のような線状痕が認められるもの(195・205・260)がある。このうち線状痕は扁平な他の形態(200・212)にも認められ、「まな板」などの工作台として使用された可能性があろう〔藤巻1988〕。いずれの痕跡も扁平材の転用を目的とした結果であろう。また、221の底板には渦巻と放射状の刻線が認められた。それが意味することは不明であるが何らかの記号であろう。使用痕との切り合い関係をみると、周縁の使用減りを切るように刻線が認められた。すなわち、使用後に刻まれたものであり、あるいは埋め戻しの祭祀に関連する記号の可能性があろう。

様々な製作痕跡も認められる。SE236の底板には、黒漆が塗布されていた。側板内面には、均等に曲げるために小刀や錐で刻まれるケビキ線があるが、垂直方向のもの(203)と斜位のもの(220)とがある。側板の結合にあたっては、樹皮が利用されているが、その方法にはいくつかの在り方が認められる。底板の固定方法は2種類が認められる。側方から木釘を打ち込むことで固定するもの(177・203・205・236・263)、桟皮や木釘といった他の部材による固定具を一切用いないもの(221・264)である。後者は、断面台形状の底板を嵌め込んだようなものであるが、製作技法の詳細については検討を要する。底板は、221の使用痕を観察する限り聞く側が底面側となるようである。

樹種はスギが多いが、3個体にヒノキが使用されていた。ヒノキは温暖帯に分布し、中部以北の日本海側に存在しないことから、これらは搬入品である可能性が極めて高い。また、素材の選択性と底板固定法の間に有意な関係を認めることができる。固定に際し、スギは例外なく木釘が使用されているのに対し、ヒノキを利用した個体(220・264・265)は、底板及び側板に木釘等の固定具を認めることができない。また、ヒノキで固定具をもたない個体は、いずれも15世紀の遺物と共存している。搬入の時期を限定的に捉えることができる可能性がある。年代・製作技法・素材の選択が、整合する状況にあるといえる。

長方形曲物(196)や箱(190)が、13世紀に位置付けられる井戸からの少数出土している。いずれも木釘等によって接合されるものの底板であり、樹種はスギである。円形の曲物と共に通する状況にある。

## 櫛

櫛は、6点出土しているが形態的に大きく2種類に分類することができる。櫛歯が密な梳櫛(210・228・268・270)と疎な解櫛(182・202)とがあり、大きさにおいても櫛歯が長いもの(210・228・

270) と短いもの (182・202・268) とがある。大局的には、梳歯ほどその長さが長く、解櫛ほど短いといえる。また、270 の表裏には「几」字状の文様が刻まれている。

櫛の材質は、樹種同定の結果、すべてイスノキであることが明らかになった。イスノキは重硬な材で、曲げに対する抵抗性があり極めて割れにくく、櫛の用材として優れている。木取りも割れにくいように織維方向が刃先にくるようにした縦木取りとなっている。イスノキは、西日本の照葉樹林帶に生育する常緑広葉樹で、新潟には自生しない。すなわち、製品もしくは素材として西日本から搬入された可能性が高いといえる。西日本の職人によって製作されて搬入された可能性を指摘できよう。

#### その他の木製品

鍬 (229) は、形態から直柄鍬と考えられる。刀を装着する部分の端部は細身になっており、また実測図表面がより平坦に、裏面がやや凸面になっている。樹種はトチノキである。柄との組み合わせからなる類似形態が 2 点存在する。212 は、足のような扁平な平面形状をなし、先端はわずかに反るよう加工されている。また、側方の下端から 1/3 ほどの位置には、大きな段差が作出されており、他の部材を装着させた可能性がある。上半中央には棒が貫通しているが柄としては貧弱であり、他の部材と組み合わせて使用された道具であろう。231 は、一端に寄った位置に孔が貫通しており、柄と組み合わせて利用された道具と考えられる。形状をみると、鍬のように金属製の刃部が装着された可能性を指摘できるが、それにしては柄との接合部が貧弱である。

槌 (219) は、柄と機能部が組み合わされた状態で出土した。柄は断面四角形をなす。樹種は、機能部はヌルデ、柄の部分はコナラ節であり、いずれも強度のある素材といえる。

槌槌は、半截した材を素材とし刻みを部分的に加えたもの (185) と、樹皮を残した分割材の周間に刻みを加えたもの (254) とがある。また、分割材の 256 についても槌槌の可能性がある。

錐 (189) は、柄と鉄芯が組み合わされた状態で出土した。鉄芯は、柄に貫通させた側は断面が円形、錐部は断面が正方形をなす。柄には軟質なヤナギ属の材が用いられており、鉄芯を通しやすい樹種が選択されていたことがわかる。

箸 (237・267) は、2 点のみ認められた。削りにより、断面が多角形に整えられている。

杓子は、異なる形態の 2 点が出土している。241 は、1 本ものの素材から削りにより作出されている。大きくカーブする柄に平面が円形に近い浅い機能部がつく。細かな加工によって整形された後、全面に黒漆が塗布されている。樹種は、軟質なヤナギ属であり、大きく削りだす形態の作出には有効であったと考えられる。207 はスギの板材を素材とし、特に先端部は銳利に作出されており、笠に近い形状である。

下駄 (248) は、台と歯を別の部材を組み合わせた差歎の構造をなす。台に膣穴を貫通させた露卵下駄である。樹種は、クスノキ科である。

扇 (214・215・238) は、3 点出土した。樹種は、スギ (214・215) とヒノキ (238) があり、ヒノキは搬入品と考えられる。また、ヒノキの 238 は他の 2 点よりも長く厚手であり特徴的である。

毬杖 (204) は、長い柄のついた杖で木製の毬を打つ遊戯であり、本遺跡から出土したのは打杖である。毬杖の出土は、県内では長岡市中道遺跡〔駒形ほか 1998〕に次ぐ 2 例目となる。樹種はクヌギ節である。

火鑽臼 (250) は、何らかの製品からの転用と考えられる。もともとは、199 と類似した形態と考えられる。溝を刻み、そこを臼としている。

机脚 (271) は、P103 から出土している。根がらみとして転用された可能性が高い。

有頭状の形態には、断面が長方形をなすもの (197・209)、梢円形をなすもの (244)、多角形をなすも

の（175・252）があり、多様である。このうちの一部（252等）は、浮子である可能性が高い。

一端を尖らせた形態（186・198・240・255・257・261）は様々であるが、特に255・261は端正なペン先形に作出されており、目的形態であった可能性が考えられる。ほかの資料については、これほど顕著でないものの板材の一端を尖らせる点では共通する。また、186は依通しのような機能を果たした可能性があろう。240及び258は直径3mmほどの棒が貫通しており、何らかの形態の一部であったと考えられる。なお240の先端は、意図的に二股に作出されている。

板材は、報告個体以外にも多数出土している。薄手のものから厚手のものまで様々であるが、端部が鋸で切断され、短冊形に成形されているもの（198・227・239・246・247）が特徴的である。また、198・227の上部には穴が認められる。あるいは荷札のような役割を果たしたものかもしれない。

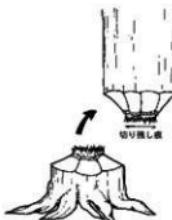
## 6 柱 根

ピットは2466基検出されたものの、そのうち柱根が残存したのは19基のみであった。しかし、その多くは腐蝕の進行が顕著で、一定の範囲に加工面が認められるのは図化した6点のみである。加工の状況を観察すると、それぞれに豊かな個性が認められる。

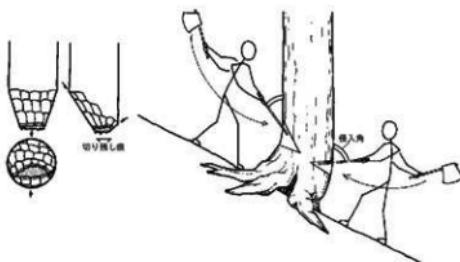
272（P161）は、接地面が極めて平坦であることが特徴的であり、伐採後に二次加工された結果と考えられる。中心部から外方に向かう加工痕は、伐採後に平坦面を作出した際の加工によるものであろう。また、接地面と側面の境では、張り出しが除去されている。この部分の加工痕は最も新しい段階に形成されており、形状修整の結果と考えられる。樹種はコナラ節である。

273（P960）は、大きく2方向からの加工痕から構成され、中央部には切り残し痕（第12図）が認められる。伐採した木材が二次加工されずに、柱として使用された可能性が高い。2方向から構成される加工痕は、斧の侵入角が異なり、一方は50度、他方は70度ほどである。斧の侵入角の相違は、伐採環境を反映している可能性がある。例えば、斜面地において下方から斧が入れば垂直に近い角度で侵入するであろうし、上方からであれば浅角度で侵入するものと考えられる（第13図）。

そうであれば、伐採の順序は「下方からの伐採→上方からの伐採」と推定される。実際、273の切り合ひ関係については、浅角度のほうが新しい可能性が高く、こういった仮定と矛盾しない。ここでは、第13図のようなモデルを提示し、生育環境と伐採状況との関係を示したが、より多数の資料の分析をもって慎重に検討する必要があろ



第12図 切り残し痕の形成



第13図 斜面地における伐採と加工痕の構成

う。樹種は、トネリコ属である。

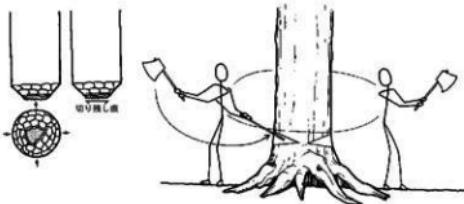
273とは対照的に、274(P1037)は腐蝕の進行が顕著だが求心的な加工痕から構成され、中央には切り残し痕が認められる。斧の侵入角も、各所で大きな変化は認められない。立ち木の全周から伐採するのに、より適した環境(例えば平坦地)が想定される(第14図)。樹種はキハダである。

275(P319)は、側面の加工が顕著な角材である。一見、尖る上端が接地面にあたり、打ち込み式の柱根である可能性も考えられたが、出土状況の天地から遺物実測図のようになる。底面の腐蝕は顕著で、加工痕を確認できなかった。樹種はコナラ節である。

276(P658)は、腐蝕範囲が広く全体像を把握できないところもあるが、基本的には2方向の加工痕から構成されるものと考えられる。斧の侵入角は、一方が25度、他方が85度ほどである。どちらかといえば、273に近い在り方を示す。樹種はクリである。

277(P895)は、斧の侵入角が極めて浅く、先端が鋭く尖るものである。打ち込み式の杭であろう。樹種はコナラ節である。

柱根については、図化しなかった資料も含めて全点を樹種同定した。その結果、充てられた樹種の構成は、クリ7点(37%)、コナラ節7点(37%)、ヤマグワ2点(11%)、キハダ2点(11%)、トネリコ属1点(5%)であった。特に、クリとコナラ節が多用されていることが特徴的である。これらは小高木または高木になる樹種であり大径が得やすく、材質も重硬で強靭であるものが多い。こういった樹種の選択は、県内の古代～中世の柱根に共通する傾向といえる。



第14図 平坦地における伐採と加工痕の構成

## 第VI章 自然科学分析

### 1 仲田遺跡出土木製品の樹種

三村 昌史・植田弥生（パレオ・ラボ）

#### 分析方法

出土木製品から横断面・放射断面・接線断面の3断面について剃刀を用いて薄く切り取り、ガムクロラール（アラビアゴム・抱水クロラール・グリセリン・蒸留水を混和したもの）で封入してプレパラートを作成した。検鏡は光学顕微鏡にて40-400倍で行い、現生標本との対照により同定を行った。また、炭化により上記の方法で切片作成ができないかったNo.46(242)・66(217)の木製品については、木製品から小片を採取し、実体顕微鏡での観察及びSEMでの観察による同定を植田が担当した。

#### 分析結果

樹種同定の結果、計125点の出土木製品中には木本が19分類群認められ、そのほかNo.1(266)は草本（イネ科以外）からなっていたが詳細な同定は困難であった（木製品観察表参照）。

スギ *Criptomeria japonica* (L.f.) D.Don (スギ科) 第15図1a~1c

仮道管と放射組織、及び樹脂細胞からなる針葉樹材。早材から晩材への移行はやや急で、樹脂細胞はこの移行部分にかけて散在し、しばしば接線方向に配列する。また晩材部は量多く明瞭。分野壁孔はスギ型で大きく、1分野にふつう2個。スギは高木になる常緑針葉樹である。現在ではいたるところに植栽されているが天然分布は降水量の多い地域に限られて点在し、特に東日本の日本海側に多く、湿地周辺や尾根沿い、谷沿いなどに生育する。材質は軽軟で保存性は中庸、割裂性・加工性に優れる。

ヒノキ *Chamaecyparis obtuse* (Sieb. et Zucc.) Endl. (ヒノキ科) 第15図2a~2c

仮道管と放射組織、及び樹脂細胞からなる針葉樹材。早材から晩材への移行はやや急で、樹脂細胞はこの移行部分にかけて散在し、しばしば接線方向に配列する。また晩材部は量少ない。分野壁孔は大型のトウヒ型からヒノキ型でやや大きく、1分野にふつう2個。ヒノキは主に暖温帯に分布し山地の尾根沿いなどに生育する、高木になる常緑針葉樹である。現在の分布では中部以北の日本海側にはみられない。材質はやや軽軟であるが強度に優れ、割裂・加工が容易で保存性が著しく高いという特徴がある。

オニグルミ *Juglans mandshurica* Maxim. var. *sachalinensis* (Miyabe et Kudo) Kitamura 第15図3a~3c

大型（直径約250-300μm）のやや放射方向に伸びた丸い導管が、ほぼ単独時に放射方向に数個複合して年輪界に向けて緩やかに径を減しながらまばらに分布する半環孔材。木部柔細胞は短接線～接線状で頗著。導管の穿孔は単一で、内腔にはチローシスが認められる。放射組織は同性で、1-3列。オニグルミは、温帯～暖温帯にかけて分布する高木になる落葉広葉樹で、河畔などの適温な立地にみられる。材質は硬さ・重さ中庸で、加工は容易である。

ヤナギ属 *Salix* (ヤナギ科) 第15図4a~4c

小さな（直径約40-80μm）放射方向に伸びた丸い薄壁の導管が、ほぼ単独で密に分布する散孔材。導

管の直径は年輪の始めと終わりで小さくなる傾向にある。導管の穿孔は单一。放射組織は単列異性で、導管と放射組織との壁孔は蜂の巣形のふるい状。ヤナギ属には山地に生育する種や、河畔・湿地周辺に生育する種などが含まれ、また低木から高木になる種まで様々であるが、多くが向陽地の土壌の薄い湿潤で水はけの良い立地を好む。材質は軽軟で、加工は容易、耐久性は低い。

#### クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. (ブナ科) 第15図5a～5c

年輪の始めに大型(直径約200～350 μm)で丸い道管が単独で1～2列に並び、そこから順次径を減じ、晩材部では小型(直径約20～50 μm)でやや角張った道管が火炎状に配列する環孔材。晩材部には木部柔組織がみられ、いびつな接線状に配列する。道管の穿孔は单一で、道管内部にはチローシスが著しい。放射組織は単列同性。道管と放射柔細胞との壁孔は対列状、または櫛状。クリは主に温帯下部・暖温帯に広く分布する落葉広葉樹で、向陽地に多くみられる。材質は強硬で割裂性・保存性・弹性に優れ、特に水湿に強い。

#### コナラ節 *Quercus sect. Prinus* (ブナ科) 第15図6a～6c

直径約200～250 μmの丸く厚壁の導管が年輪の始めに1～2列並び、そこからやや急激に径を減じて直径約15～30 μmのやや角張った薄壁の導管が火炎状に分布する環孔材。木部柔細胞は短接線状。導管の穿孔は单一、放射組織は単列同性のものに広放射組織が混じる。コナラ節の母植物としては温帯下部～暖温帯に分布するコナラ *Quercus serrata* Thunb. ex Murray、温帯に分布するミズナラ *Quercus crispula* Blume が主に考えられ、そのほか暖温帯の沿海地に多いカシワ *Quercus dentata* Thunb. ex Murray、暖温帯に点在して分布するナラガシワ *Quercus aliena* Blume の可能性も考えられる。いずれも高木になる落葉広葉樹であり、材質は重硬で弹性を持ち、保存性は中庸、割裂・加工は難易である。

#### クヌギ節 *Quercus sect. Aegilops* (ブナ科) 第15図7a～7c

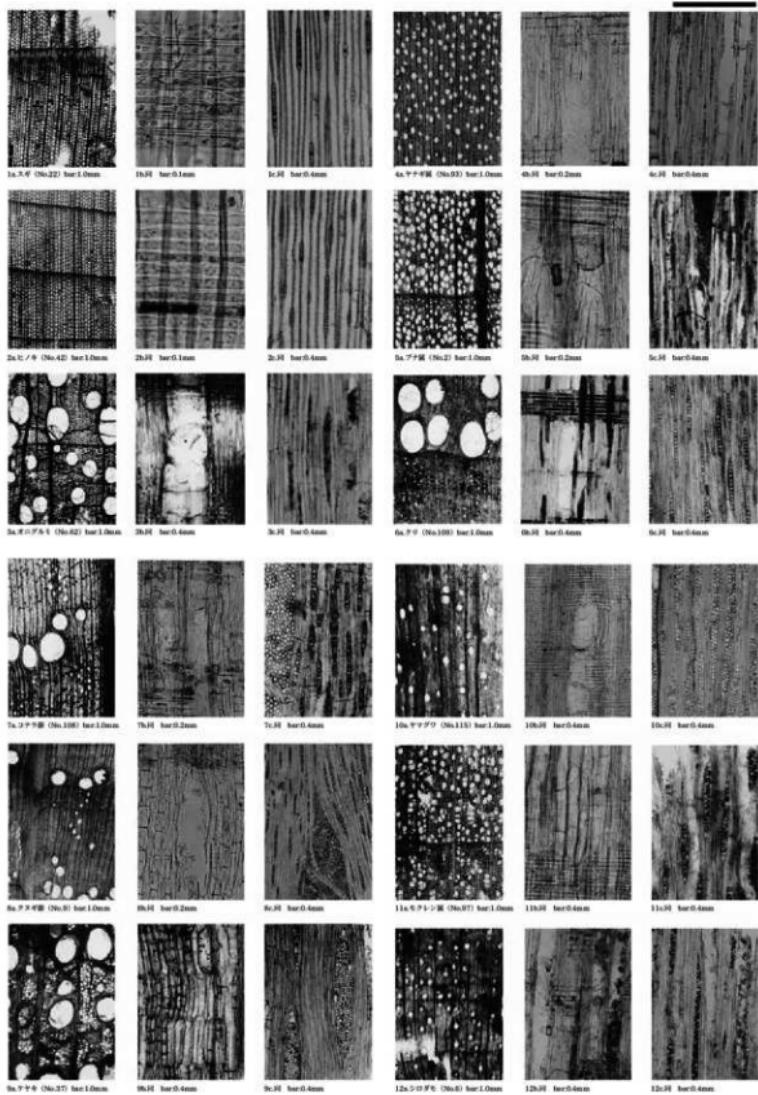
年輪の始めに大型(直径約200～300 μm)の丸い道管が単独で1～2列に並び、晩材では小型(直径約20～50 μm)で厚壁の道管が配列する環孔材。木部柔組織はいびつな接線状で1～2列。道管の穿孔は单一で、道管内部にはチローシスが著しい。放射組織は単列同性であるが、幅が約250 μm、高さが5mmを超える大型の複合～広放射組織が混在する。クヌギ節にはクヌギ *Quercus acutissima* Carruthers、アベマキ *Quercus variabilis* Blume が含まれる。いずれも暖温帯の向陽地に多くみられる、高木になる落葉広葉樹である。いずれも材質は重硬で弹性を持ち、保存性は中庸、割裂・加工は難易である。

#### ブナ属 *Fagus* (ブナ科) 第15図8a～8c

小型(直径約60～70 μm)のやや丸い導管が、ほぼ単独時に数個複合して密に配列する散孔材。導管の直径は年輪界に向けてやや急に減少する。導管の穿孔は單一または階段状。放射組織は単列及び数列のものに広放射組織が混在する。ブナ属にはいずれも温帯上部に分布するブナ *Fagus crenata* Blume、イヌブナ *Fagus japonica* Maxim. 双方があるが材構造からは区別がつかない。材質は堅強かつ韌性があり、保存性は悪い。

#### ケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino (ニレ科) 第15図9a～9c

年輪の始めに大型(直径約200～300 μm)の丸い道管が単独で1～2列に並び、晩材部では小型(直径約30～60 μm)の薄壁で角張った道管が多数集合して、接線方向あるいは斜めに帶をなす環孔材。早材から晩材にかけて、道管の直径は急激に変化する。木部柔組織は早材部では大道管の周囲を、晩材部では小道管の塊の周囲をそれぞれ取り囲む。道管の穿孔は单一で、小道管の内壁にはらせん肥厚がみられる。



第15図 仲田遺跡出土木製品切片の光学顕微鏡写真 (1)

放射組織は上下端のみ直立細胞からなる異性で、しばしば上下端や多列部の縁に結晶を含む。道管と放射組織との壁孔は交互状。ケヤキは高木になる落葉広葉樹で、谷沿いや河畔の肥沃な土壌にみられ、温帯を中心に広く分布する。材質はやや重硬だが、加工は容易、割裂性は中庸で保存性に優れる。

**ヤマグワ *Morus australis* Poir.** (クワ科) 第15図10a~10c

年輪のはじめに大型（直径約150~200 μm）で丸い導管が単独あるいは1~2個複合して1~2列並び、そこから徐々に径を減じて年輪界付近ではごく小型（直径約10~20 μm）の角張った導管が数個～多数集合して斜上状～接線状に配列する環孔材。導管の内腔にはチローシスが認められる。導管の穿孔は單一で、木部柔細胞は周囲状。放射組織は異性で1~4列ほど、しばしば上下端の直立細胞は数個縦に連なる。導管と放射組織との壁孔はレンズ状。ヤマグワは低木～小高木の落葉広葉樹であり、適湿な向陽地に多く見られる。材質はやや重硬で韌性・従曲性・割裂性に富み、加工はやや困難、保存性は高い部類に入る。

**モクレン属 *Magnolia*** (モクレン科) 第15図11a~11c

小型（直径約40~60 μm）の放射方向に伸びた丸い導管が、放射方向に数個複合してやや密に分布する散孔材。導管の密度は晚材部にしばしば偏って分布し、晚材部では導管の直径はやや急に減少する。導管の穿孔は單一。導管相互壁孔は対列状～階段状。放射組織は同性に近い異性で、1~4列。モクレン属にはホオノキ *Magnolia obovata* Thunb. やキタコブシ *Magnoliab praecocissima* Koidz. var. borealis (Sargent) Koidz.などが含まれる。いずれも温帯に分布する落葉広葉樹で、山林内にみられる。材質はやや軽軟、緻密・均質な材で加工容易。

**シロダモ *Neolitsea sericea* (Bl.) Koidz.** (クスノキ科) 第15図12a~12c

小型（直径約40~50 μm）で厚壁の丸みのある導管がほぼ単独時に主に放射方向に1~2個複合してややまばらに分布する散孔材。年輪界の始めと終わりでは導管の直径及び密度が小さいが、ある程度の年輪幅を持つ部分では晚材部に導管の分布密度が偏る傾向にある。導管の内腔には着色物質が認められる。木部柔細胞は周囲状となりや目立つ。導管の穿孔はほとんど單穿孔で時に10本以内の階段穿孔となる。放射組織は異性で1~2列、直立細胞はやや大型となる。導管と放射組織との壁孔はふるい状～階段状。油細胞はほとんど認められない。シロダモは暖温帶とくに沿海地山中に普通な高木になる常緑広葉樹であるが、低木状のものも多くみられる。重さ・硬さともに中庸程度の材である。また、シロダモ以外と考えられるクスノキ科の材は詳細な同定が困難であったためクスノキ科に留めている（No.7）。

**イスノキ *Distylium racemosum* Sieb. et Zucc.** (マンサク科) 第16図13a~13c

小型（直径約30~40 μm）でやや丸い導管が単独または1~2個複合してやや密に分布する散孔材。木繊維の壁は厚く、木部柔細胞は數列の接線状～帶状となり目立つ。導管の穿孔は間隔の広い階段状でほとんど10本以下。放射組織は異性で構成細胞の大きさが揃っており、多くはスリムな2~3列。軸方向の多室結晶細胞が顕著である。導管と放射組織との壁孔は大きなふるい状～レンズ状。イスノキは高木になる常緑広葉樹で、暖温帶中部～下部の山中にみられる。材質は日本産の樹木の中で極めて重硬な部類に属し、曲げに対する抵抗に優れ、極めて削れにくく、割裂・加工は難易である。

**キハダ *Phellodendron amurense* Rupr.** (ミカン科) 第16図14a~14c

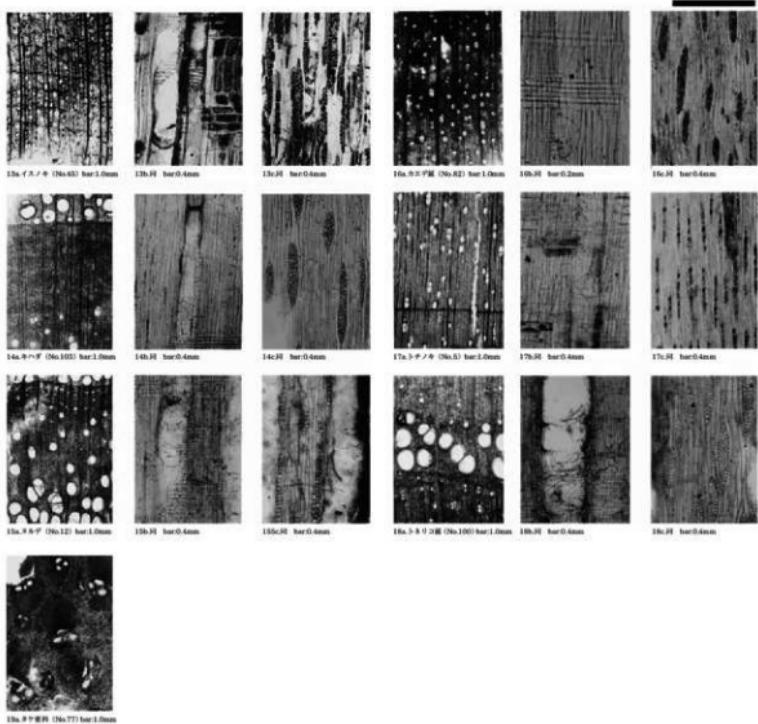
大型（直径約200~220 μm）で丸い導管が、年輪の始めにはほぼ単独で2~3列ならび、その後は急速に径を減じて中型（直径約80~100 μm）で丸い導管が放射方向に1~2個複合してまばらに分布し、晚材部ではごく小型（直径約10~20 μm）で薄壁の角張った導管が多数集合して、斜め～接線状に帯を成す環孔材。導管の穿孔は單一で、内腔には着色物質が認められる。また導管内壁にはらせん肥厚がみられる。

放射組織は同性で3-4列、多くの場合背は低く紡錘形を成す。キハダは高木になる落葉広葉樹で温帯に広く分布し山地林内に生育する。材質はやや軽軟で加工は容易、割裂性も良好、水湿に耐性がある。

**ヌルデ** *Rhus javanica* L. var. *roxburghii* (DC.) Rehder et Wils. (ウルシ科) 第16図15a~15c  
年輪の始めに中型（直径約100-150 μm）のやや丸い厚壁の導管が単独あるいは1-2個複合して2-3列並び、晩材では小型（直径約20-50 μm）の単独あるいは数個集合して分布する環孔材。木部柔細胞は晩材部でなまめ～接線方向に連なった帶状となる。導管の穿孔は單一で、内腔にはチローシスが認められる。放射組織は異性で1-3列、いびつである。ヌルデは小高木になる落葉広葉樹で、山野の林縁などや明るく開けた立地にみられる。材質は重き・硬さ・強さ概して中庸、保存性はやや低い。

**カエデ属** *Acer* (カエデ科) 第16図16a~16c

小型（直径約40-60 μm）で丸い導管が、単独あるいは放射方向に2-3個複合して、ほぼ均一に分布する散孔材。導管の直径は年輪の始めと終わりで小さく、その中ほどで大きくなる傾向にある。導管の穿孔は單一で、内腔にはしばしばゴム状の物質が詰まっており、またせん肥厚も認められる。木繊維の壁



第16図 仲田遺跡出土木製品切片の光学顕微鏡写真 (2) a : 横断面 b : 放射断面 c : 接線断面

厚の相違は、横断面で紋様となって確認される。放射組織は同性で、1~6列ほど。木織維の壁厚の相違は、横断面で紋様となって確認される。カエデ属には多くの種が含まれているが、一部の種を除けば多くが渓畔・河畔・丘陵などで主に亜高木層を形成する。材質は概して強硬で緻密、粘りも有しており、割れにくく加工はやや困難。

#### トチノキ *Aesculus turbinata* Blume (トチノキ科) 第16図17a~17c

小型(直径約50~70μm)で丸い導管が、単独もしくは放射方向に数個複合してやや密に分布する散孔材。年輪の始めと終わりでは導管の直径及び密度が小さい傾向にある。導管の穿孔は單一で、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は單列同性、階層状に配列する。導管と放射組織との壁孔は蜂の巣状。トチノキは高木になる落葉広葉樹で、温帶の河畔や渓畔にみられる。材質は軽軟で加工・割裂は容易だが、保存性は低い。

#### トネリコ属 *Fraxinus* (モクセイ科) 第16図18a~18c

年輪の始めに中型(直径約120~150μm)の丸い導管が、単独あるいは1~2個複合して2列ほど配列し、そこから急速に径を減じて晩材部ではごく小型(直径約10~30μm)で厚壁の丸い導管がしばしば放射方向に数個複合してまばらに分布する環孔材。導管の穿孔は單一で、内腔にはチローシスが認められる。放射組織は同性で1~4列。トネリコ属にはやや乾燥した立地に生育するマルバアオダモ *Fraxinus sieboldiana* Blumeや、適温な立地に生育するヤチダモ *Fraxinus mandshurica* Rupr. var. *japonica* Maxim.などが含まれる。材質は重硬で粘り強い。

#### タケ亜科 Subfam. *Bambusoideae* (イネ科) 第16図19a

一対の導管を挟んで原生木部間隙と薄部が位置する維管束があり、周囲を扇形に取り囲んだ維管束鞘の厚壁組織が取り囲んでおり、こうした維管束が柔組織の中に散在するのが認められる。

### 考 察

比較的点数の多い製品別にその樹種構成をみると、まず碗にはブナ属・ケヤキ・トチノキといった回転成形に適する均質な材が見いだされている。これらの樹種は日本における椀の用材として典型的なもので、県内の中世の遺跡においても類例がある。木取りはすべて製品の幅を大きく取れるという利点のある横木取りである。それ以外にも、挽物・削物の類では皿にブナ属・ケヤキ、盤とみられる製品にはトチノキが用いられており、典型的である。

櫛にはすべてイスノキが用いられており、こちらも典型的である。イスノキは日本産の木材の中でも最も重硬な部類の材で、また曲げに対する抵抗性があり極めて割れにくく、櫛の用材として優れている。木取りも割れにくいよう繊維方向が刃先にくるようにした縱木取りとなっている。県内では上越市八反田遺跡などで櫛にイスノキが見出されている。

曲物側板にはスギとヒノキといった直通で軽軟な針葉樹材が用いられている。割裂性が良く薄板を挽くのに適し、また従曲性がある材特性から選択されたと考えられ、木取りも薄板の製作に適する柾目取りとなっている。曲物底板にも同様にスギ・ヒノキが見出されているが、木取りは板目のものと柾目のものがあるが、板目のものについては強度に配慮した製作がなされた可能性がある。

その他の製品では、コモゾチにクリ・ブナ属といった比較的重い材質のものが、浮子(有頭状木製品)には軽い材質のスギが用いられている。また毬打にはクヌギ節、櫛にはコナラ節・ヌルデといった強度を有する材が用いられている。いずれもこれらの木製品の使用法を考慮すれば納得のいく樹種選択が成され

ていると指摘できよう。雖には軽軟なヤナギ属の材が用いられており、鉄芯を通しやすいことから選択されたものと推察される。箸・籠・扇などにはスギが広く用いられており、曲物と同様に板材から製作される製品が多い。これは、すでに述べた通りスギが直通で割裂性に優れる材特性を有することのほか、周辺に身近な樹種であったことも背景として想定される。

柱根にはクリ・コナラ節が多く、その他トネリコ属・キハダ・ヤマグワといった樹種も見出されている。これらは小高木または高木になる樹種であり大径が得やすく、また材質も重硬で強靭であるものが多い。県内における奈良・平安時代や中世の遺跡での柱根の樹種同定は比較的行われており、その結果多くの遺跡でクリが多用されており、またトネリコ属やヤマグワが多用されている例もある。したがって同様にやはり重硬な部類の材質でかつ大径の得やすい樹種が選択されているといえ、本遺跡の結果もこれらの遺跡の結果と共通性を有するものである。

また、現在の植物分布からみて注目すべき点は、関東以西に分布しないイスノキが櫛に見出されたことと、およそ中部以北の日本海側には分布しないヒノキが曲物に見出されたことが挙げられる。このような類例は県内の遺跡でも確認されており、上越市八反田遺跡では櫛にイスノキが、中条町蔵ノ坪遺跡では合子に新潟県内にはほとんど分布しないツゲがそれぞれみいだされている。ヒノキに関しては柿崎町新保遺跡において折敷や箸に、和島村奈良崎遺跡において箸や杓子などに、和島村大武遺跡において曲物・指物・下駄などにそれぞれ用いられている例がある。これらの樹種は職人が誕生したとされる時代以前には報告例がないことを考慮すれば、これらの樹種が見出された背景には木材の流通あるいは製品そのものが流通していたことが想定される。他に地域的な要因や遺跡の性格に関わっている可能性もあり、今後検討を要するものであろう。

今回得られた結果は製品別の樹種の使い分けが非常に明瞭で、製品の使用法や製作過程において要求される材質によりその樹種が決定されていることが推察される。スギは用途が広く、生活関連の木製品に多用されており、身近な材であったことが類推される一方、扇・櫛・曲物の一部には現地生とは考え難い樹種が検出されており、木材あるいは製品自体が搬入されていたことが示唆される。

## 2 仲田遺跡から出土した大型植物化石

新山雅広（パレオ・ラボ）

### 試 料

大型植物化石の検討は、既に取り上げ済みでタッパーないし袋に保存された合計15試料について行つた。なお、SE216、SE234については、同じ遺構名の付いた試料が複数あったため、便宜的にa、b、cの枝番号を付けた。

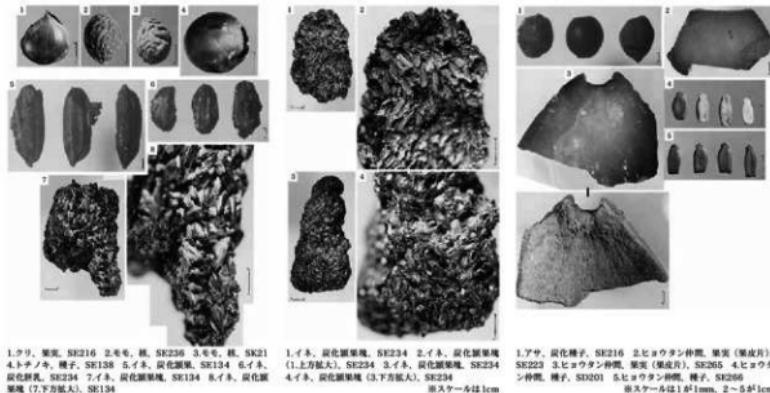
### 考 察

出土した大型植物化石の一覧を第2表に示した。出土した分類群は、木本がクリ、モモ、トチノキ、草本がイネ、アサ、ヒヨウタン仲間である。これらのうち、

遺構名	クリ 葉実	モモ 核	トチノキ 種子	イネ 炭化断葉残	アサ 炭化種子	ヒヨウタン仲間 葉実 種子
SE134						
SE138			1	大塊 2		
SE216a					354 (9)	
SE216b						(27)
SE224a			1			
SE225						(46)
SE234a				小塊 14		
SE234b				大塊 2		
SE234c					大塊 4	
SE236		1				
SE266						(65)
SE291						296 (8)
SE2916					(14)	
SI0001						61 (7)
SK21		1				

\*数字は個数、( ) 内は概万の数を示す

第2表 大型植物化石一覧表



第17図 出土した大型植物化石

モモ、イネ、アサ、ヒヨウタン仲間は、栽培植物であり、クリ、トチノキは食用となる有用植物である。イネは、SE134、SE234で出土したが、いずれも炭化穎果(穎)が塊状に集合したものであり、あまり発泡はしておらず、良好な保存状態であった。胚乳の集合ではなく、穎果の集合であることから、調理に関連したものではなく、貯蔵などされていたものが炭化したのではないだろうか。ヒヨウタン仲間は、果実(果皮)がSE216、SE223、SE265、SE918で、種子がSE266、SD201で出土した。水に関連する祭祀的な意味合いで沈められたことや、井戸として機能しなくなつて埋め戻しの際に投棄されたことなどが予想される。

### 3 花粉分析

鈴木 茂(パレオ・ラボ)

#### 試 料

川跡SX204(第24図左上)より採取された9試料(試料番号1～9)と、それを切るSD201底部の1試料(試料番号10)である。

#### 分析方法

試料(温重約3～4g)を遠沈管にとり、10%の水酸化カリウム溶液を加え20分間湯煎する。水洗後、0.5mm目の篩にて植物遺体などを取り除き、傾斜法を用いて粗粒砂分を除去する。次に46%のフッ化水素酸溶液を加え20分間放置する。水洗後、比重分離(比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離)を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトリシス処理(無水酢酸9:1濃硫酸の割合の混酸を加え3分間湯煎)を行う。水洗後、残渣にグリセリンを加え保存用とする。検鏡はこの残渣より適宜プレパラートを作成して行い、その際サフランにて染色を施した。また、花粉化石の単体標



す。

花粉帶 I (試料 8~10) はイネ科とヨモギ属の高率出現で特徴づけられ、そのうちヨモギ属は試料 8において 35% に達している。その他試料 10においてアカザ科ヒユ科、ナデシコ科、アブラナ科が試料 8・9 よりやや高い出現率を示している。また試料 9 より傷んでいるもののソバ属が 2 個体観察されている。樹木類では出現率が 5% を越える分類群は無く、スギとブナの 2 分類群のみが全試料 1% 以上を示している。その他イチイ科イヌガヤ科ヒノキ科(以後ヒノキ類と略す)、ハンノキ属、コナラ属コナラ亜属、トチノキ属などが若干検出されている。

花粉帶 II (試料 1~7) は 50% 前後の出現率を示すイネ科の高率出現で特徴づけられる。ヨモギ属は 15% 前後とやや率を下げておらず、アカザ科ヒユ科やアブラナ科は I 帯に比べやや目立つて検出されている。また本帶では水生植物のガマ属、サジオモダカ属、オモダカ属、ミズアオイ属(いずれも抽水植物)がわずかではあるが観察されている。その他試料 7 よりやはり傷んだ状態のソバ属が 1 個体検出されている。少ない本木類のなかでは 5% 前後を示すスギが最も多く、その他ヒノキ類、ハンノキ属、コナラ亜属、ニレ属ケヤキ属、トチノキ属などが若干検出されている。

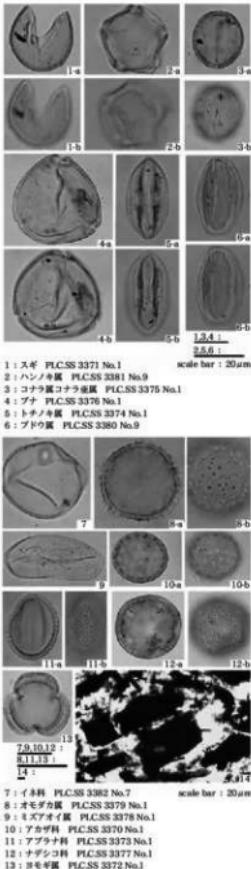
なお、作成したプレパラート中には非常に多量な炭片や少量の未炭化の植物遺体が混入しており、花粉化石 1 個体に対する計数を試みたが、膨大な数になり計数しきれなかった。また炭片量比については試料 1 が約 90%、2・3・5・7 が 95%、4・6 がほぼ 100%、8 が約 50%、10 が約 30% であった。

また図表には示していないが試料 2・3・7・9・10 より寄生虫卵(回虫卵と鞭虫卵)が若干ではあるが観察されている。そのうち試料 3においてはやや目立つて認められ、試料 3においてはイネ科、ヨモギ属に次いでいると思われる。

#### 遺跡周辺の古植生

イネ科花粉が多く割合を占め、プラント・オーバル分析において大量のイネの機動細胞壁體が観察されている。また水生植物が花粉帶 II より得られ、そのうちサジオモダカ属、オモダカ属、ミズアオイ属は水田内に雜草(水田雜草)として普通にみられる分類群である。こうしたことから仲田遺跡周辺においては水田の存在が推測され、その土壤が一部混入しているものと思われる。

栽培植物について上記イネの他に若干ではあるがソバ属が検出されている。またアブラナ科も試料 2 では約 16% と虫媒花としてはやや高い出現率を示しており、遺跡周辺でこれらが栽培されていた可能性があるように思われる。すなわちソバやアブラナ科などが栽培される畑の存在も推測されよう。その他では



第 19 図 仲田遺跡の花粉分析

ヨモギ属が多く検出されており、上記水田や畑、住居などの周辺にヨモギ属を主体にアカザ科—ヒユ科、タンボポ科などの雑草類が多く生育していた。

樹木類についてみると、スギが少ないので比較的安定して検出されていることから、遺跡周辺丘陵部の斜面部を中心にスギ林が形成されていたとみられる。この斜面部には同じ針葉樹のヒノキ類も生育していたとみられ、落葉広葉樹のコナラ亜属やトチノキ属も一部に分布していたであろう。またこれら樹木に絡まるようにブドウ属も生育していた。なお低率ながらブナも多くの試料から検出されている。新潟県のブナ林は標高100～200mからおよそ1,400～1,700mの範囲に分布している。本遺跡は標高40m弱のところに立地していることから、遺跡周辺丘陵部においても生育していた可能性はあるものの大きな林分としてはさらに周囲のやや標高の高い山地部に広げていたのである。

#### 寄生虫卵について

先にも記したが半数の試料から回虫卵や鞭虫卵といった寄生虫卵が検出された。この寄生虫卵について、試料1cc中に1,000個認められることにより糞便の混入、すなわちトイレの可能性が考えられる。今回の試料ではそうした個数にははるかに及ばないと思われる。今回検出された回虫卵や鞭虫卵は野菜をとおして摂取されるもので、上記した栽培が推測されるアブラナ科の野菜？とともに遺構内に混入したことと考えられる。また施肥として糞などに糞便が利用され、水田土壤のように遺構内に混入した可能性もあるように思われる。このように遺構の性格とともに寄生虫卵についてはさらに検討が必要であろう。

### 4 仲田遺跡のプラント・オパール

鈴木 茂（パレオ・ラボ）

#### 試 料

川跡SX204（第24図左上）より採取された9試料（試料番号1～9）と、それを切るSD201底部の1試料（試料番号10）である。

#### 分析方法

秤量した試料を乾燥後再び秤量する（絶対乾燥重量測定）。別に試料約1g（秤量）をトールビーカーにとり、約0.02gのガラスピース（直径約40μm）を加える。これに30%の過酸化水素水を約20～30cc加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により10μm以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作成し、検鏡した。同定及び計数は機動細胞珪酸体についてガラスピースが300個に達するまで行った。

#### 分析結果

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスピース個数の比率から試料1g当りの各プラント・オパール個数を求め（第4表）。それらの分布を第20図に示した。以下に示す各分類群の機動細胞珪酸体個数は試料1g当りの検出個数である。

検鏡の結果、全試料よりイネのプラント・オパール（機動細胞珪酸体）が非常に多く検出されており、上

試料番号	イネ (mg/g)	イネ葉細胞片 (mg/g)	ヨシサ属 (mg/g)	クマザサ属 (mg/g)	他のタケ植物 (mg/g)	ヨシ属 (mg/g)	シバ属 (mg/g)	キビ属 (mg/g)	ウシクサ族 (mg/g)	不明 (mg/g)
1	140.700	287.200	1.600	14.700	1.500	5.900	0	8.600	16.100	13.200
2	105.700	174.600	0	6.100	1.500	6.100	1.500	0	30.600	15.300
3	205.600	406.000	1.700	8.600	1.700	39.400	0	15.400	32.500	27.400
4	146.700	1.073.400	0	10.700	0	16.100	0	8.900	16.100	21.300
5	200.600	2.020.000	0	16.700	0	4.600	0	8.600	14.700	20.600
6	85.100	1.471.400	0	17.300	0	22.100	0	2.500	14.700	17.200
7	93.300	136.000	0	4.700	1.600	15.800	0	11.100	11.100	11.100
8	34.300	93.100	2.400	29.400	2.400	66.100	0	12.200	100.400	29.400
9	10.700	10.700	0	32.100	0	0	0	1.300	2.700	2.700
10	45.700	57.100	0	20.000	1.400	15.700	0	15.700	20.000	18.600

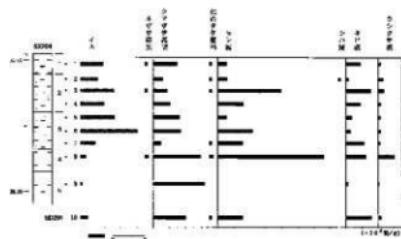
第4表 試料1g当たりのプラント・オパール個数

位6試料で100,000個を越え、試料7でも90,000個に達している。また図表には示していないがイネの穎に形成される珪酸体の破片が全試料でさらに多く観察されている。さらにイネと思われる単細胞珪酸体が連なった状態で多く認められる（ともに第21図参照）。

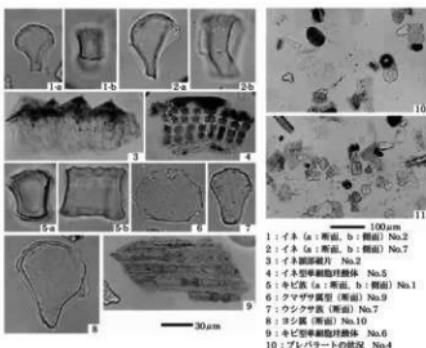
イネ以外ではウシクサ族が多く、試料8では100,000個を越えている。ヨシ属は多くの試料で10,000個以上と珪酸体の形成量の少ないヨシ属にしては非常に多く、試料8では70,000個近くに達している。やはり生産量の少ないキビ族も10,000個前後と比較的多く得られている。クマザサ属も多くの試料で10,000個を越え、SX204では上位に向かい減少する傾向がみられる。その他ネザサ節型やシバ属が若干観察されている。

## 考 察

上記したように、全試料よりイネの機動細胞珪酸体が非常に多く検出され、連なった状態のものも多く認められる。これはイネだけではなく、ヨシ属やウシクサ族にも認められ、キビ族も比較的多く得られている。またイネの穎に形成される珪酸体の破片がさらに多く観察されている。こうした観察結果に加えプラント・オパール分析の際に絶対乾燥重量を測定した乾燥試料6において、灰と判断される白色や黒色の針状遺体が観察された。少なくともイネ科植物は完全に灰化されると灰白色化するもので、土層観察で認められている灰白色シルトブロックや黒色のシルトブロックはこうしたものではないかと思われる。以上のことからSX204の埋積土はイネを主体にヨシ属やウシクサ族、キビ族などの灰や灰化しきれなかった炭片が多量に混入していると推測され、SX204は灰などを廃棄したところではないかと思われる。



第20図 SX204・SD201構造のプラント・オパール分布図



第21図 仲田遺跡のプラント・オパール

## 第VII章 まとめ

### 1 集落の変遷

今回の発掘調査の結果、仲田遺跡が川縁に営まれた中世集落（11世紀後半～13世紀・15世紀）であることが明らかになった。特に、中世前期の集落は、県内でも調査事例が稀有な時期であり注目される。さらに第IV章で記述したとおり、掘立柱建物及び溝の主軸方向・切り合い関係・出土遺物・覆土の分類等の検討から、中世集落をⅠ期～Ⅳ期に区分することができた。時期ごとの造構分布をみると、基本的には掘立柱建物と井戸が重複しない傾向が認められ、時期区分にある程度の蓋然性を見出せた。ここでは、各期の概要と変遷観をまとめたい。

#### 中世Ⅰ期（11世紀後半～12世紀）

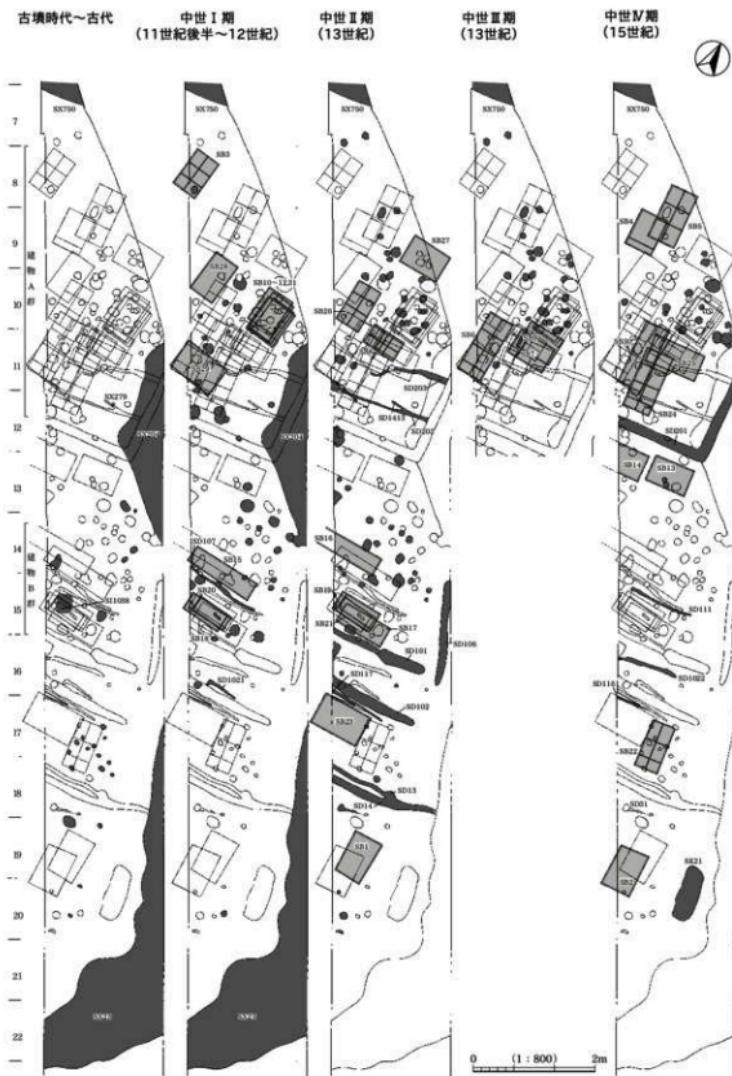
掘立柱建物の主軸方向は真北から4°～7°西偏する段階で、溝は建物と平行または直交するように構築される。造構覆土最上層は黒色または黒褐色シルトである。この段階の造構からは、11世紀後半～12世紀の遺物が出土しているが12世紀が主体である。Ⅰ期では、川跡は完全に埋没しておらず、浅くなっているものの機能していたと考えられる。該当する造構は、掘立柱建物10棟・井戸25基・土坑14基・溝2条がある。

造構の分布は、川跡の西側ほぼ全域で認められるが、特に建物A・B群とその周辺に集中する。建物A群で7棟、建物B群で3棟である。建物A群で特筆すべき点は、SB28・SB29・SB31の位置関係である。SB29（側柱）は桁行2間以上・梁間2間の建物である。桁行方向の柱穴間隔は2.8mであり、他の建物の形態を考慮すれば1間延伸する可能性が高い。1間（2.8m）分を西側に延長すると西側梁間の柱筋と、北側約7mに位置するSB28（側柱）の東側桁行の柱筋とがほぼ合致する。SB28とSB31（側柱）は北・南側梁間の柱筋がほぼ合致する。この3棟の建物間隔を見るとSB29とSB28・31の間隔は約7.0m、SB28とSB29の間隔は約6.9mであり、3棟はほぼ同じ距離間を保っていた。以上のことを勘案すると、3か所に分布する建物（SB10～12・28・29・31）の配置には規則性を窺うことができる。

また、SB10～12・31は4棟の建物が重複しているが、構造や規模により2種類に分類できる。SB11・31（側柱）は、若干規模が異なるものの3間×2間で、梁間の中間柱が東の桁行側に偏るという共通性がある（第22図）。構造上共通するSB11・31の重複は、前後関係は不明であるものの、連続する建替えを反映している可能性がある。SB10・12（側柱）も、構造が類似しており同様の指摘ができる。このことから、建物の構造に相違が認められるものの、一定の範囲で同程度の建物が、4回以上建替えられていることを指摘できる。建物B群は、梁間に對して桁行が長く、梁間は1間に統一されている特徴をもち、建物A群とは明らかに構造を異にする。SB18・20は、構造が共通する建物が重複して分布する。

井戸は、建物B群及びその周辺と建物A群の2か所に纏まっており、特にB群は建物の北側に集中する。A群では「コ」の字に配置された建物によって作出された空間とSB29の東・南側に位置する。20列に位置するSE18の周辺にはこの段階に属する造構が全く検出されていない。井戸が単独で存在していたと考えれば、この段階の集落の範囲は南側に関して言えば16列付近を境に集落の端と判断できる。し

1 集落の変遷



第22図 集落の変遷

かし、建物に伴うものという判断にのっとれば、南西・西方に建物が展開されている可能性が考えられ、集落は調査区西侧に延びている可能性がある。土坑の分布は、ほぼ井戸と同じである。特に、直径が大きく深さが浅い大型のものは、建物と隣接しているもの（SK112・193・237・276・999）と、建物からある一定の距離をおき単独で存在（SK118・217）するものがある。

### 中世Ⅱ・Ⅲ期（13世紀）

掘立柱建物の主軸がほぼ真北を示す段階で、溝は建物と平行または直交するように構築される。造構複土最上層は暗褐色シルトである。この段階の造構からは、13世紀の遺物が出土している。川跡はほぼ埋没したものの、北東側は低地であったと考えられる。大きく1時期として捉えることができるものの、建物A群における切り合い関係から時期を細分することができる。また、Ⅳ期に共通する構造の建物を後出的なものと判断され、それが切り合い関係と合致したことからⅡ期とⅢ期に細分した。

中世Ⅱ期に該当する遺構は、掘立柱建物跡9棟・杭列2条・井戸40基・土坑21基・溝10条である。分布は、川跡の西側ほぼ全域で認められるが、建物A・B群に集中する。掘立柱建物は、建物A群で3棟、建物B群で4棟、17列で1棟、19列で1棟検出されている。Ⅰ期で建物が検出されなかった調査区南側からも建物が検出され、利用空間が拡大されたものと考えられる。

建物A群で特筆すべき点は、SB8・SB26・SB27の配置関係である。SB26（総柱）の桁行東側の柱筋とSB27（側柱）の梁間西側の柱筋がほぼ一致し、またSB26とSB8（総柱）は柱筋が通らないが1.8mの距離を置いて並列する。3棟の建物は、Ⅰ期と同様に東側が開口する「コ」の字状に配置されている。Ⅰ期では総柱建物1棟に対して側柱建物が3棟（建替えを含めると6棟）であったものが、Ⅱ期では総柱建物が2棟・側柱建物が1棟という構成となり、異なる様相が認められる。建物B群で検出された4棟は、Ⅰ期の構造を継続しており、梁間に対して桁行が間延びした建物に限定されている。

溝は、SB17・19・21の南側桁行と平行するように規模の大きな溝（SD101）が認められる。建物の位置関係からSB17に付随する溝と考えられる。また、SB23の北側桁行の脇にも並行する2条の溝（SD117・102）が検出されている。SD13・14は、建物との関係が不明であるが、規模・形態・主軸方向がSD101・102と共通することから当期に位置付けた。なお、SD101とSD102の間にも建物の存在が想定されるが、ピットの分布は散在的であり、掘立柱建物を認識することはできなかった。

井戸は、Ⅰ期と同様、建物A群・建物B群とその周辺の2か所に纏まっている。建物A群では、「コ」の字に配置された建物によって形成される空間とその周辺に集中する。B群では、建物の北側に集中しており、Ⅰ期と同様の傾向が認められる。土坑は、井戸の分布とほぼ同じ様相を呈する。中でも、直径が大きく深さが浅い大型のものは、建物B群の建物に隣接するように位置することが特徴的である。

中世Ⅲ期に該当する遺構は、掘立柱建物3棟のほか、井戸・土坑も存在するがⅡ期と区別することができなかった。建物A群で特筆すべき点は、SB6・7・9の位置関係である。SB6（総柱）の北側の柱筋とSB7（側柱）の北側桁行の柱筋はほぼ合致する。両者は1.5mの間隔を保ちながら「L」字状に位置し、配置に計画性が想定される。SB7と重複するSB9（側柱）は、梁間の間数が異なるほかは規模・棟方向・桁行間数・西側の張出し部といった構造が共通する。前後関係は不明であるが建替えの結果と考えられる。

### 中世Ⅳ期（15世紀）

掘立柱建物及び溝の主軸方向が真北から $5^{\circ}$ ～ $7^{\circ}$ 東偏する段階で、遺構覆土は地山ブロックを主体とする特徴的なものである。この段階の遺構からは、15世紀の遺物が出土している。また、Ⅲ期とⅣ期の中間に位置付けられる14世紀の遺物は出土していない。14世紀には焼山噴火に伴う自然災害の影響を受けた可能性が高く、集落の断絶はそのことと関係するかもしれない。該当する遺構は、掘立柱建物9棟・井戸17基・土坑1基・溝4条・方形竪穴状遺構1基である。遺構はほぼ全城に分布するが、特に建物A群に集中する。掘立柱建物はSD201の区画内に5棟、区画外の13列で2棟、17・19列で各1棟検出されている。なお、I～Ⅲ期にかけて継続的建物B群には、該当する建物を認めることはできなかつた。

Ⅳ期においてまず特筆すべきことは、断面「V」字・平面「L」字の区画溝（SD201）の存在である。I期～Ⅲ期の溝とは規模・構造が異なり、「溝」というよりは「堀」とすべきかもしれない。この区画内からは、同時期と判断される掘立柱建物が検出されている。溝が建物群を区画する事例が顕著になる時期〔坂井1997〕に相当するが、そのことを実態的に把握できる。建物の構成は、側柱建物が3棟・総柱建物が2棟で、SB25を除けば全て東西棟である。建物の分布は南西側（11・12列）に位置するSB24・25・30と、9列に位置するSB4・5に二分され、この建物間に井戸13基が集中する。また、I～Ⅲ期までは素掘りの井戸のみであったが、Ⅳ期では石組井戸2基（SB219・247）が認められた。特に、SE219はSE211・267を切っており、石組井戸に後出的な要素を見出せる。土坑は、本期のものは認められなかった。

また、屋敷の南東角付近には区画溝と建物（SB24・25・30）によって仕切られた空白域が認められる。重複するこの3棟は並存したわけではなく、各建物により作出される空白域はそれぞれ異なる。しかし、一定の範囲を継続的に空白域としている状況は注目されよう。また、溝底部からの遺物・焼蹠の出土は、この周辺（南東隅）に限定されており、相互の関連が想定される。

SD201による区画の外では、遺構が散在的に認められる。掘立柱建物は、側柱建物が3棟・総柱建物が1棟である。棟方向は東西棟・南北棟とも各2棟である。13列に位置するSB13・14は、区画溝と2mほどの距離を保って平行して構築されている。特にSB13は、SD201の南北方向と東妻側の軸が合致することから、SB13・14と区画溝との関連性を指摘できる。井戸は13列から2基検出された。SB13と切り合い関係にあるが新旧関係は不明である。溝は、15～17列で3条（SD111・116・1022）が検出された。溝は、幅が狭く浅いものであり、一定の間隔を保って並列する。溝間にはビットが認められ建物が存在した可能性を残すが、その分布は散在的であり、その可能性は低い。方形竪穴状遺構（SK21）は、SX23の川縁（20列）に位置するが、この段階では川跡がほぼ埋没したものと考えられ、直接的な関係を想定することは難しい。また、西側7mに位置するSB2とほぼ並行していることから関連性を指摘できよう。

## 2 中世の土器・漆器

中世の土器・漆器は、主に井戸から出土した。中世土師器・珠洲焼・輸入陶磁器・漆器の共伴関係が明らかになり、編年研究に重要な情報をもたらすものと思われる。特に、珠洲焼Ⅰ期の資料が、そのような

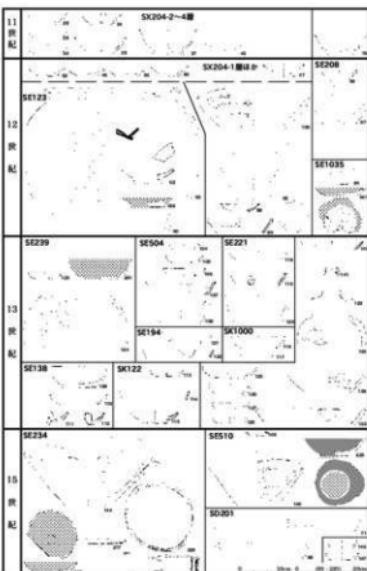
状況で出土することは稀であり注目される。本遺跡の遺構出土資料を、大きく11世紀・12世紀・13世紀・15世紀の資料に分類し整理した(第23図)。

11世紀の資料は、川跡SX204の2~4層出土資料に代表される。無台・有台の碗・皿が認められるが、11世紀後半を中心とするものであろう。詳細は次項で記述する。

12世紀の土器は、北陸系の土師器皿と珠洲焼Ⅰ期の資料である。ロクロ成形・回転糸切り手法による北陸系の土師器皿は、11世紀後半~12世紀前半に位置付けられるので、珠洲焼が登場する12世紀後半の資料とは一線を画すことができよう。特に、SX204の1層から出土した無台皿(46)と有台皿(47)は伝至徳寺跡SK479〔篠澤・水澤2001〕と共にすることから12世紀前半に位置付けられる。しかし、SE208においては北陸系の土師器皿と珠洲焼が共存する状況にあった。土師器皿は覆土上部から出土しており、両者が共存しない可能性もあるが、先述のとおり調査時の所見からすれば混入の可能性は低いと考えている。共伴関係にあるとすれば、北陸系の土師器皿が12世紀後半まで主体的でないとしても残存した可能性を指摘できる。また、この段階の土器には、土師器写しのベタ高台の漆器が共伴している。SE123では珠洲焼Ⅰ期に、SE1035では柱状高台の土師器皿に伴っている。柱状高台は、裾部が広がらない形態である。類例は、山木戸遺跡SE9出土例があり、珠洲焼Ⅰ期の鉢とともに出土している〔新潟市史編さん室1994〕。すなわち、両者とも珠洲焼Ⅰ期段階の資料といえ、12世紀後半に位置付けられよう。

13世紀の資料は、手づくねの土師器皿と珠洲焼Ⅱ・Ⅲ期の資料である。土師器皿は比較的薄手でシャープなものが多く、13世紀後葉の資料とは異質である。伝至徳寺編年と比較すれば、13世紀初頭から前葉の資料に共通性が見出されよう。また、手づくねの土師器皿は、劃文花が施された青磁を伴うケースが多いことも特徴的である。一部が珠洲焼Ⅲ期に下る可能性があるほかは、13世紀前葉を中心とする資料が多数を占めるものと考えられる。この段階の土器に伴う漆器は、ベタ高台のものとわずかに高台が作出されたものとがあり、後者には12世紀に後出する要素が見出されよう。

15世紀の土器は、珠洲焼Ⅴ期の資料である。この段階では、断面「V」字の溝や石組井戸が検出されており、遺構の充実度と比べれば遺物の数量は少ない。しかし、広く平坦に作出された口縁端面が内傾する鉢が一定量認められ、これに古瀬戸後期の天目茶碗〔藤澤1991〕が伴う状況にあった。両者の年代観には齟齬はない。この段階の漆器や曲物には特徴的な様相が認められる。漆器碗は、高台を有するものに限定され総赤漆のもの(225)が認められ、本遺跡における13世紀の資料とは異質である。また、15世紀に欠落するとされる小皿〔春日2001〕が伴うことが明らかになった点も注目される。曲物は、ヒノキ



第23図 仲田遺跡における中世の土器・漆器

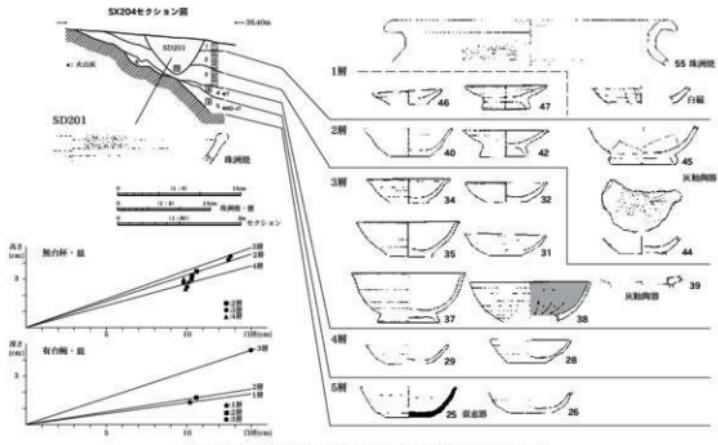
製の木釘を用いないもの（220）が、この時期に限定的に認められることも特筆される。

### 3 川跡SX204における遺物の層位的出土

川跡SX204においては、遺物が層位的に出土した（第24図）。1層からは、北陸系の土師器皿及び珠洲焼Ⅰ期に代表される12世紀の資料が、2～4層からは11世紀後半に位置付けられる有台・無台の土師器皿が、5層からは9世紀の須恵器杯・土師器杯が出土した。さらに1層を切るように形成されたSD201からは15世紀（珠洲焼V期）の資料が出土した。

これらの層位的出土状況は、従来の編年観と一致する状況にあり、そのことを実態的に示す好例といえる。さらに2～4層においては、近接する時期の資料が層位的に出土しており、上位と下位とで相対的な形態差が認められた。出土位置は傾斜する川縁であり、出土状況が逆転することも予想されようが、大局的な前後関係を把握することはできる。無台皿は、最も下位の4層では浅身のもの（29・30）、上位では比較的深身のものが認められる。形態上の共通性を考えれば、浅身の無台皿が12世紀以降の形態と連続するといえようが、実際には浅身のものほど下位から出土する傾向にあった。深い無台皿は伝至德寺編年で11世紀前葉に位置付けられるSK477の資料〔笠澤・水澤2001〕にも認められ、11世紀後半より遡る可能性も指摘できる。これとは対照的に有台の皿・椀は、3層には深身の椀（37）、2層には浅身の皿（42）が特徴的に加わる。有台皿は、後出のものほど浅身であり、さらに1層出土例（47）と形態的連続性が認められる。これら形態的推移については、一ノ口遺跡東地区のSD1'における層位的出土例〔鈴木・春日1994〕と併せて検討することで有効性が増すことであろう。しかし、形態別構成比の変遷観をみると必ずしも一致する状況ばかりではない。

ただし、平面分布において、遺存率の高い土器類がまとまっていることには注意しなくてはならない。川跡が大きくカーブし、傾斜が急な範囲にあたる11C19・20付近のわずか2m×3mほどの範囲に集中



第24図 川跡(SX204)における遺物の層位的出土状況

する。このような状況を勘案すれば、饗宴（儀礼）に伴う土師器一括廃棄遺構である可能性があろう。しかし、SX204川縁の堆積土は、プラント・オパール分析の結果から灰を廃棄した土層である可能性が指摘されている。深さが1.5m以上ある川縁を一時期に埋め戻すことは想定にくく、徐々に埋め戻された可能性が高い。そうであれば、大きな層位の逆転は考えにくい状況にあると考えられる。

また、4層及び5層からは火山灰が検出されている。新潟大学積雪地域災害研究センターの高瀬信行氏・ト部厚志氏によれば両者は異なる火山灰のことである。特に、5層からは多量に検出されており、焼山が約1,000年前に噴火した際、頸南地域に降下した高野池火山灰グループのKG-c〔早津1994〕である可能性が高い。火山ガラスの化学組成を明らかにしていないため、現段階では具体的な供給源や年代は明らかでないが、遺物の層位的出土状況と併せれば今後、重要な指標になるものと考えられる。

#### 4 木製品にみられる樹種の選択性

木製品は、形態ごとに適切な樹種選択性がなされていることが明らかになったが、樹種ごとに異なる特性を把握して選択性が理解された。特に、櫛にはイスノキ、漆器にはケヤキ・ブナ属・トチノキ、曲物にはスギ・ヒノキが特徴的に充てられており、このうちイスノキ・ヒノキは搬入品と考えられた。また、漆器・曲物は、樹種の選択性・製作技術が年代ごとで相違しており注目される。

漆器は、土器との共伴関係や漆器自体の形態差から12・13・15世紀の資料が存在することが明らかになっており、その編年研究に重要な情報をもたらすものと考えられる。漆器の樹種は、出土した11点すべてを分析した結果、ケヤキ・ブナ属・トチノキが充てられていた。いずれも回転成形に適する均質な木材であり、合理的な樹種選択性であったと理解される。ただし、本遺跡においては、年代ごとに樹種の選択性が異なることが注目される。12・13世紀の漆器はすべてケヤキ、15世紀の漆器にはブナ属やトチノキが充てられていた。能登では、中世前期をとおしてケヤキ材が半分近く使用されている反面、後期ではブナ材が多くなりケヤキは後退し、トチ、サクラ、マツ、カエデなど多様な樹種の使用が認められる〔松田1987〕とされるが、共通する状況が理解される。そのことを一遺跡において実態的に示せたことは重要であろう。

曲物は、樹種と底板の固定方法との間に有意な関係を認めることができた。底板の固定方法には、側方から木釘を打ち込むことで固定するもの（177・203・205・236・263）と、木釘等の部材による固定具を一切用いず断面台形状の特徴的な底板を用いるもの（221・264）とがある。本遺跡においては、前者にはスギ、後者にはヒノキが充てられていた。特に、ヒノキは搬入品である可能性が高い。また、ヒノキを用いた曲物はすべて15世紀の遺物と共に出土しており、搬入の時期を限定的に捉えることができる可能性がある。年代・製作技法・素材の選択性が、整合することは偶然の結果とは考えるべきではない。

## 要 約

- 1 仲田遺跡は、頸城平野の南東端、別所川・大熊川によって作出された扇状地の末端に立地する。
- 2 調査は、北陸新幹線の建設に伴い、平成14年に調査を実施した。調査面積は5,100m<sup>2</sup>である。
- 3 調査の結果、古墳時代・古代・中世の遺構・遺物が、旧小熊川の流路に沿うように検出された。
- 4 検出された遺構は、溝17条、掘立柱建物31棟、井戸85基、土坑59基、方形竪穴状遺構1基等である。一部が古代以前のものであるほかは、ほとんどが中世（11世紀後半～15世紀）の遺構である。掘立柱建物は、南北方向の溝と平行するように配置されていた。
- 5 中世集落は、掘立柱建物の主軸方向、遺構の切り合い関係、出土遺物、遺構覆土の状況から、少なくとも3～4時期にわたって形成されていることが明らかになった。特に、掘立柱建物は主軸の相違等により4期に区分された。そして、後出のものに純柱建物の大型化、張り出し部（庇）の顕在化が認められた。これらの成果は、今後の中世集落の研究に多大な情報をもたらすものと期待される。
- 6 多数検出された井戸の多くは素掘りであるが、15世紀に位置付けられる石組井戸2基が検出された。
- 7 中世の土器は、遺構内の共伴関係、川縁SX204における11世紀後半～15世紀の土器の層位的出土が注目される。特に、11世紀後半～12世紀の資料は、県内でも類例が少なく、土器の編年研究に多くの情報をもたらすものと期待される。
- 8 本製品は、井戸底部から多数出土した。形態ごとに異なる特性をもつ樹種が選択的に利用されていた。特に、漆器・曲物・櫛は、明らかな搬入品であり、樹種と形態の強い関連性が窺えた。また、漆器・曲物については、年代ごとに樹種の選択・製作技術が相違しており注目される。
- 9 古墳時代の遺物は、竪穴住居床面から7世紀後半の良好な一括資料（甕・瓶・碗）が得られている。

## 引用参考文献

- 浅見恵・平野団三 1986 「中頭城跡」『日本歴史地名大系第十五巻 新潟県の地名』平凡社
- 荒川隆史・加藤 学 1999 「和泉A道路」新潟県教育委員会 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 伊藤正一 1966 「頸南の城館跡」「頸南」新潟県文化財年報第六 新潟県教育委員会
- 井上聰夫 1966 「中世の頸南」「頸南」新潟県文化財年報第六 新潟県教育委員会
- 植木 宏 1980 「新潟県城郭解説」『日本城郭大系』7 新人物往来社
- 小野正敏 2001 『日本の中世遺跡』東京大学出版社
- 小村 弘 1989 『角川日本地名大辞典 15新潟県』角川書店
- 加藤晋平 1973 「中世の石塔と城館址」『新井市史』上巻 新井市役所
- 春日真実 1999 「第4章 古代 2 土器の編年と地域性」『新潟県の考古学』新潟県考古学会
- 春日真実 2001 「柏崎市鶴巻田遺跡出土漆器の編年の位置」『新潟考古学講話会会報』23 新潟考古学講話会
- 小池邦明 1999 「第5章 中世・近世 2-1中世前期」『新潟県の考古学』新潟県考古学会
- 駒形敏朗 1987 「三貫梨遺跡－第2次発掘調査－」長岡市教育委員会
- 駒形敏朗 1998 「中道遺跡」長岡市教育委員会
- 坂井秀弥 1982 「栗原遺跡4次・5次発掘調査報告書」新潟県教育委員会
- 坂井秀弥 1983 「栗原遺跡6次発掘調査報告書」新潟県教育委員会
- 坂井秀弥 1984 「今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡」新潟県教育委員会

- 坂井秀弥 1985 「頸城平野古代・中世開発史の一考察—頸城村を中心にして—」『新潟史学』18 新潟史学会
- 坂井秀弥 1986 『新井市坪ノ内館跡』新潟県教育委員会
- 坂井秀弥 1987 『番場遺跡』新潟県教育委員会
- 坂井秀弥 1997 「中世集落の展開と城館の動向」『中・近世の北陸－考古学が語る社会史－』桂書房
- 笠澤正史・水澤幸一 2001 「伝至徳寺跡の遺物様相～中世前半を中心として～」『上越市史研究』6 上越市
- 品田高志 1991a 「越後における古代・中世の漆器—漆器食膳具を中心にして—」『新潟考古学談話会会報』7 新潟考古学談話会
- 品田高志 1991b 「越後の中世土器—編年の研究の現状と課題—」『新潟考古学談話会会報』8 新潟考古学談話会
- 品田高志 1993 「越後における古代と中世の陶器—土器類と漆器の食膳具からみた若干の検討—」『新潟考古学談話会会報』11 新潟考古学談話会
- 品田高志 1997 「越後国における土器の変遷と諸相」『中・近世の北陸－考古学が語る社会史－』桂書房
- 鈴木俊成・春日真実 1994 「一ノ口遺跡東地区」新潟県教育委員会 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 田村浩司 1999 「第5章 中世・近世 3-3漆器」『新潟県の考古学』新潟県考古学会
- 高橋 勉 1999 「第5章 中世・近世 2-1頸城平野南部の集落」『新潟県の考古学』新潟県考古学会編
- 鶴巻康志 1999 「第5章 中世・近世 2-2中世後期」『新潟県の考古学』新潟県考古学会
- 水井久美男 1994 「中世の出土銭—出土銭の調査と分類—」兵庫埋蔵銭調査会
- 奈良国立文化財研究所 1984 『木器集成図録 近畿古代篇』奈良国立文化財研究所史料第27冊
- 奈良国立文化財研究所 1993 『木器集成図録 近畿原始篇』奈良国立文化財研究所史料第36冊
- 新潟市史編さん室 1994 『新潟市史 資料編1 原始・古代・中世』新潟市
- 花ヶ前盛明 1986 「中世最後の歴史—武将と古城をさぐる—」新人物往来社
- 早津賢二 1994 「新潟焼山火山の活動と年代—歴史時代のマグマ噴火を中心として—」『地学雑誌』103-2
- 原 明芳 1994 「信濃の施釉陶器」『古代の土器研究—律令的土器様式の西・東3 施釉陶器』古代の土器研究会
- 藤澤良祐 1991 「瀬戸古窯跡群—古瀬戸後期様式の編年—」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』X
- 藤巻正信 1988 「西田・鶴巻田遺跡群」新潟県教育委員会
- 横田賢次郎・森田 勉 1978 「大宰府出土の輸入中国陶磁器—型式分類と編年を中心として—」『九州歴史資料館 研究論集』4
- 吉岡康暢 1994 「中世須恵器の研究」吉川弘文館
- 前川 要 1989 「中世土器・陶磁器の研究史と問題点」「中世土器の基礎研究」 日本中世土器研究会
- 松沢亜生 1959・1960 「石器研究におけるテクノロジーの一方向」『考古学手稿』7・12
- 松田隆嗣 1987 「西川島遺跡群より出土した木製品の樹種について」『西川島』石川県穴水町教育委員会
- 水澤幸一 1993 「越後における中世村落の様相」『中世北陸の家・屋敷・暮らしぶり』北陸中世土器研究
- 水澤幸一 2001 「下町・坊城遺跡V」中条町教育委員会
- 森沢 勉 2001 「針地区 熊川」『板倉町史 別巻 集落誌』板倉町
- 森本朝子 1997 「II-3-5出土遺物の分類」『博多60』福岡市埋蔵文化財調査報告書第543集 福岡市教育委員会



















土器觀察表 (胎土: 石=石英、白=白色粒子、雲=雲母、チャ=チャート)

報告番号	種別	器形	大きさ	小グリッド	通底	通底番号	刷毛	口径 (cm)	脚高 (cm)	底径 (cm)	色調 (外曲)	色調 (内面)	胎土	製作痕跡	消費痕跡	備考
1	土師器	長胴壺	15B 4	SI	1038	床		156	247	70	橙	浅黄禮	難・白・石・雲	上縁: ヨコナデ、体部外曲: タテハケ (下→上)、内面: ヨコナデ (右→左)	体部外曲: スス	
2	土師器	長胴壺	15B 4	SI	1038	床		176			に赤い禮	に赤い禮	白・石・チャ・難	外縁: 口縁ヨコナデ、脚部タテハケ (下→上)、内面: 脚部ヨコハケ (右→左)	外曲: スス	
3	土師器	長胴壺	15B 4	SI	1038	床		160			に赤い禮	に赤い禮	石・チャ	上縁: ヨコナデ、体部外曲: タテハケ (下→上)、体部内面: ヨコハケ	体部外曲: スス	ハケメ粗い
4	土師器	長胴壺	15B 4	SI	1038	床				86	橙	褐灰・黒	難・白	抵抗外曲面: ヨコハケ、体部外曲面: タテハケ	抵抗外曲面: ハケ	被熱
5	土師器	瓶	15B 2	SI	1038	床		105	49	57	褐灰	に赤い禮	白・石・雲・角閃石	口縁: ヨコナデ		
6	土師器	瓶	15B 4	SI	1038	床		240	233	113	に赤い禮	に赤い禮	石・白・難・角閃石	外縁: 口縁ヨコナデ、脚部タテハケ、把手ケヌリ、内面ヨロゾン		
7	土師器	瓶	15B 3	SI	1038	Pit底部分		229	185	104	に赤い禮	に赤い禮	白・石・チャ・難・海綿骨針	上縁: ヨコナデ、内面: ヨコハケナデ、脚部内面: ヨコハケナデ		外曲に朱色の付着物(赤苔?)
8	土師器	長胴壺	15B 23	SD	111	I	(200)				に赤い禮	に赤い禮	難・長・石・雲	上縁: ヨコナデ、内面: ヨコハケナデ、脚部内面: ヨコハケナデ		
9	土師器	壺	20B・20C	SK	21	中部				57	に赤い禮	に赤い禮	石・白・チャ・難	内面: ヨコハケ		
10	土師器	無台杯	13C 3		IV			133	50	45	褐灰	灰黄褐	長・白・チャ (難)	外縁: ヨコナデ、内面: ヨコナデヨコギキ		
11	土師器	高杯	22B	SX	23	8					褐黄褐		杯底・黒・脚部・灰黄	外縁: ハマ割り、杯部内面: ミガキ・黒色施墨、脚部内面: ナデ		
12	肌徹器	無台杯	22C	SX	23	8		136	42	74	灰	灰	長・難	ロクロナデ、回転ヘラ切り→ハマ割り		
13	肌徹器	無台杯	22B	SX	23	8		145	46	112	に赤い褐	褐灰	長・石・難	ロクロナデ、回転ヘラ切り→ハマ割り		ヘラ記号「×」
14	肌徹器	有台杯	22B	SX	23	8		155	40	100	灰	褐灰	白・石・難	ロクロナデ、回転糸切ヨリナダ→高台貼付		
15	土師器	無台杯	22C	SX	23	8		120	40	60	に赤い黄	に赤い黄	石・長・チャ	ロクロ→ヨコナデ、底縁: ハマ割り		
16	肌徹器	無台杯	22B	SX	23	8		124	35	80	灰黄褐	灰黄褐	白・チャ	ロクロナデ、回転ヘラ切り		
17	肌徹器	有台杯	22B	SX	23	8		98	54	58	灰	灰	白・石	ロクロナデ、回転ヘラ切り→高台貼付		筆書「里」
18	肌徹器	有台杯	22B	SX	23	8				96	灰	灰	白・チャ	ロクロナデ、回転糸切ヨリ高台貼付		筆書「南」
19	肌徹器	杯蓋	22B	SX	23	8	(178)	31			オリーブ灰	白	白	ロクロナデ、つまみ形器、外縁: 高自然釉		
20	肌徹器	壺	22B	SX	23	8		144			灰白	白・石	白	ロクロナデ、高台貼付		
21	肌徹器	壺	11C 17	SX	204	1	(630)				灰	灰	白	内面: ヨコナデ、外縁: 波状文		
22	肌徹器	壺	9B 13・18	SE	506	上部	(410)				灰	白・石	白	ロクロナデ		焼成: 透元 硬質
23	土師器	長胴壺	17B 18	SK	1017	I	108				浅黄禮	浅黄禮	チャ・石・白	上縁内外面: ロクロナデ、体部内面: カリナ		
24	土師器	壺	12B 22	SX	279	I	242	322	38	橙	浅黄禮	白・石・雲・チャ	上縁内面: ヨコナデ、体部内面: ハマケ (下→上)	外曲: スス		
25	肌徹器	無台杯	11C 19	SX	204	5	118	38	60	灰白	灰白	石・雲	ロクロナデ、回転糸切			
26	土師器	無台杯	11C 19	SX	204	5			49		に赤い禮	に赤い禮	白・石 (きめ細かい)	内面: タートル状特徴		
27	製塙土器				SX	204	6			60	明赤褐	明赤褐	白・石	手づくね		
28	土師器	無台杯	11C 20	SX	204	4	97	29		47	に赤い禮	に赤い禮	白・長・雲・チャ	ロクロナデ、回転糸切ヨリ		
29	土師器	無台杯	11C 20	SX	204	4	99	24		47	に赤い禮	に赤い禮	白・雲 (きめ細かい)	ロクロナデ、回転糸切 (ヨリ)		
30	土師器	無台杯	11C 20	SX	204	2・4	101	28		48	に赤い禮	に赤い禮	白・石・雲 (きめ細かい)	ロクロナデ、回転糸切 (ヨリ)		
31	土師器	無台杯	11C 19・20	SX	204	3	98	28		40	に赤い禮	に赤い禮	白・石・雲 (きめ細かい)	ロクロナデ、回転糸切 (ヨリ)		
32	土師器	無台杯	11C 19	SX	204	3	100	25		53	に赤い黄	に赤い黄	白・空	ロクロナデ、回転糸切		
33	土師器	無台杯	11C 20	SX	204	3	97				に赤い禮	に赤い禮	白・石・雲 (きめ細かい)	ロクロナデ		
34	土師器	無台杯	11C 19	SX	204	3	(103)	30	48	褐灰	灰黄褐	白・石・雲	ロクロナデ、回転糸切	内面: スス		
35	土師器	無台杯	12C 18	SX	204	3	127	44	56	褐灰	褐灰	白・雲・チャ	ロクロナデ、回転糸切			
36	土師器	無台杯	11C 20	SX	204	3	126	42	63	に赤い禮	に赤い禮	白・赤色粒子・チャ	ロクロナデ、回転糸切			



番号	種別	器形	大きさ リットル	小口 リッド	通風 装置	通風 番号	肩位	口径 (mm)	底径 (mm)	色調 (外面)	色調 (内面)	胎土	製作痕跡	消費痕跡	備考	
74	土師器	杯	10B 17	SK 237 2			122			灰黄褐	灰黄褐	白・石・雲	ロクロナデ			
75	土師器	杯	11B 2	SE 220	3		140			灰白	灰白	白・石	ロクロナデ			
76	土師器	有台脚 12C 2	SE 210 9	(151)	(50)	64	に bei 黄 裡			石・雲・白・ 海綿骨針		ロクロナデ、回転角切 り、窓台貼付、内面・ 黑色処理・結晶	昭文:「十」 字状			
77	土師器	有台脚 少々變	12C 2	SE 210	底部				65	黒	黒	白・石 (きめ 細かい)	ロクロナデ+ヨコミガ キ、黑色處理(窓内外面), 窓台貼付	55と同一 か、11世 紀		
78	土師器	無台脚 12C 2	SE 210 8			54	灰黄褐			白・海綿骨 針・雲		ロクロナデ、回転角切 り		54と同一 か、11世 紀		
79	土師器	小盤	12C 2	SE 210	底部	213				白・石 (きめ 細かい)		ヨコミナデ+ヨコミガ キ、内面・黑色處理	内外面:タ ル状付着 物付着多量	付着物多量		
80	土師器	皿 11C			頬垂	95	26	44	に bei 黄 裡		白・石 (きめ 細かい)	ロクロナデ、回転角切 り	ロクロナデ、回転角切 り			
81	土師器	皿 14C 13	SE 911	中部	78	19	49	灰黄	灰黄	白・雲・チャ						
82	土師器	皿 11B 4		IV	84	19	47	橙	橙	白・長・雲	ロクロナデ、回転角切 り					
83	土師器	皿 11B 13	P 329 1	81	15	53	橙	橙	石・雲・チャ	ロクロナデ、回転角切 り	内面:スヌ ヌ黒斑					
84	土師器	皿 14B 16	SE 1035 5			54	に bei 黄 裡			白・石 (きめ 細かい)	ロクロナデ、回転角切 り	口縁部:打 欠				
85	土師器	皿 16B 21	SK 193 3					(40)	橙	に bei 黄	白・赤鉛子	ロクロナデ、回転角切 り、柱状高台				
86	土師器	無台脚 20A 23	SE 24	19	底部			76	灰黄	灰黄	石・白	ロクロナデ、回転角切 り	ロ縁部:打 欠			
87	白磁	碗 20B 20C	SK 21	2					灰白	灰白						
88	青白磁	皿 8A 24	SE 503 1		96	20	42	明青灰	明青灰			ロクロナデ、口縁扁反 り、回転角切り、波状 口縁、内外面施釉 (底部 外側隠)				
89	白磁	皿 14B 23	P 1045		154			灰白	灰白			内外面施釉、口縁:玉 縁状	被熱?			
90	珠渦焼	皿 14C 2・ 3	SE 123 1	(280)				灰	灰	石・白	ロクロナデ		内外面:ズ ヌ黒斑	焼成:瀬元 焼窯		
91	珠渦焼	皿 14C 2・ 3	SE 123	下部	(228)			灰	灰	白・黒	ロクロナデ			焼成:瀬元 焼窯		
92	白磁	皿 14C 2・ 3	SE 123	中部			60	灰白	灰白			内外面施釉、高台點跡		劃花文		
93	珠渦焼	盤 14C 2・ 3	SE 123	下部	426			灰	灰	白・石	1.縁部内外面:ヨコナ タ、体部内面:平ナタ タキ、体部内面:黒文 タキ、	内外面:書 記による記号				
94	吉磁	碗 13B 25	SK 118 1	168				オリーブ	オリーブ 灰			内外面施釉、口縁:扇 反り		劃花文		
95	珠渦焼	盤 肉其 他	20A 22	SE 22	3・4			78	灰	灰	白・石	ロクロナデ、回転角切 り、木目紋(注瓶)、体部 内面波状文	内面:スヌ ヌ黒斑	焼成:瀬元 焼窯		
96	土解器	皿 12A 22・ 23	SE 208 1		82	29	40	に bei 黄 裡	に bei 黄 裡	長・石・チャ	ロクロナデ、回転角切 り、柱状高台を意識		内面:スヌ ヌ黒斑			
97	珠渦焼	造 12A 23	SE 208	8			78	灰	灰	白・石	ロクロナデ、静止角切 り、木目紋(注瓶)		焼成:瀬元 焼窯			
98	珠渦焼	甕か壺 14B 18・ 23	SE 115 7					灰	灰	石・白	外縁:平行タタキ(底), 内面:無タタキ		焼成:瀬元 焼窯			
99	珠渦焼	甕 14B 18・ 23	SE 115 7	416				灰	灰	石・白	ロクロナデ		焼成:瀬元 焼窯			
100	珠渦焼	甕 20A 24	SE 19	底部	262			灰	灰	白・石・黒	ロクロナデ		焼成:瀬元 焼窯			
101	土解器	有台脚 20A 24	SE 19	底部			78	に bei 黄 裡	に bei 黄 裡	白・石 (きめ 細かい)	ロクロナデ、回転角切 り、高台取付		焼成:瀬元 焼窯			
102	珠渦焼	甕 15C 2	SE 141 1	307				灰	灰	白・石	ロクロナデ		焼成:瀬元 焼窯			
103	珠渦焼	甕 13B 18・ 23	SK 217 1	308				灰	灰	石	ロクロナデ、内面:縫 合作出		焼成:瀬元 焼窯			
104	土解器	甕 9B 21	SE 504	2	72				穢灰	穢灰	石・白	手づくね				
105	土解器	甕 9B 21	SE 504 3	90	16	70	穢灰	穢灰	石・白	手づくね		内外面:ス ヌ黒斑				
106	土解器	甕 9B 21	SE 504	2	(100)	19	(74)	灰黄	灰黄	石・白	手づくね					
107	吉磁	碗 9B 21	SE 504	3	168			オリーブ	オリーブ 灰			内外面施釉、口縁扁反 り		劃花文		
108	珠渦焼	造 9B 21	SE 504	3			96	灰	灰白	白・石	ロクロナデ、静止角切 り、木目紋(注瓶)		焼成:瀬元 焼窯			
109	珠渦焼	造 9B 21	SE 504	2			114	灰白	灰	長・白・雲	ロクロナデ、砂底		焼成:瀬元 焼窯			
110	土解器	甕 15C 1	SE 138 1	(140)				浅黃褐	浅黃褐	石・チャ	手づくね					
111	吉磁	碗 15C 1	SE 138 4					オリーブ	オリーブ 灰			内外面施釉		劃花文		
112	吉磁	碗 15C 1	SE 138 1					オリーブ	オリーブ 灰			内外面施釉		劃花文		
113	土解器	甕 15C 7・ 12	SK 122 1	80	15	41	淡黃	淡黃	胎質	白・雲 (きめ 細かい)	手づくね					

観察表

番号	種別	器形	大グリッド	小グリッド	通風網	通風網番号	肩位	口径 (mm)	底径 (mm)	色調 (外面)	色調 (内面)	胎土	製作痕跡	消費痕跡	備考
114 吉縄	瓶	15C 7-12	SK 122	2		(173)				オリーブ	オリーブ	灰	ロクロナデ、内外面施 熱		
115 吉縄	瓶	15C 7-12	SK 122	2					46	オリーブ	オリーブ	灰	内面施熱、費付より 内面露胎		
116 土師器	瓶	15A 22	SK 1000	下部	13					黄灰	黒	白・石	手づくね (底部はケヌ リ?)	内面: タール伏付着物、 外面: スス	
117 土師器	瓶	15A 22	SK 1000	中部	84	14	50			褐灰	黄灰	白・石	手づくね		
118 土師器	瓶	10B 15	SE 221	1		(139)				にぶい黄 にぶい黄	石	白・石 赤色粒子	手づくね		
119 吉縄	瓶	10B 15	SE 221	12						明暦灰	明暦灰				焼成文
120 洋陶焼	瓶	10B 15	SE 221	1		(160)				灰	灰	白・纏	ロクロナデ	焼成: 蓠元 硬質	
121 土師器	瓶	16B 21	SE 194	3	132	36	85	灰黄褐	にぶい黄 にぶい黄	白・石・雲	手づくね				
122 吉縄	瓶	16B 21	SE 194	1	174					オリーブ	オリーブ	灰	ロクロナデ、内外面施 熱		
123 七輪器	瓶	10C 8	SE 239	1	81	16	36	灰白	灰白	石・チケ			手づくね		
124 洋陶焼	壺T種	10C 8	SE 239	1				灰	灰	白・石		外側: 平行タタキ、内 側: 無文タタキ	焼成: 蓠元 硬質		
125 土師器	瓶	14B 13	SE 114	下部	134	30	76	灰白	灰白	白・石	手づくね		内面: スス		
126 土師器	瓶	15B 13	SE 196	下部	100	28	63	にぶい橙 にぶい橙	白・石・チケ		手づくね				
127 土師器	瓶	10B 23	SE 258	1	(90)	18	(68)	灰白	灰白	石・白	手づくね				
128 土師器	瓶	10B 11-16	SE 238	4	80	16	42	灰黄褐	黑褐	白・石	手づくね、底部ケズリ				
129 洋陶焼	透呂格	12B 21		IV	47			明暦灰	明暦灰	白・石	ロクロナデ				焼成: 無化 硬質
130 洋陶焼	透呂格	13B 21	SE 216	11				灰	灰	白・石	ロクロナデ、外面: 流 紋文				焼成: 蓠元 硬質
131 洋陶焼	透T種	11A 23	SK 218	1				灰	灰	石・白	体外表面: 平行タタ キ、体部内面: 無文当 て其				焼成: 蓠元 硬質
132 洋陶焼	透	16B 9	P 1019				110	灰	灰	陶輪骨針、 白・長					内面平滑、 焼成: 蓠元 底面化粧
133 洋陶焼	透	10C 5	SE 442	底部			100	灰白	灰	白・長・石 引	ロクロナデ、静止糸切 板熱				焼成: 無化 硬質
134 洋陶焼	透	12A 24	SE 213	1			93	灰	褐灰	白・石	ロクロナデ、静止糸切 板引				焼成: 蓠元 硬質
135 洋陶焼	透	14B 24	SE 137	4	(258)			灰	灰黄	白・石	ロクロナデ、内面単口 1単位9条				焼成: 蓠元 硬質
136 洋陶焼	透	12A 24	SE 213	1	(258)			灰白	灰白	石・白	ロクロナデ				焼成: 蓠元 軟質
137 洋陶焼	透	16B 2	P 1018				125	灰	灰	長・石	ロクロナデ、静止糸切 板引、加目波状文				焼成: 蓠元 硬質
138 洋陶焼	透R格	11C 10		暗栗				灰	白・纏		ロクロナデ、印花文細 印				焼成: 蓠元 硬質
139 吉縄	瓶	10B 20	P 462	1	(162)					オリーブ	オリーブ	灰	内面施熱		劃花文
140 吉縄	瓶	10B 16	SE 252	3	150					オリーブ	オリーブ	黄	内面施熱		片切削の縫 縫合文
141 白吉縄	釉瓶	10C 6-7	SE 243	1	20			明暦灰	明暦灰				上部内面施熱		
142 吉縄	瓶	11C 6-11	SE 211	3						オリーブ	オリーブ	灰	内外面施熱		劃花文
143 吉縄	瓶?	11C 6-11	SE 211	4			92	黄褐	黄褐						
144 洋陶焼	瓶	10B 22-23	SE 234	6		318	152	110	灰	白・石	ロクロナデ、静止糸切 板引1木目状直瓶、内面 単口18条			内面平滑、 焼成: 蓠元 硬質	
145 洋陶焼	焼か透	10C 5	SE 223	3				152	褐灰	褐灰	白・石	外沿: ロクロナデ-平 行タタキ、内面: ロク ロダ-無文タタキ。 底部: 砂			内面平滑、 焼成: 蓠元 硬質
146 土師器	瓶	9A 24	P 723		69	19	56	灰白	灰白	チャ・石	ロクロナデ、回転糸切引				
147 土師器	瓶	10B 24	P 259	上部	77	16	56	明暦灰	明暦灰	(きめ細か い)	ロクロナデ、回転糸切 引、内面施熱				内面: 口縁 部分: スス
148 土器・美濃焼	天日茶碗	9C 9	SE 510	1					36	灰白	黒	丸部: 回転糸切引 天目: ナフ、内面施熱			内面平滑
149 洋陶焼	瓶	9C 9	SE 510	5	234	91	97	灰白	灰白	陶輪骨針・縫 縫	ロクロナデ、静止糸切 引、内面単口1単位10 条				内面平滑 焼成: 蓠元 硬質
150 洋陶焼	壺T種	9C 10	SE 511	不明				灰	灰	白・石	外沿: 平行タタキ (縫 引)、内面: 無文タタ キ+ココナデ				内面平滑 焼成: 蓠元 硬質 (無化 氣味)、薄 手

## 石製品・鉄製品観察表

報告番号	分類	石材	大グリッド	小グリッド	邊縫隙別	邊縫番号	肩位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	備考
151	石製品・四石状石製品	安山岩	13B	20 - 25	SK	118	2	165	126	92	1798.6	
152	石製品・四石状石製品	安山岩	14B	18 - 23	SE	115	7	149	115	62	1191.8	
153	石製品・四石状石製品	安山岩	14B	18 - 23	SE	115	7	76	75	69	545.8	被熱
154	石製品・砾石	凝灰岩	10B	15	SE	221	上	101	58	20	144.3	被熱、伊予産？
155	石製品・砾石	凝灰岩	15A	21	SE	1040	6	47	26	15	20.5	被熱
156	石製品・砾石	凝灰岩	10B	25	SE	222	2	70	35	30	98.8	
157	石製品・砾石	砂岩	12C	18	SX	204	3	96	45	35	176.2	被熱
158	石製品・砾	滑石	15B	16	SK	160	2	57	37	22	92.6	被熱、滑石からの利用
159	鉄製品・馬具		10C	4	P	467	上	82	—	—	103.2	部分
160	鉄製品・鍵		10C	4	P	468	上	77	38	8	41.6	
161	鉄製品・錠？		12B	15	SD	201	3	30	18	10	7.7	
162	鉄製品・釘		10B	24	SE	224	1	49	7	5	5.7	
163	鉄製品・釘		9B	21	P	528		56	9	6	5.7	
164	鉄製品・釘		10C	5	SE	223	1	40	7	5	8.3	
165	鉄洋	楕円洋	10C	5	SE	223	1 - 2	63	38	28	98.9	△タル度
166	鉄質・無車輪		10C	5	SE	223	1	24	—	1	1.8	直書・真面無文
167	鉄質・天端通貫		20C	15			IV	25	—	1	1.9	直書
168	鉄質・不明		15B	15	P	1020	1	25	—	5	12.8	4枚付着
169	鉄質・天元通貫		15B	15	P	1020	1	25	—	1	3.3	直書・真面無文
170	鉄質・空宋通貫		15B	15	P	1020	1	25	—	1.8	3.2	直書
171	鉄質・開元通貫		15B	15	P	1020	1	22	—	1.1	2.6	直書・真面無文
172	鉄質・開元通貫		15B	15	P	1020	1	24	—	1.2	2.1	直書・真面無文
173	鉄質・天元通貫		16B	15	P	1020	1	25	—	1	3.6	直書・真面無文
174	鉄質・通奈通貫		15B	15	P	1020	1	22	—	1	2.4	直書・真面

## 木製品観察表

報告番号	分析	種別	器物	樹種	木版り	大グリッド	小グリッド	邊縫隙別	邊縫番号	肩位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	製作痕跡等	備考
175	69	木製品・有頭状	スギ	芯外し	22C	SK	23	8	150	16	14	ケズリにより断面多角形に成る			
176	62	建築材	オニグルミ	板目	22C	SK	23	8	233	115	58	剥離出			
177	60	木製品・曲物・底板	スギ	板目	22C	SX	23	8	166	46	9	曲物底板に中央に穿孔			
178	61	木製品・挽物・木材	スギ	板目	22C	SX	23	8	135	140	27	粗面			
179	70	木製品・棒状	スギ	芯外し		SX	204	3	211	16	15	ケズリにより断面多角形に成る			
180	67	漆器・桶	ケヤキ	楢木取り	14C	2 - 3	SE	123	下部	78		内面黒漆塗布			
181	36	漆器・桶	ケヤキ	楢木取り	14B	16	SE	1035	底部	78	ロクロ洗き(留具机)→直面アリ→内外面:黒漆塗布	直面「×」字跡			
182	14	木製品・棚	イヌノキ	楢木取り	14B	16	SE	1035	7	28	53	6解離			
183	93	木製品・枕	ヤナガ属	芯持皮付き	14B	18 - 23	SE	115	7	120	40	40°の段の段角:浅角度			
184	94	木製品・断分割	カエデ属	芯持皮付き	14B	18 - 23	SE	115	7	218	88	74°の段の段角:急角度。重心的構成			
185	16	木製品・コモブチ	クリ	板目糊皮付き	12A	22 - 23	SE	208	6	55	151	31	後後に縱面分割→端部中央に割み作出		
186	75	木製品・枠状	スギ		14B	13	SE	114	中部	60	12	6ケズリにより先端を尖らせる。表面平坦部に溝を絞る	全面炭化		
187	97	木製品・枠	モクレン属	芯持	14B	24	SE	137	4	139	398	104	横面加工痕不規則、側面枝打ち		
188	3	木製品・桶	ケヤキ	楢木取り	15C	1	SE	138	7	126	74	53	ロクロ洗き→直面ケズリ・「×」字跡、ロクロ洗付留板		
189	26	鉄製品・鍔	ヤナガ属	芯通	15C	1	SE	138	底部	133	15	6木質部ケズリで断面多角形	鍔部断面:正面から、横断面:片面		
190	81	木製品・箱板	スギ		15C	1	SE	138	4	104	98	6表面ケズリ、縁辺に剥離	部分的に炭化		
191	83	木製品・平野物	クリ	平底?	15C	1	SE	138	4	104	67	30	表面白漆塗布		
192	24	木製品・机脚	クリ		15C	1	SE	138	7	113	12	12°の向かひの加工面構成			
193	51	木製品・杓子?	スギ	板目	15B	13	SE	196	下部	113	39	4解離:丸み作出			
194	71	木製品・箸?	スギ	削り出し	12B	21	SE	216	中形	178	7	3ケズリにより断面扁平に成形			
195	63	木製品・曲物・底板	スギ	板目	10B	15	SE	221	13	123	96	8面行近ケズリ	曲物底板→中央に穿孔・破損	表面:線状痕	
196	78	木製品・板	スギ	斜板	10B	15	SE	221	13	133	54	4表面ケズリ、直面と側面に削り			
197	22	木製品・浮子?	スギ	板目	10B	15	SE	221	13	199	22	10	両端に切り残し痕あり		
198	76	木製品・ベン先状	ビノキ	板目	10B	15	SE	221	12	117	20	3ケズリにより先端を尖らせる。他端には2ヶ所の穿孔			
199	119	木製品・柱状	スギ	芯外し	10B	15	SE	221	13	127	15	12°角	ケズリにより断面柱状に成形		
200	73	木製品・有孔板	ヒノキ	板目	10B	15	SE	221	13	67	30	5板材作成後に難く穿孔			
201	68	漆器・桶	ケヤキ	楢木取り	10C	8	SE	239	5	152	84	48内面黒漆塗布			
202	28	木製品・桶	イヌノキ	楢木取り	10B	11 - 16	SE	238	4	24	57	6解離	黒色腐蝕痕		
203	52	木製品・物物・側板	スギ	板目	12A	24	SE	213	8	212	28	11	内面ケビキ痕。木板による接合	炭化・破損	





# 図 版

## 凡 例

- 1 造構個別図においては、次のように分類してスクリーントーン・記号を貼付した。

■	地山ブロック	S : 石
▨	腐植物層	W : 木
▨▨	黒色シルト	
▨▨▨	炭化物層	
▨▨▨▨	柱根、柱痕	

- 2 造構個別図（セクション図・エレベーション図）において、掘立柱建物を構成するピットに●▲■の記号を付した。

- 3 造構分剖図において、掘立柱建物を構成するピットにトーンを添付した。

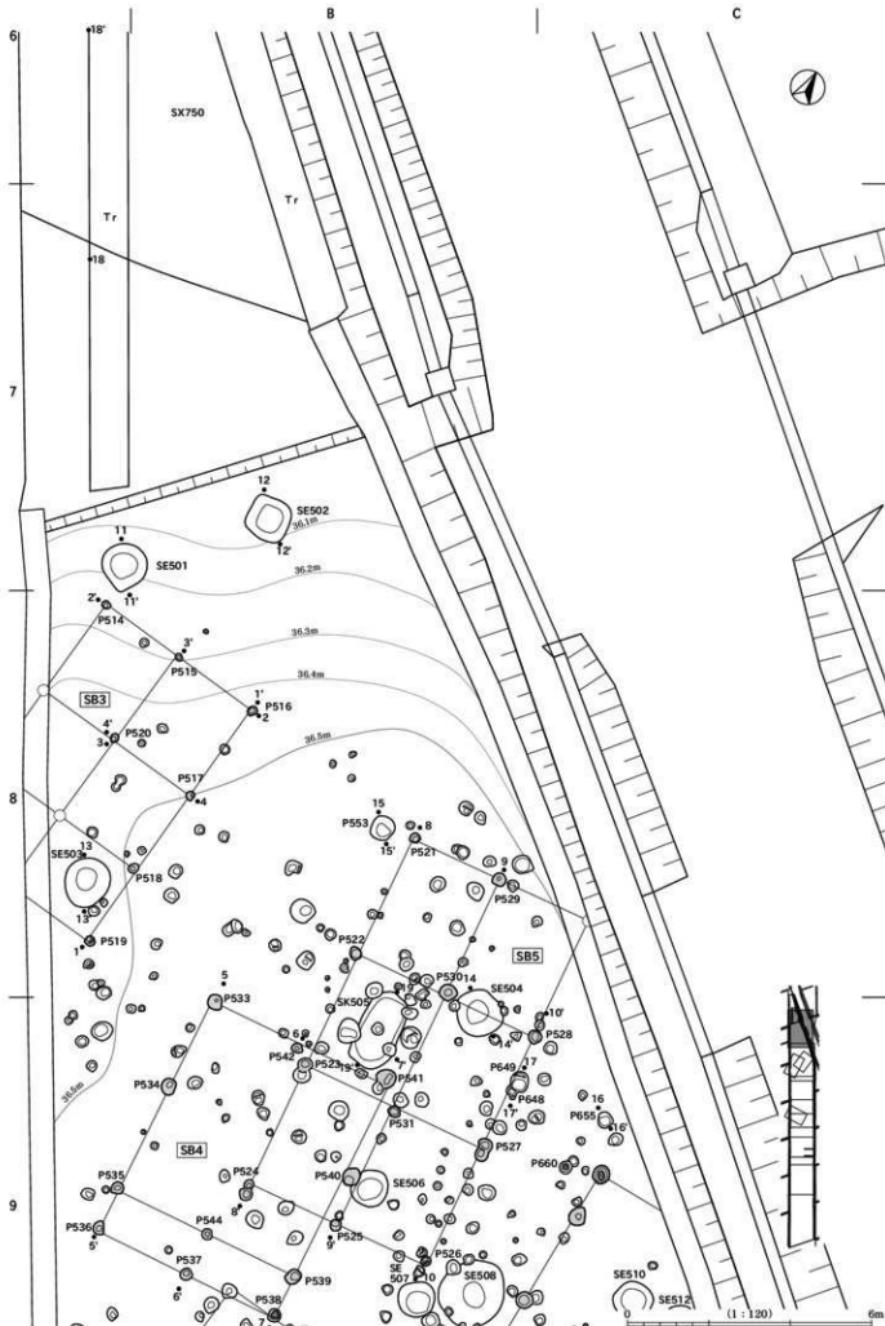
- 4 古代の土器は、須恵器を断面塗りつぶし、土器白抜きとした。

- 5 土器の口縁部実線を中心部両端で切っている場合、残存率が低いものから口径を復元したものである。

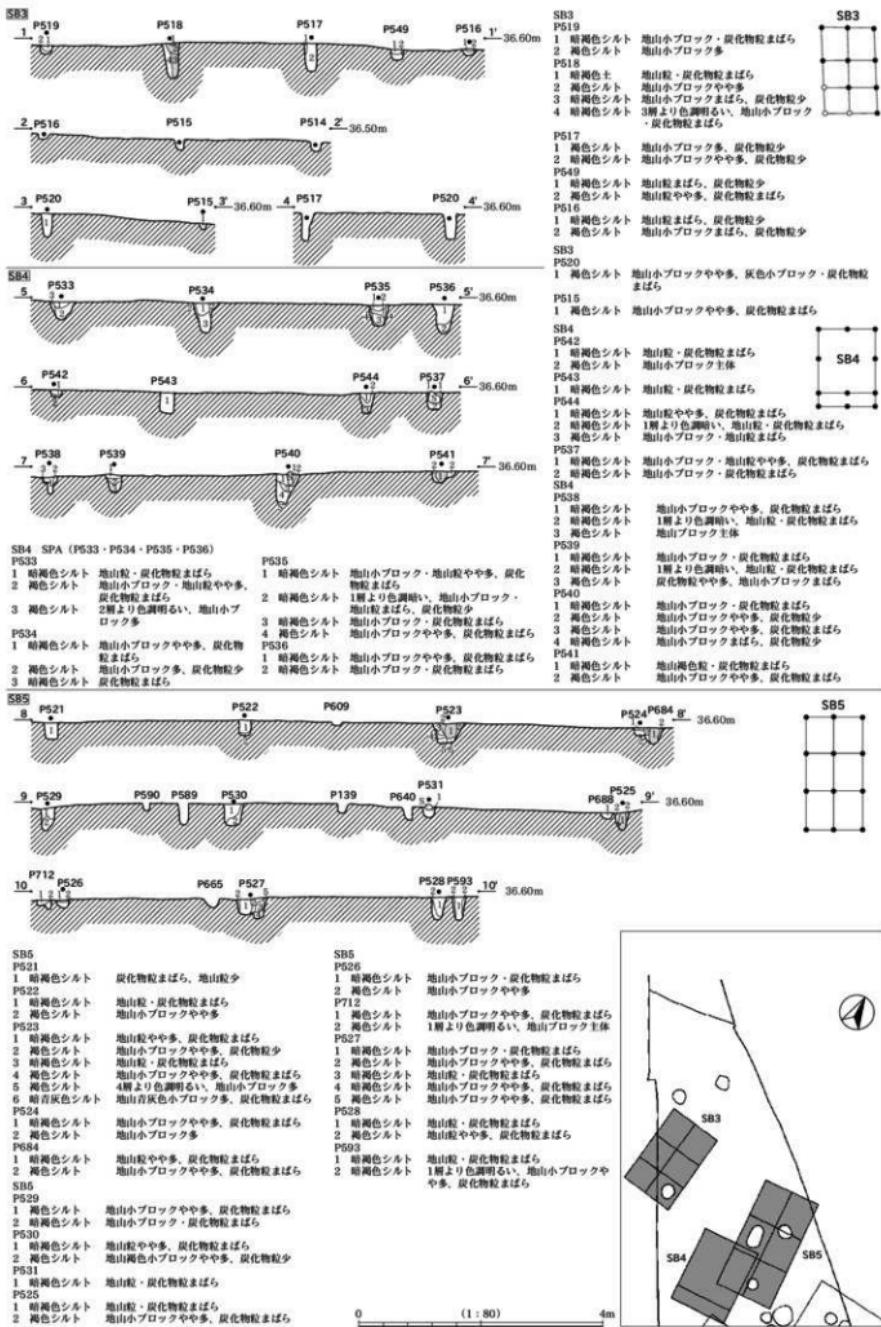
- 6 木製品の木目は、木取りを表示したものであり実際の年輪幅とは異なる。

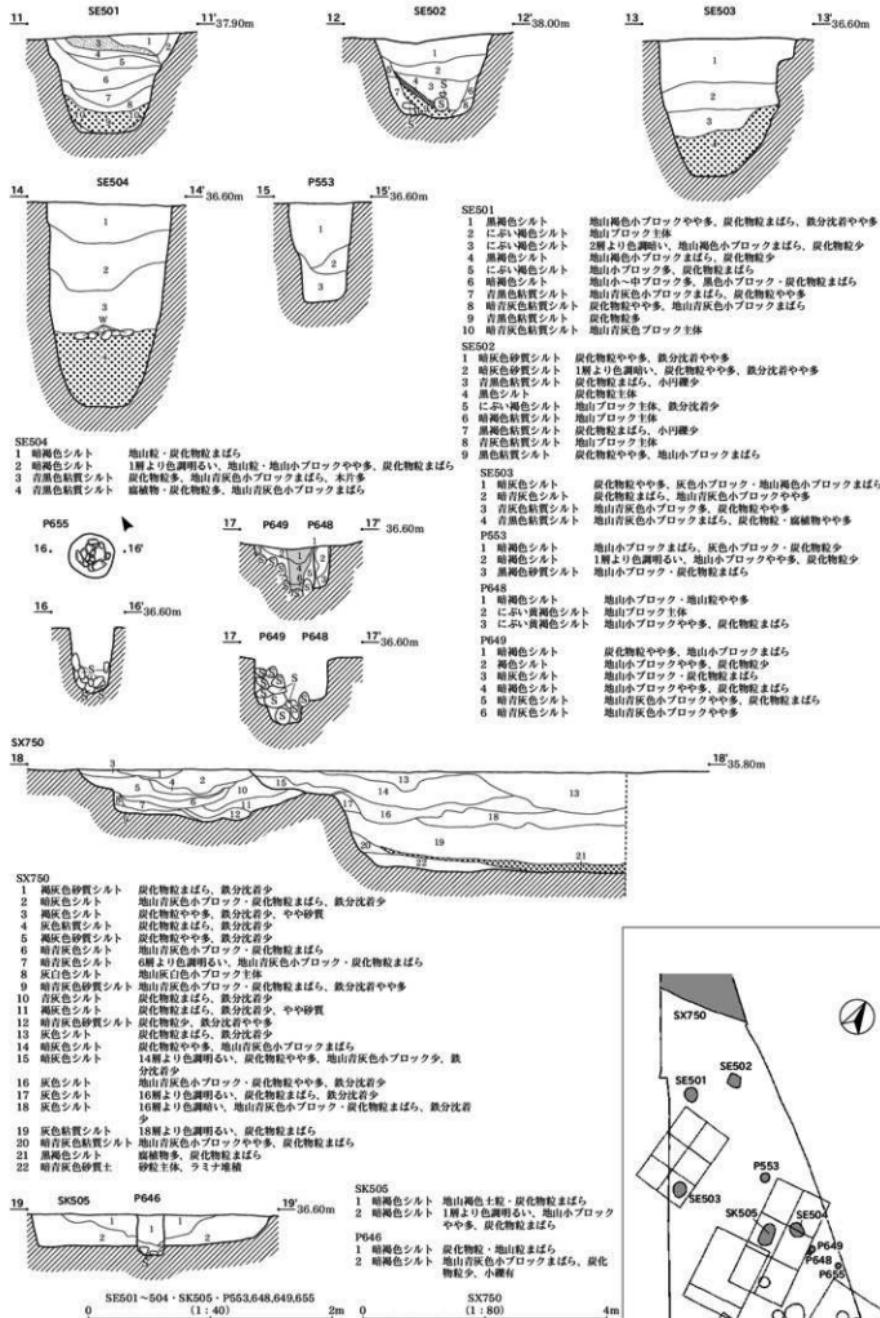
- 7 遺物写真図版の縮尺は、図面図版と同じである。



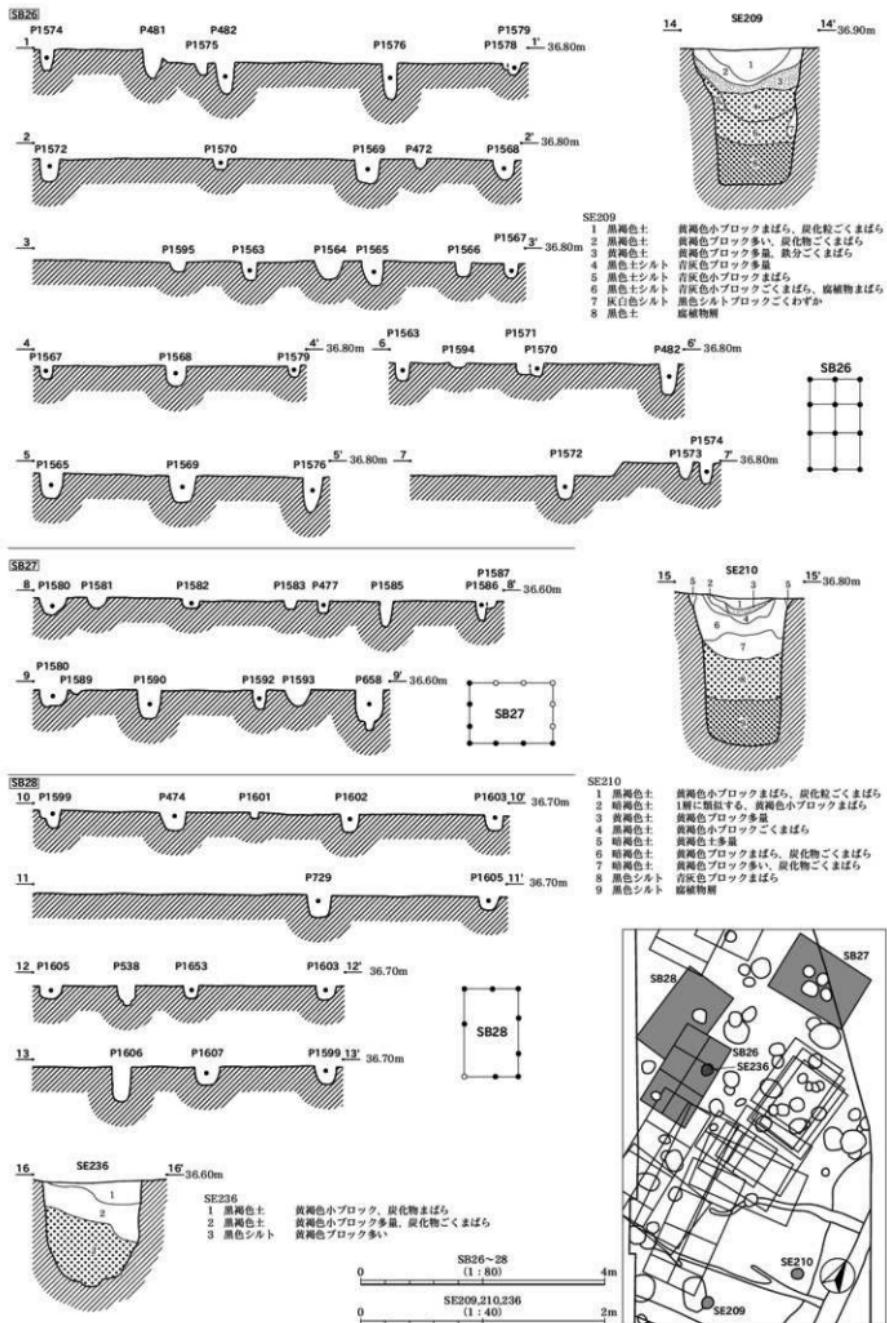


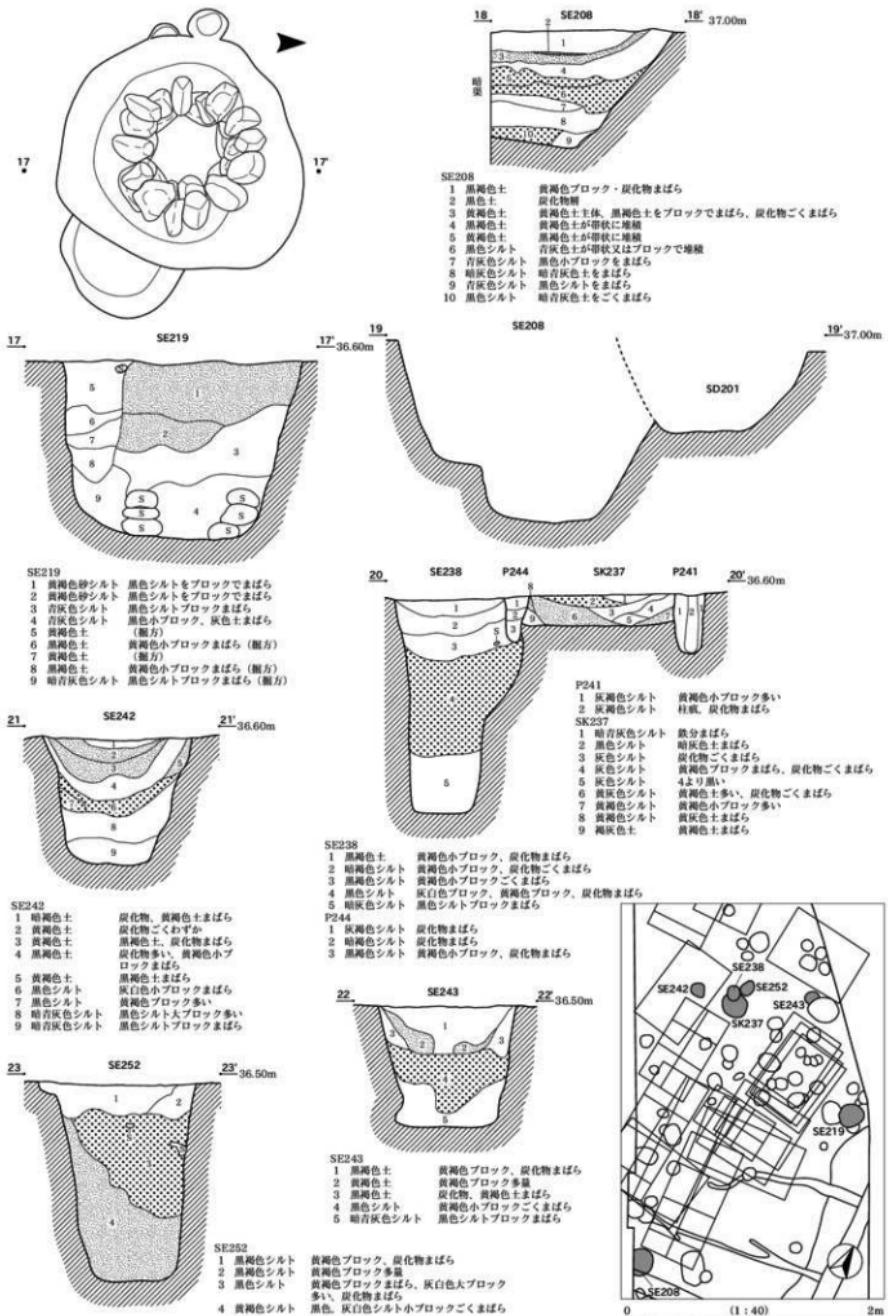
造構個別図(1) 分割図1 (SB3,SB4,SB5)

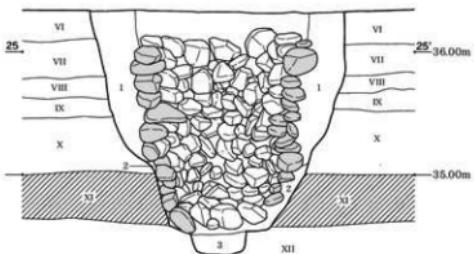
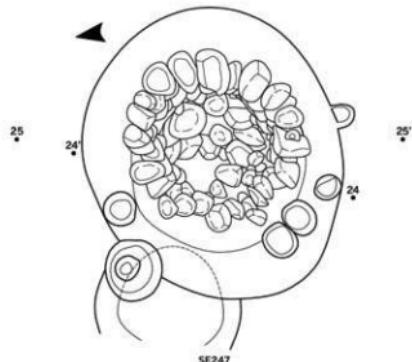








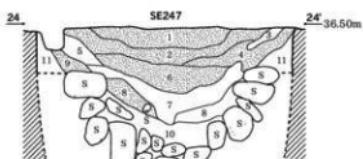
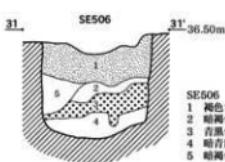
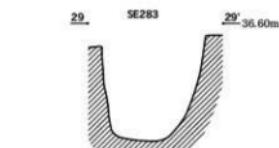
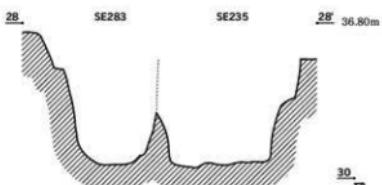




VI 黄褐色シルト  
VII 暗紅色灰砂質シルト  
VIII 明黄褐色砂質シルト  
IX 灰白シルト  
X 灰白色粘質シルト  
XI 灰色細砂  
XII 青灰色シルト

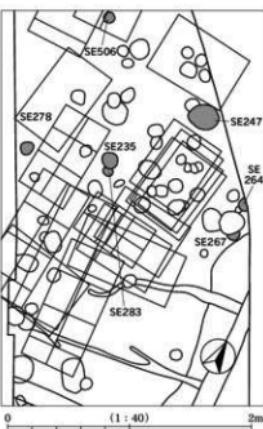
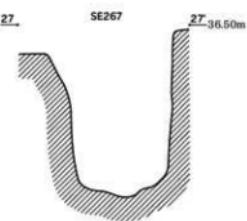
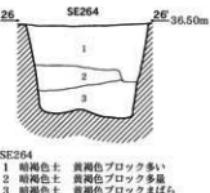
SE247  
1 黄褐色シルト  
2 オリーブ黒色シルト  
3 オリーブ黒色シルト

範囲: 單色ブロック・鉄分多い  
φ20~40mmの礫多量。底植物ごくまばら  
φ1~3cmの礫多量

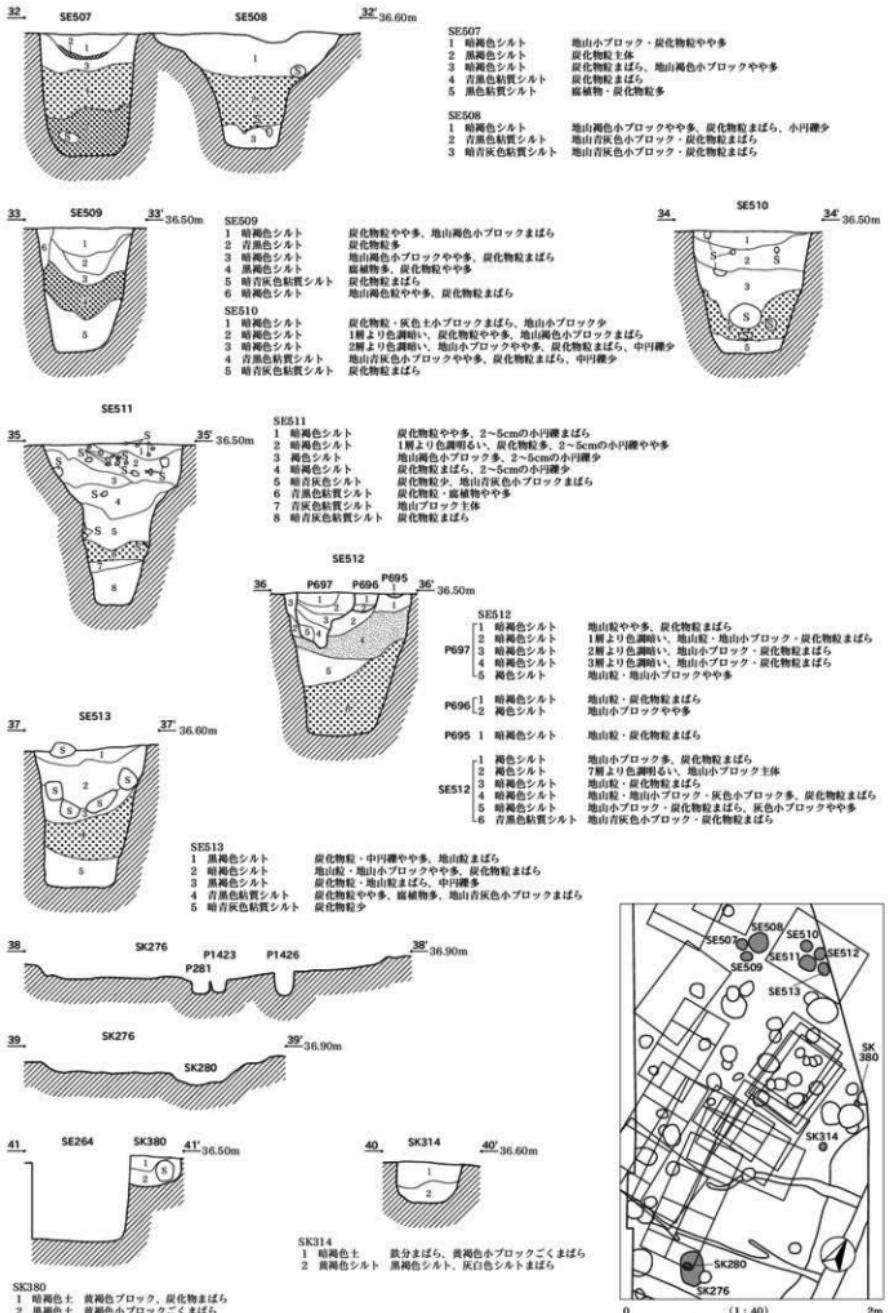


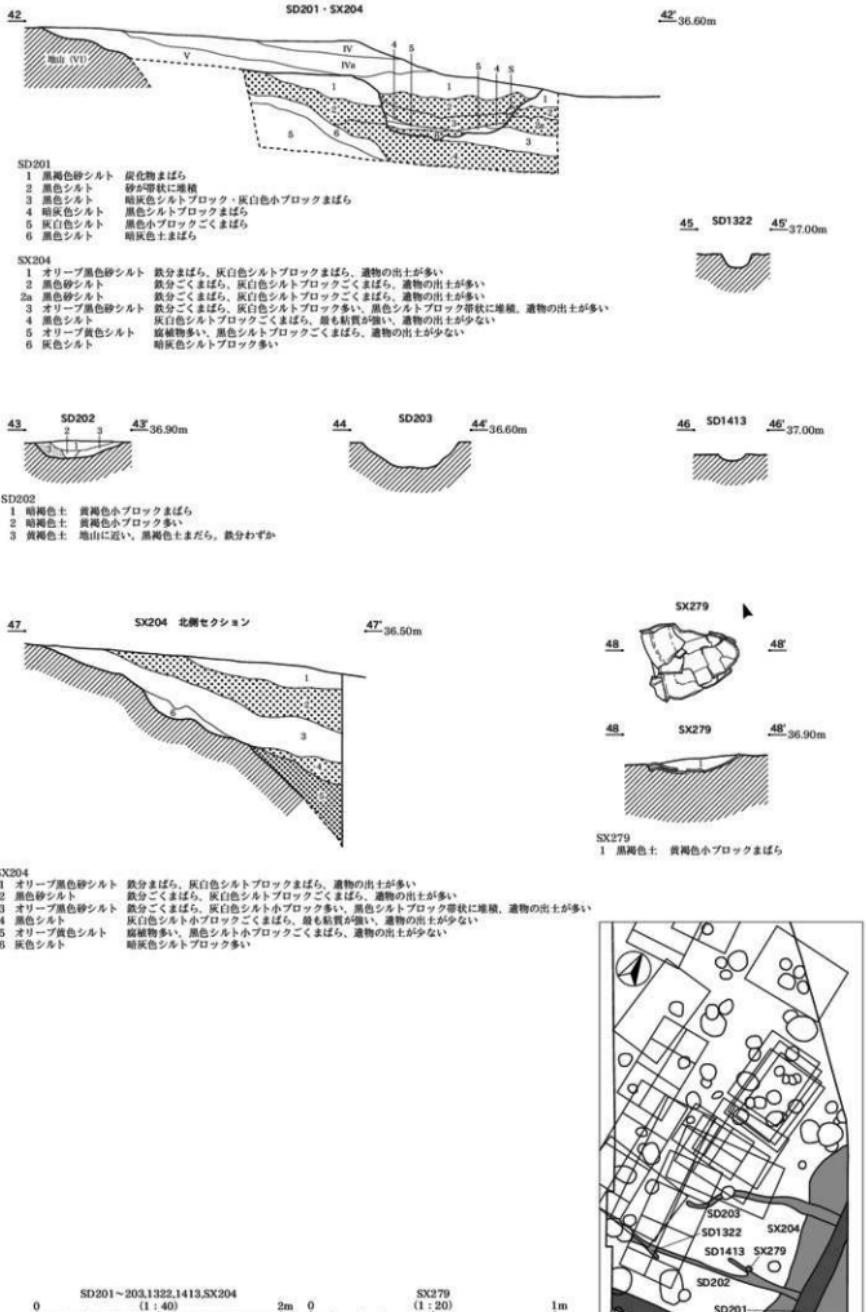
1 黄褐色土  
2 黄褐色土  
3 黄褐色土  
4 黄褐色土  
5 黄褐色土  
6 黄褐色土  
7 單灰色シルト  
8 黄褐色土  
9 黄褐色土  
10 暗灰色シルト  
11 黄褐色シルト

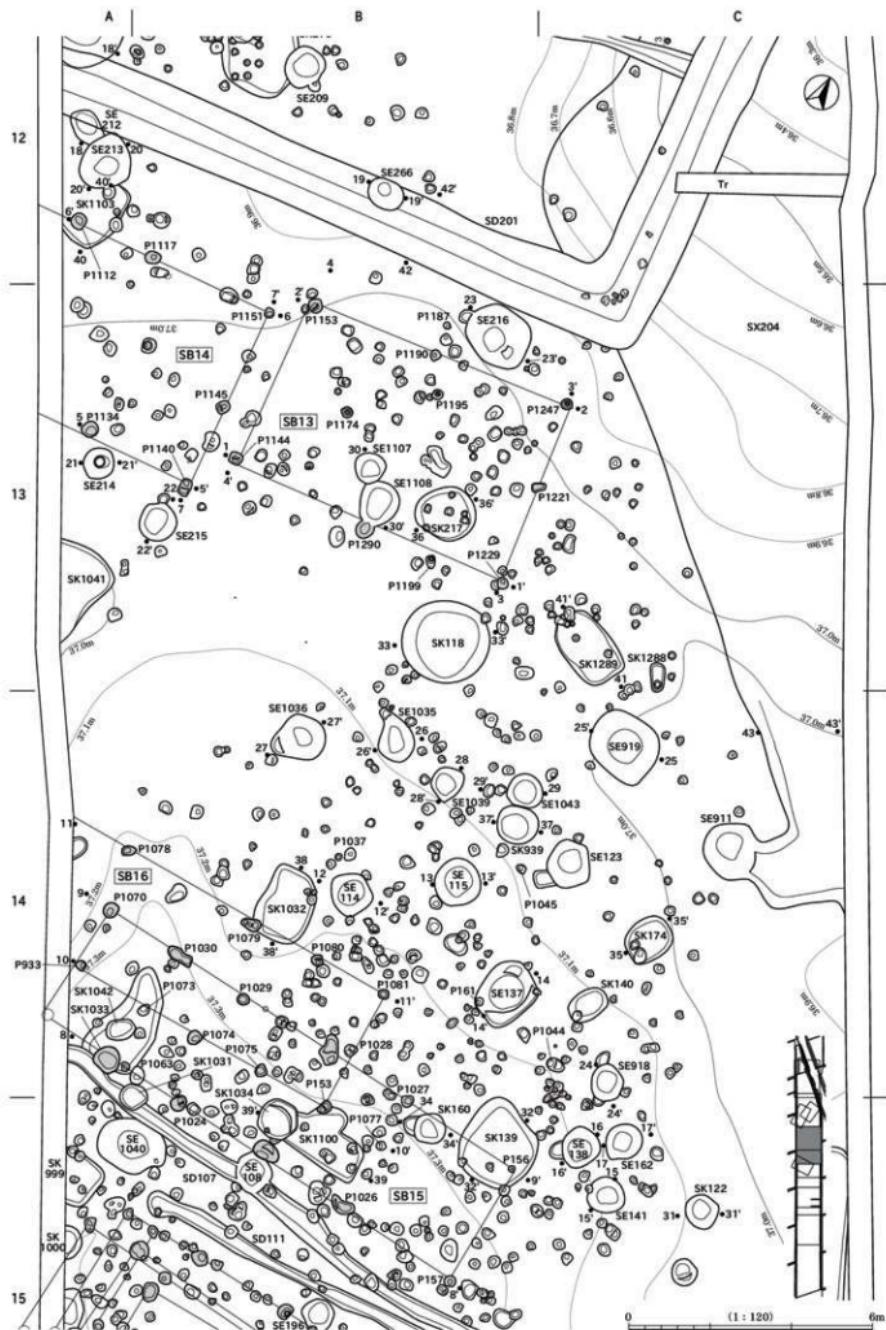
暗灰色ブロックまばら、鉄分まばら  
暗灰色ブロックくまばら、鉄分多い  
黄褐色ブロックまばら  
黄褐色ブロック、鉄分まばら  
黄褐色小ブロックまばら、鉄分まばら  
黄褐色ブロック多い、鉄分まばら  
黄褐色シルト  
暗灰色土まばら  
暗灰色土ごくまばら  
暗褐色シルト  
暗灰色シルトまばら  
場所、暗褐色ブロック、鉄分多い



造構個別図(6) 分割図2 (SE264,507~513・SK276,280,314,380)

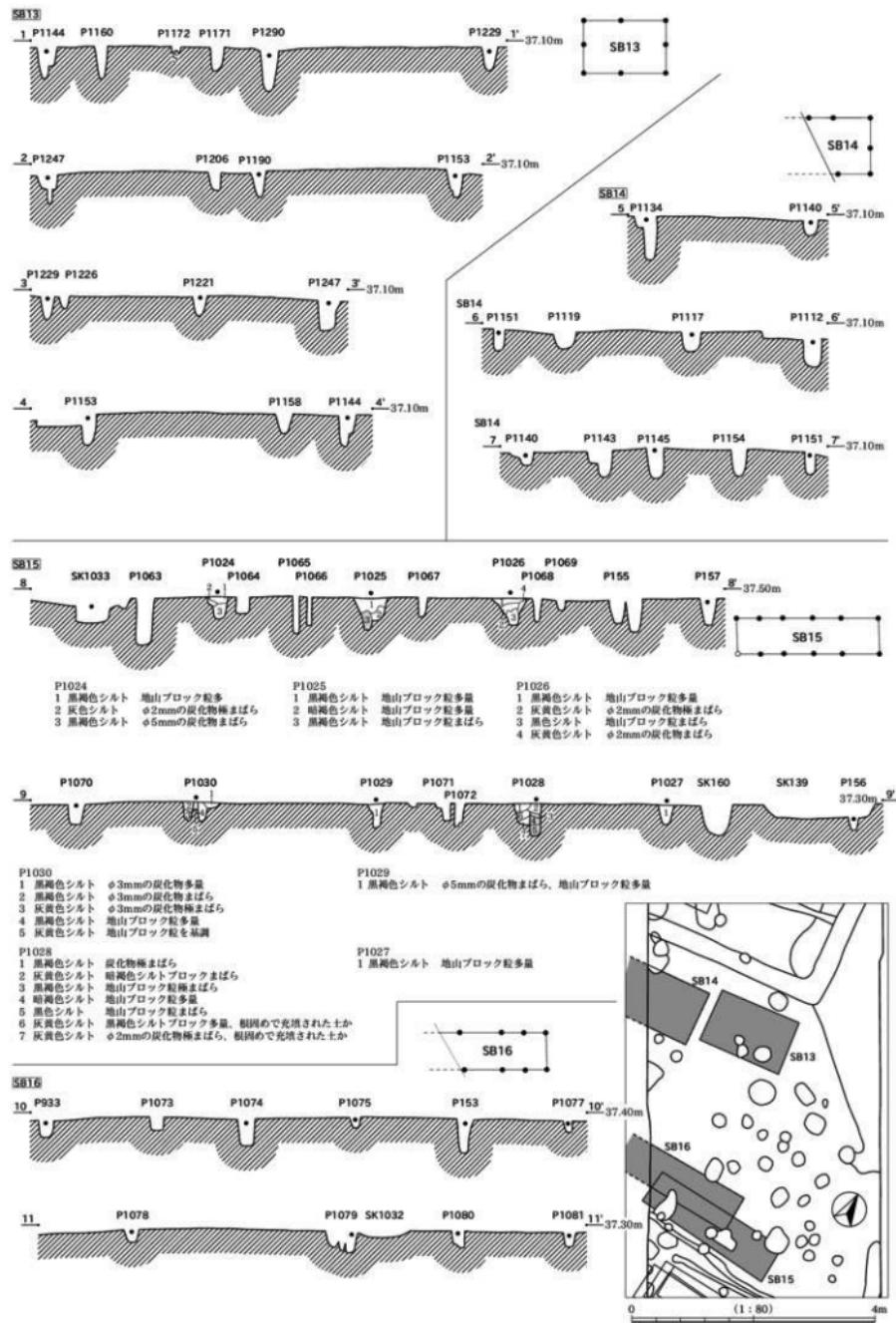


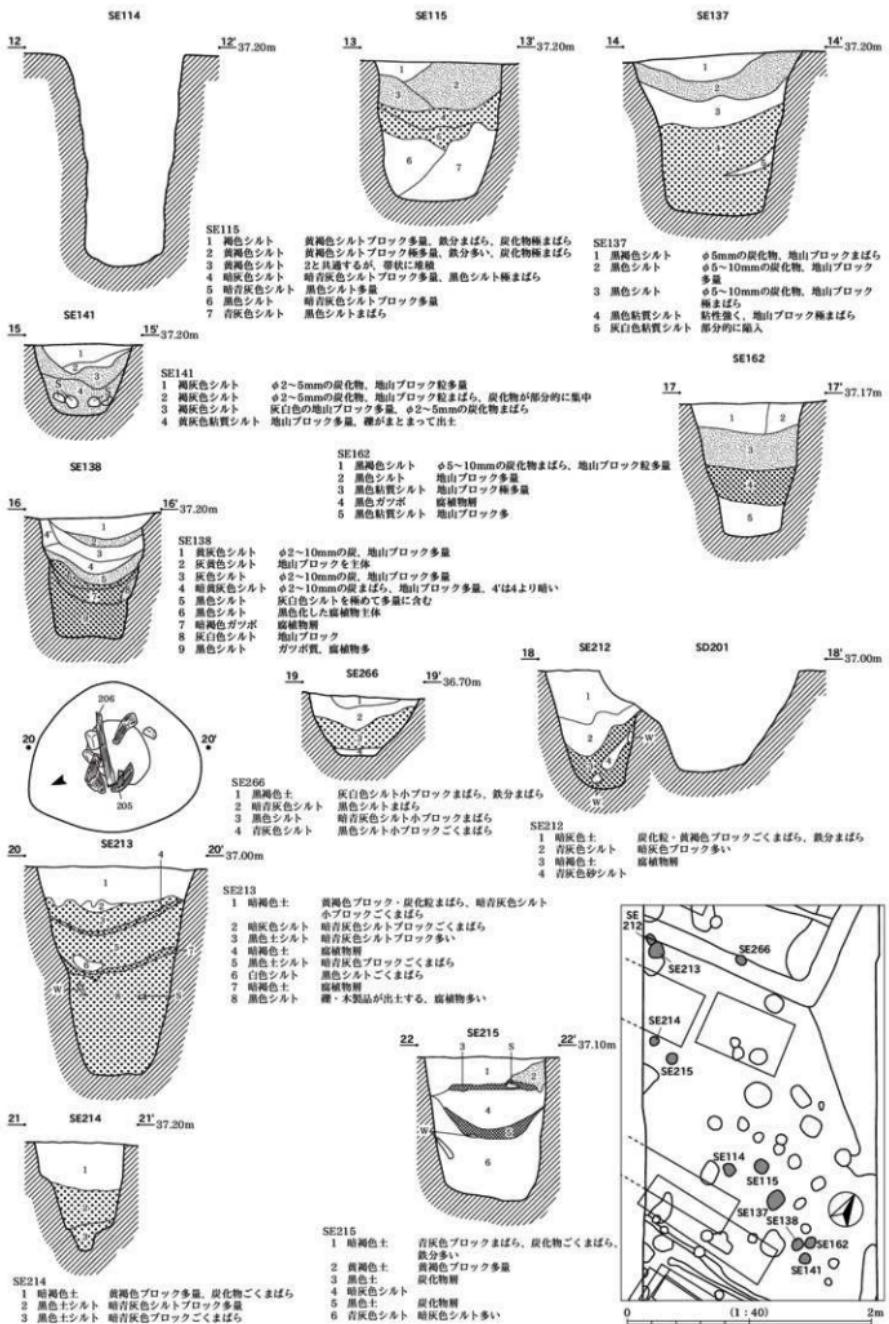




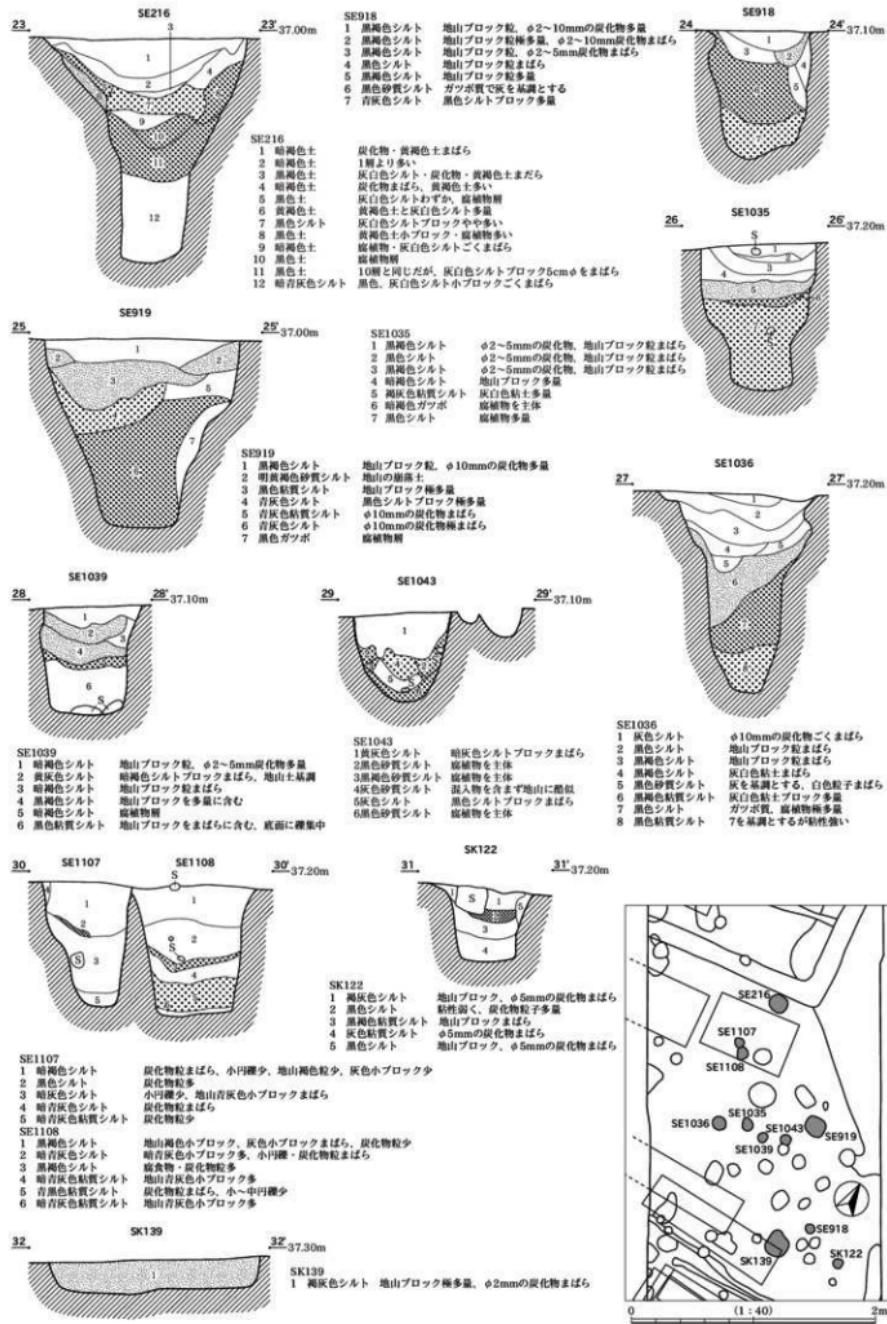
図版 12

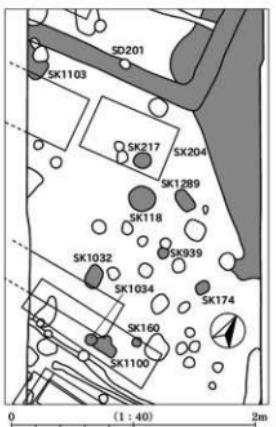
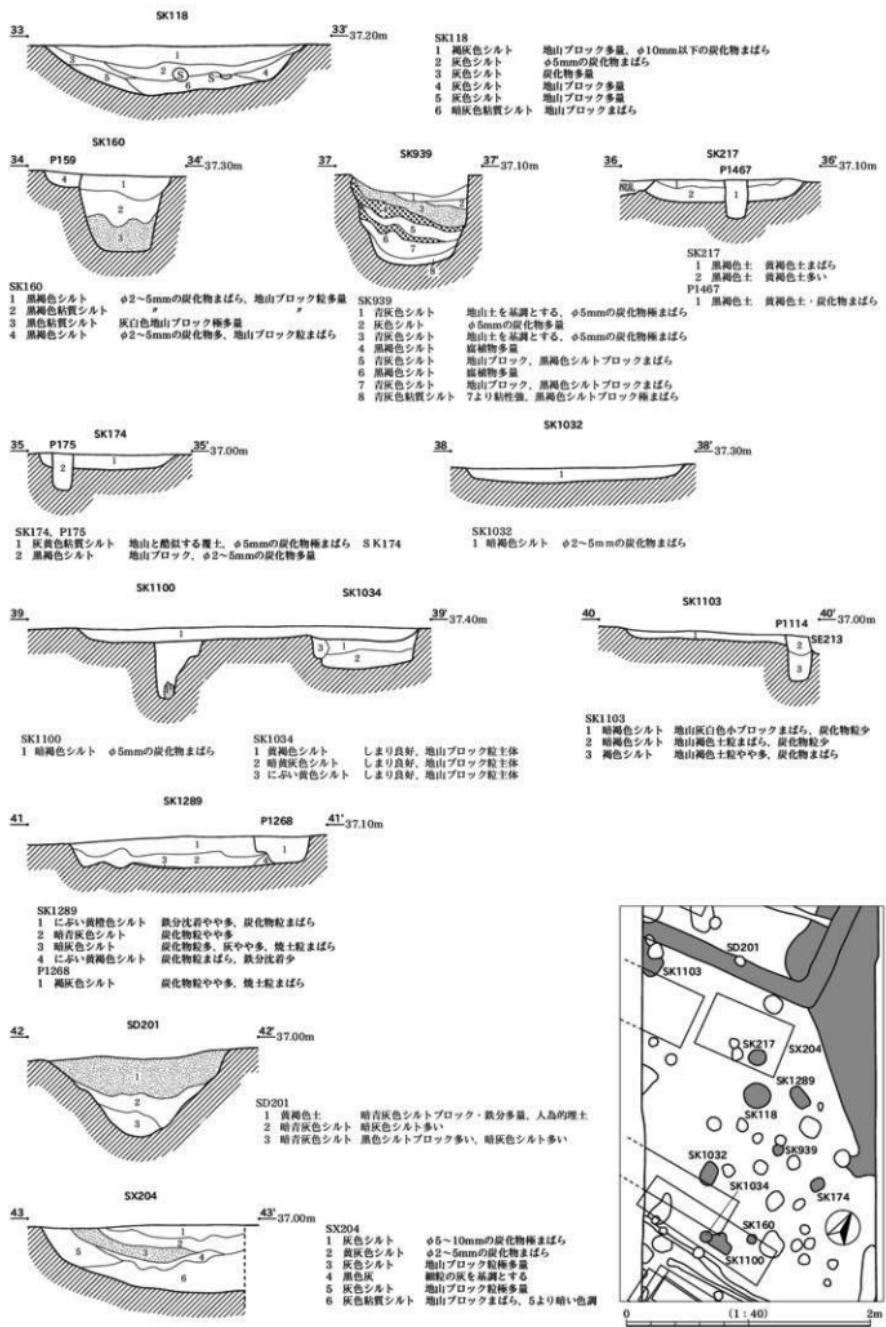
遺構個別図(8) 分割図3 (SB13,SB14,SB15,SB16)





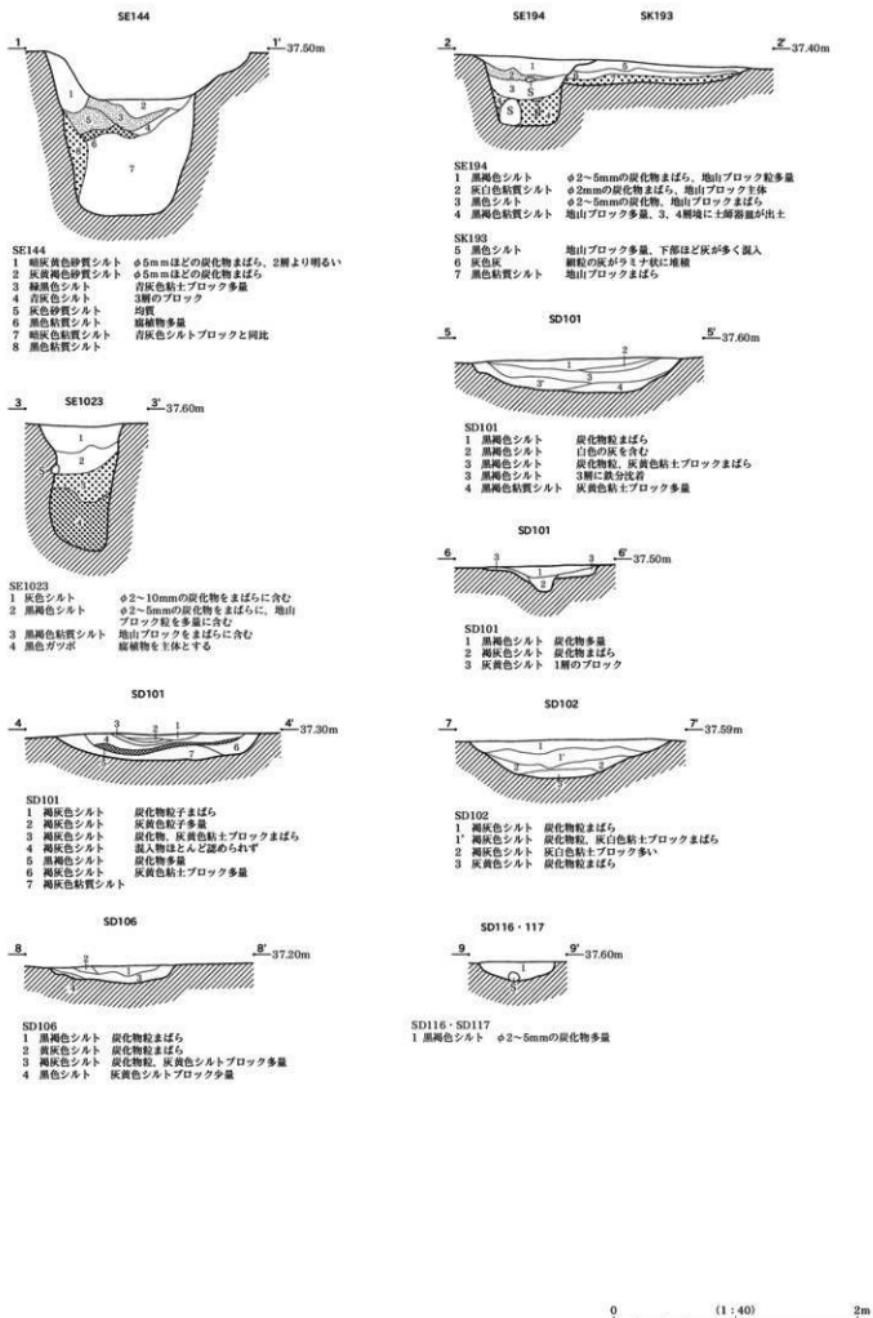
遺構個別図 (10) 分割図3 (SE216,918,919,1035,1036,1039,1043,1107,1108・SK122,139)

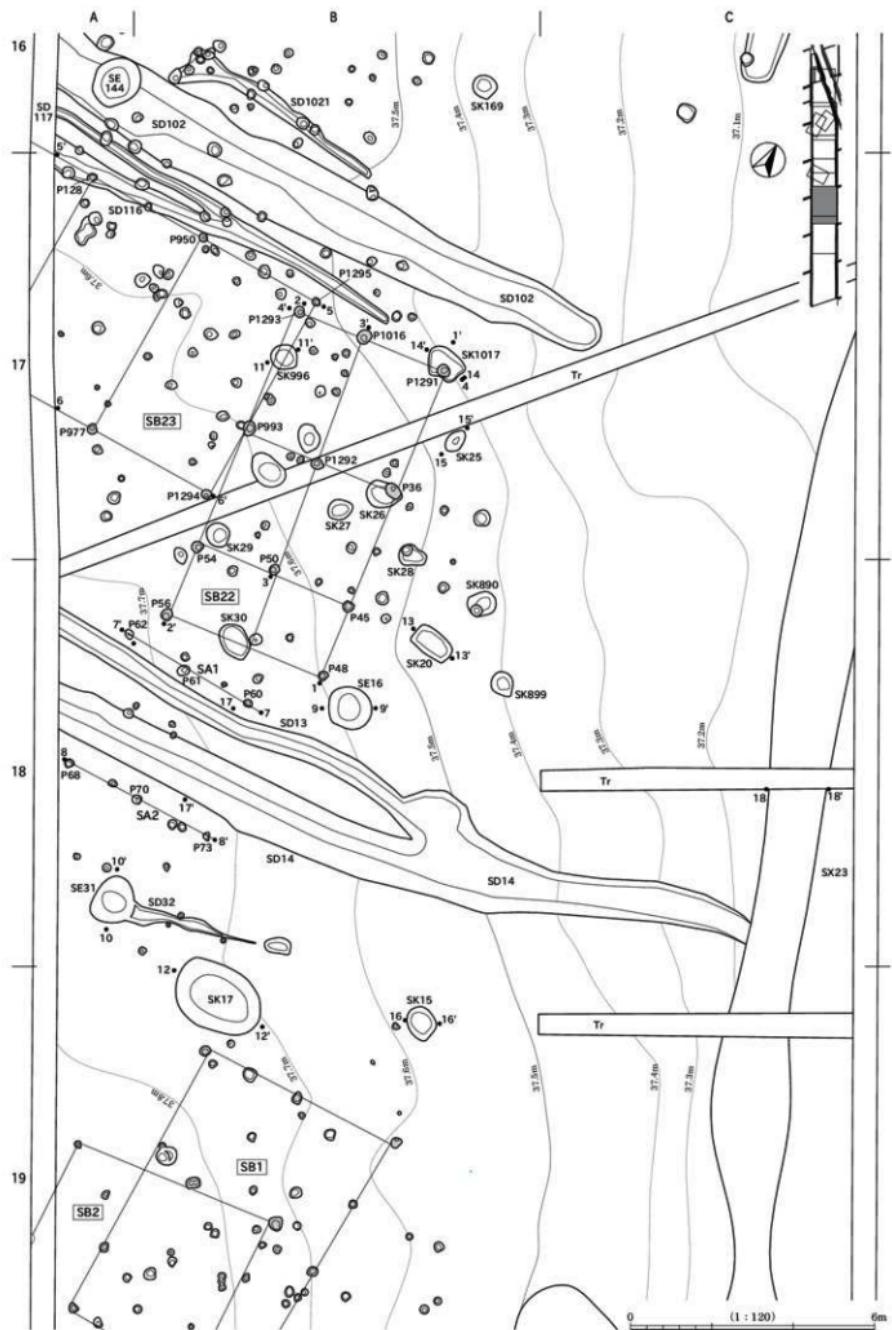




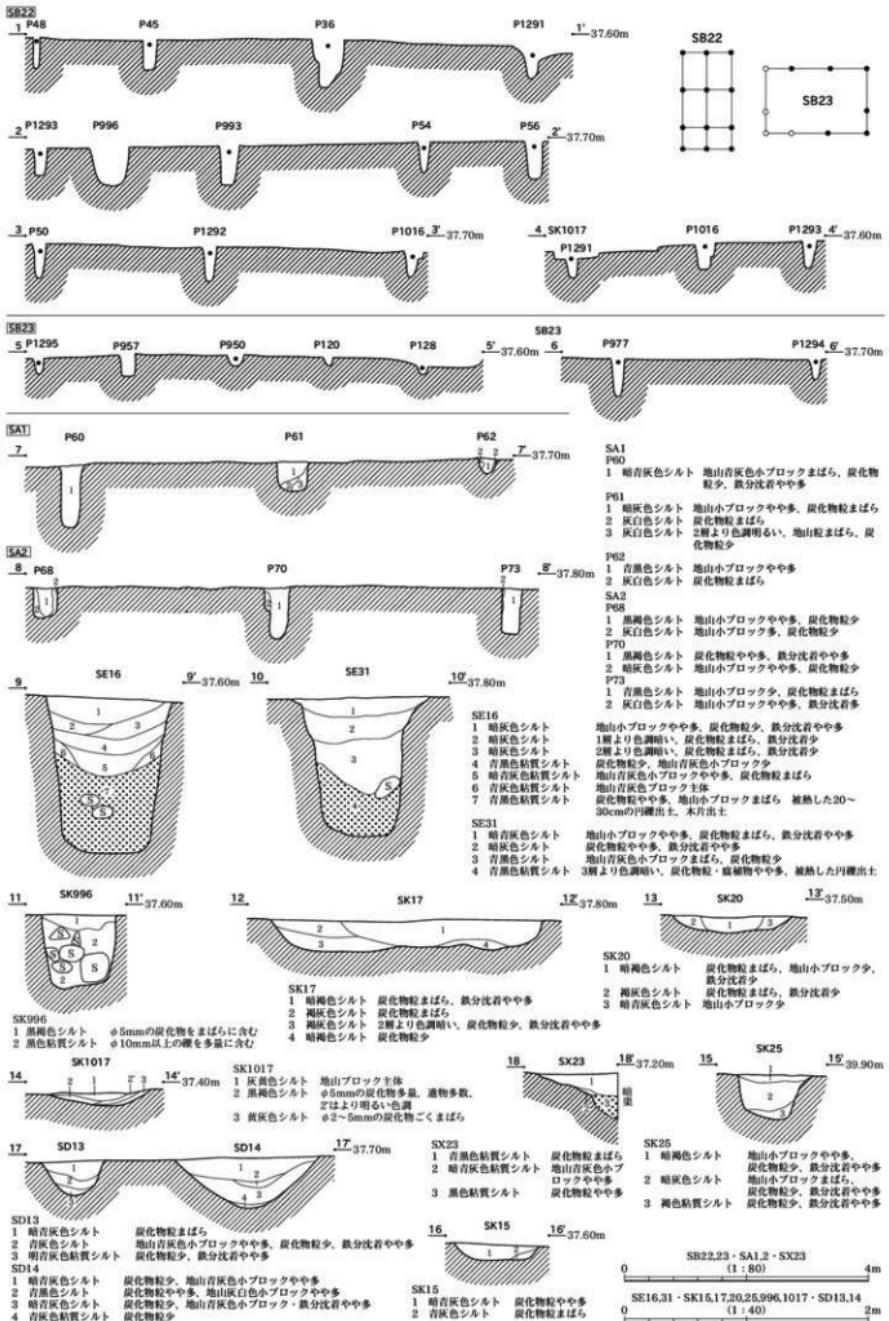


造構別図(12) 分割図4 (SE144,194,1023・SK193・SD101,102,106,116,117)





## 造構剖面図 (13) 分割図 5 (SB22, SB23・SA1, SA2・SE16, 31・SK15, 17, 20, 25, 996, 1017・SD13, 14・SX23)



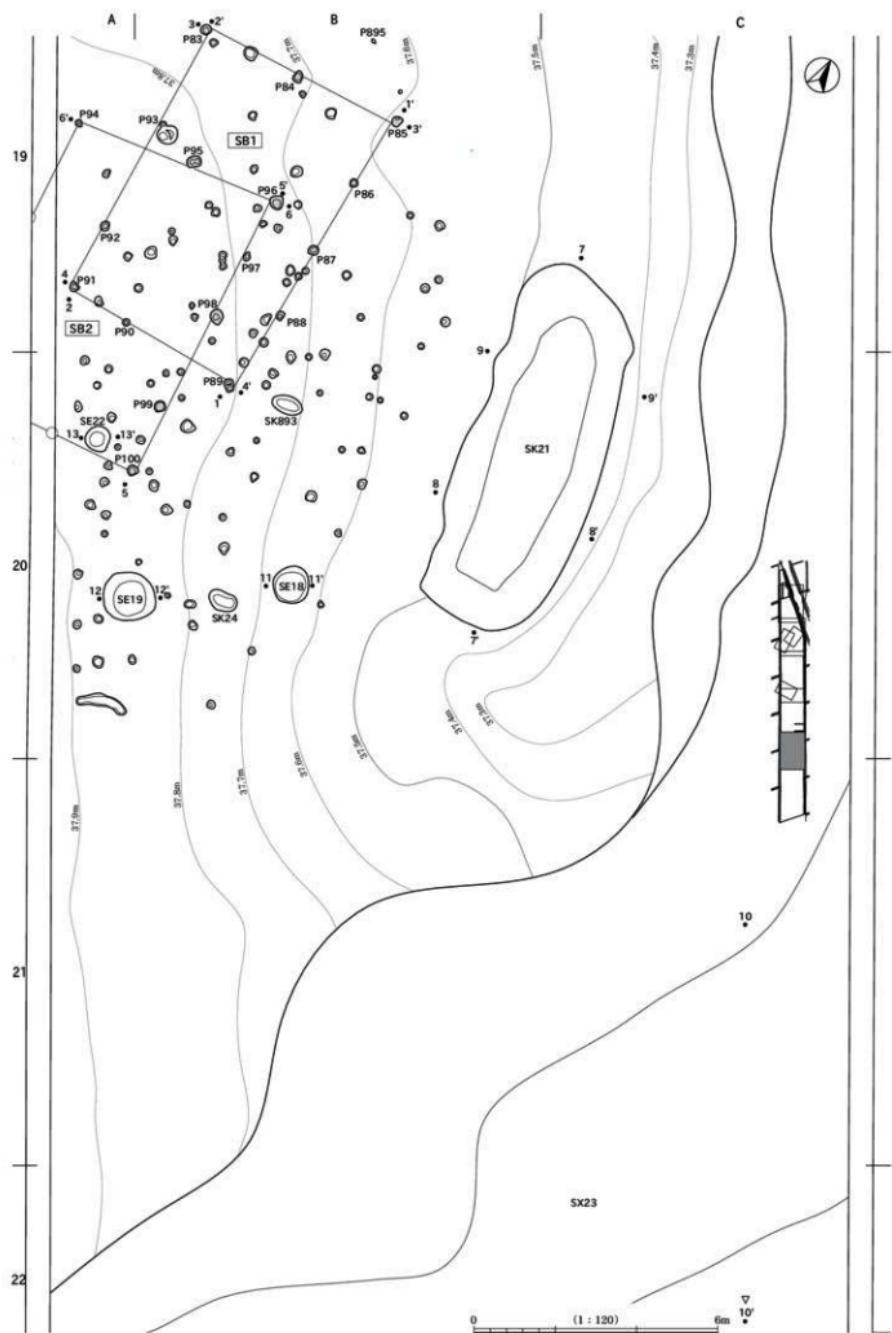
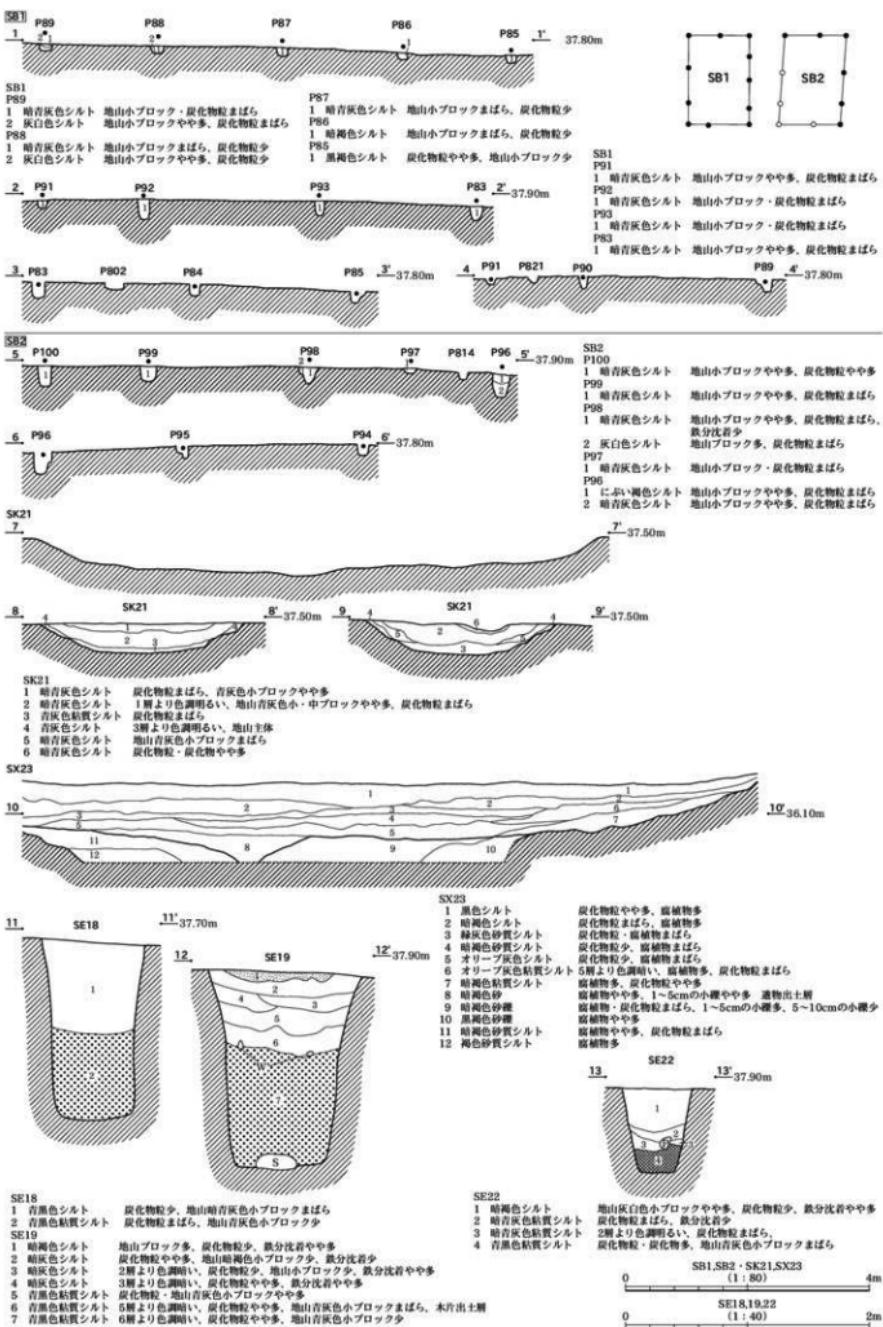
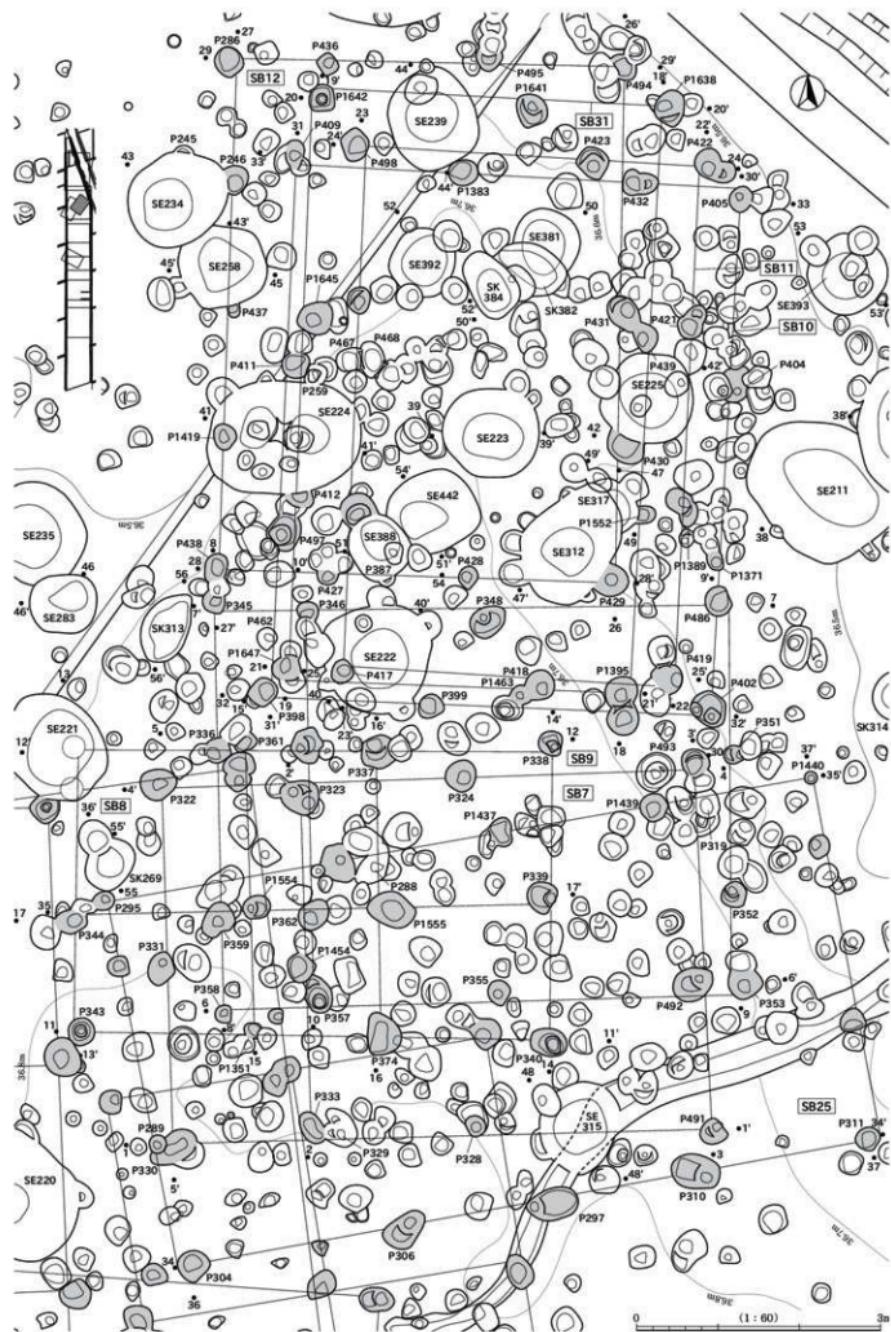
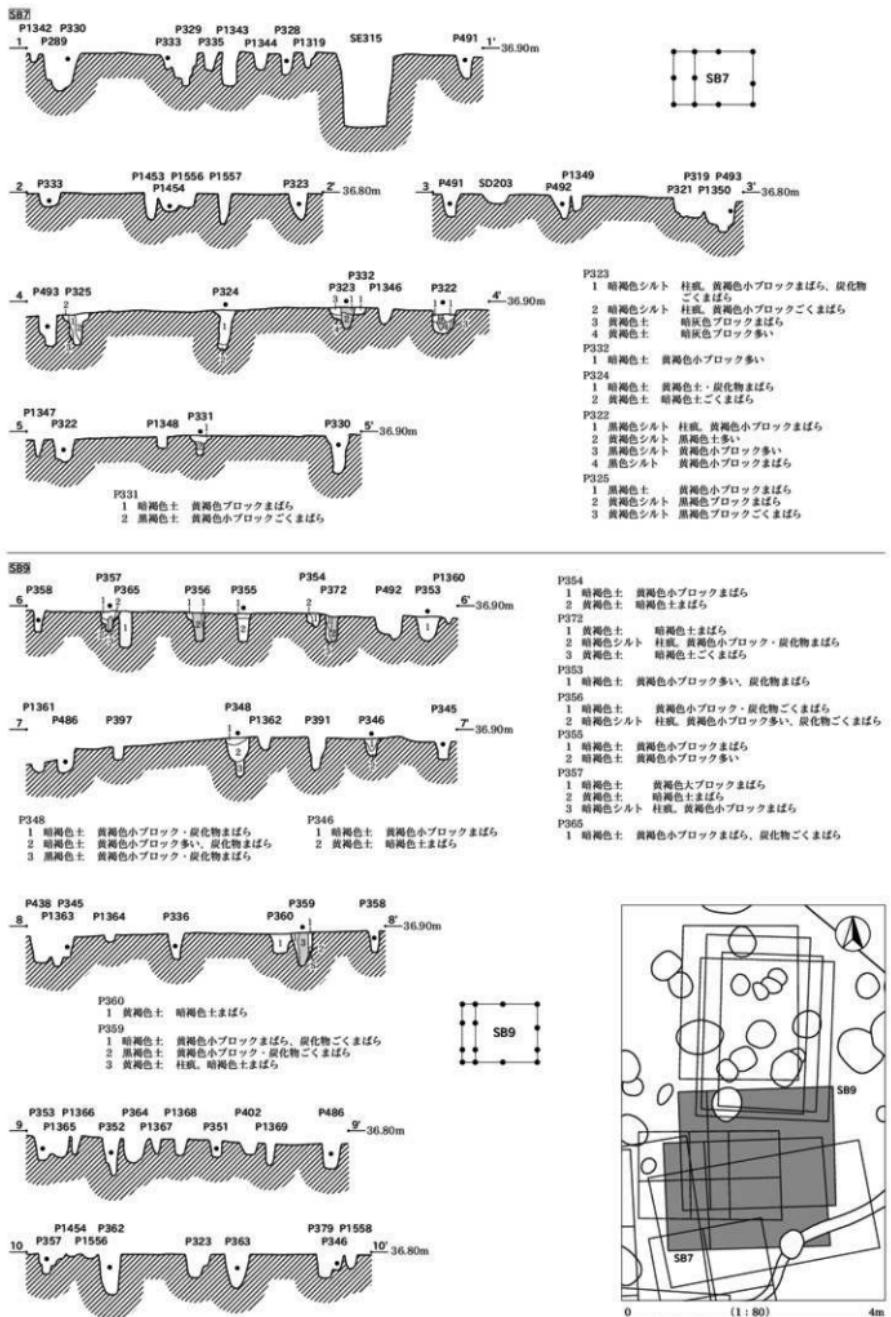


圖 版 21

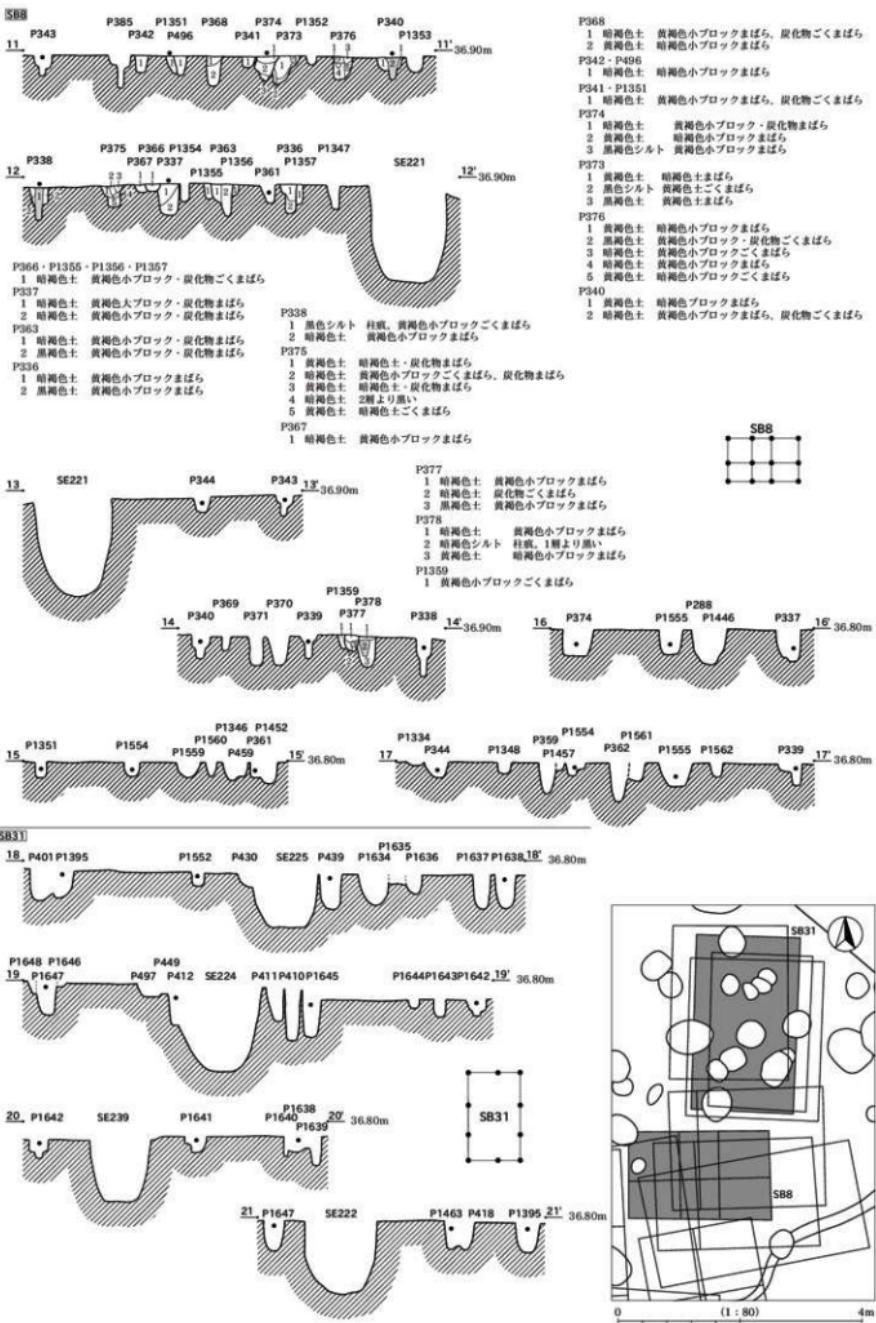




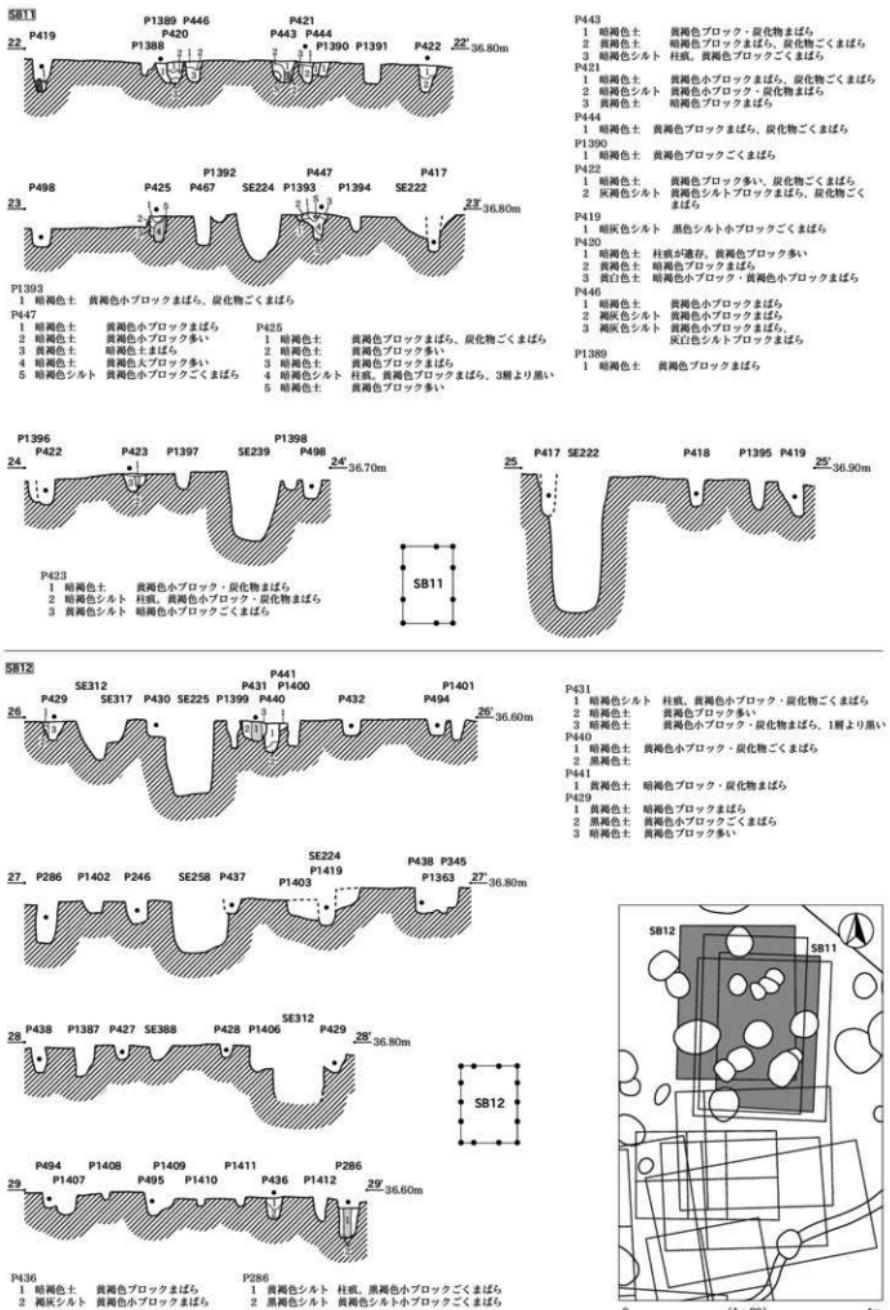
造構個別図(15) 分割図7 (SB7・SB9)



図版 24

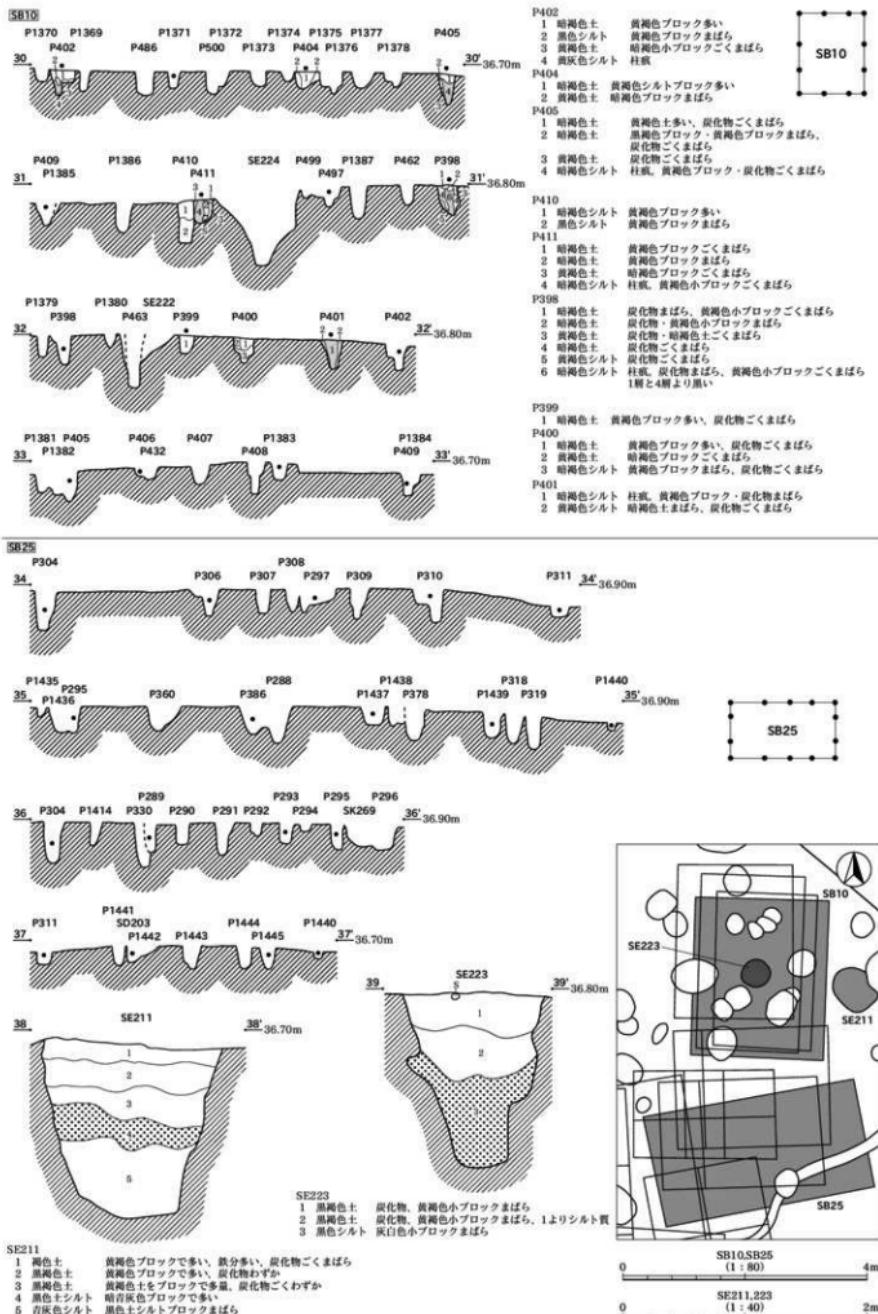


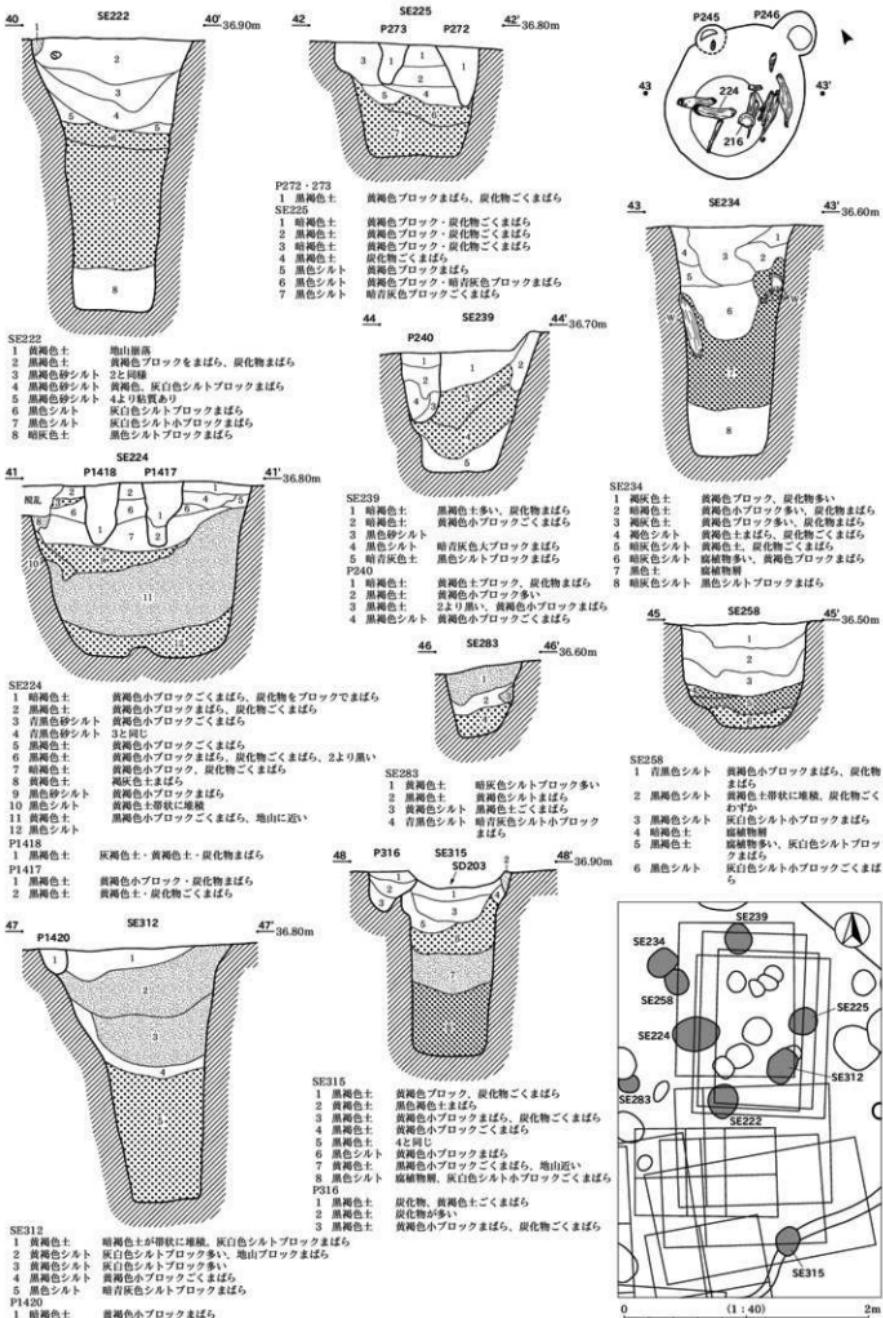
造構個別図(17) 分割図7 (SB11,SB12)



図版 26

造構個別図 (18) 分割図7 (SB10, SB25・SE211, 223)

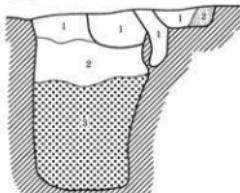




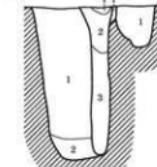
49 SE317 P1420 49' 36.70m



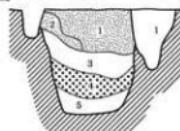
50 SE381 SK382 P383 SK384 50' 36.80m



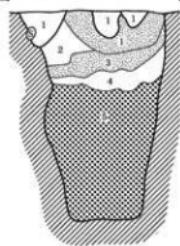
51 SE388 P387 P389 51' 36.80m



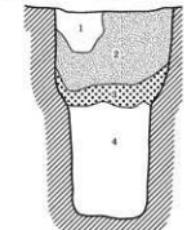
52 P1525 SE392 P413 52' 36.80m

SE392  
1 黄褐色シルト 黒褐色小ブロックごくまばら、地山近い  
2 黄褐色シルト 始状褐色ごくまばら  
3 黄褐色シルト 黄褐色小ブロック多い  
4 黑色シルト 黄褐色小ブロックごくまばら  
5 黄褐色シルト 青灰色シルトごくまばらP413  
1 黄褐色土 黄褐色土多い、炭化物ごくまばら  
SE393  
1 黄褐色シルト 黑褐色小ブロックごくまばら

53 P394 P395 P396 53' 36.60m

SE393  
1 黄褐色土 黄褐色土まばら  
2 黄褐色土 黄褐色土まばら  
3 黄褐色シルト 黄褐色土ごくまばら  
4 青灰色シルト 黑褐色土まばら  
P394・395・396  
1 黄褐色土 黄褐色土をまばら、炭化物ごくまばら

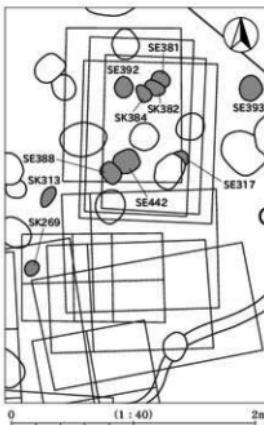
54 SE442 54' 36.80m

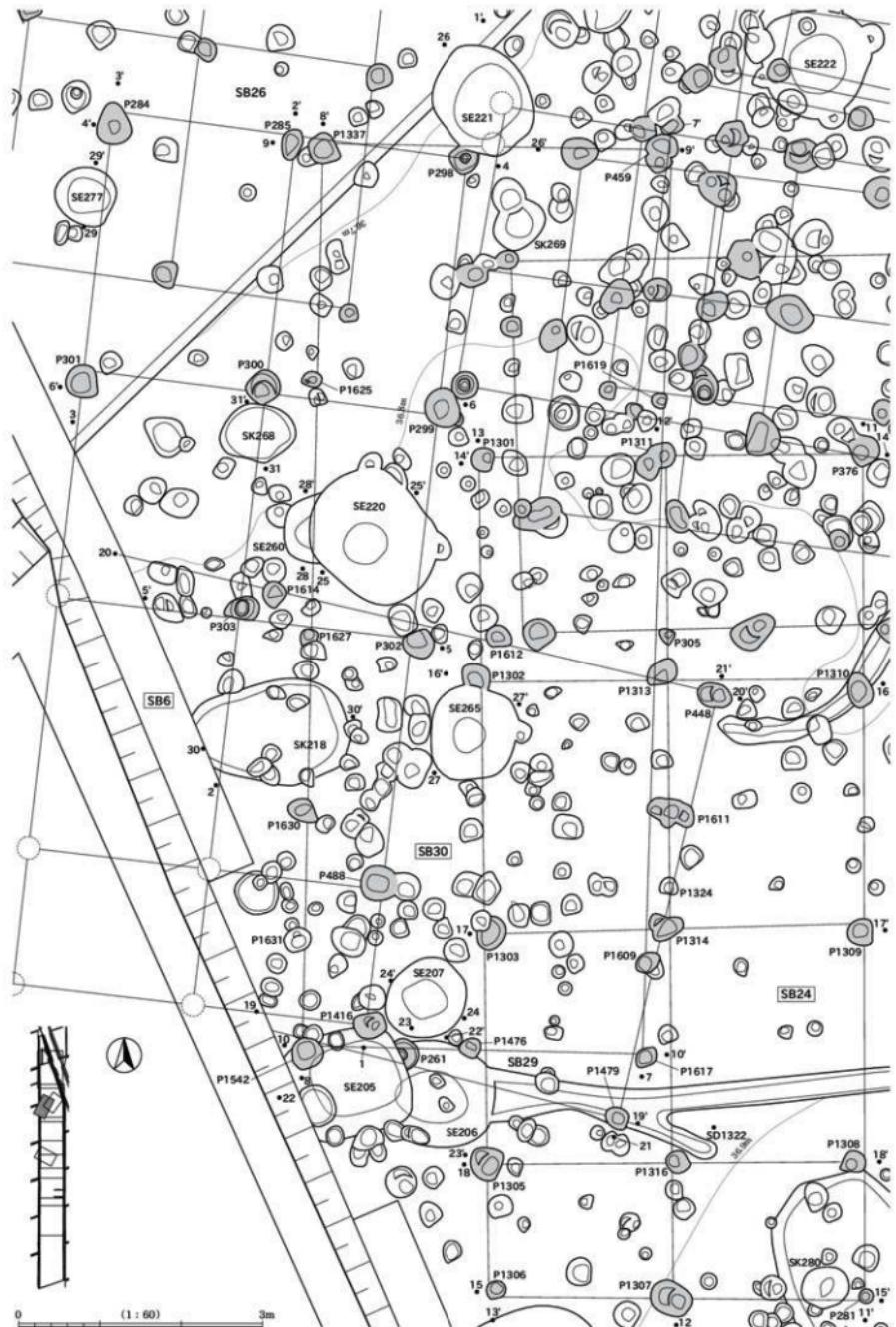
SE442  
1 黄褐色土 黄褐色土ブロック多い  
2 黄褐色シルト 黄褐色ブロックごくまばら  
3 黑色シルト 黄褐色土ブロックごくまばら  
4 黄褐色シルト 黑褐色シルトブロックごくまばら

55 SK269 55' 36.90m

SK269  
1 黑褐色土 黄褐色小ブロック・炭化物ごくまばら

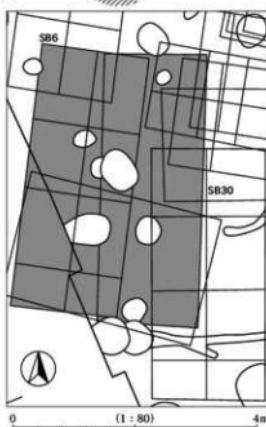
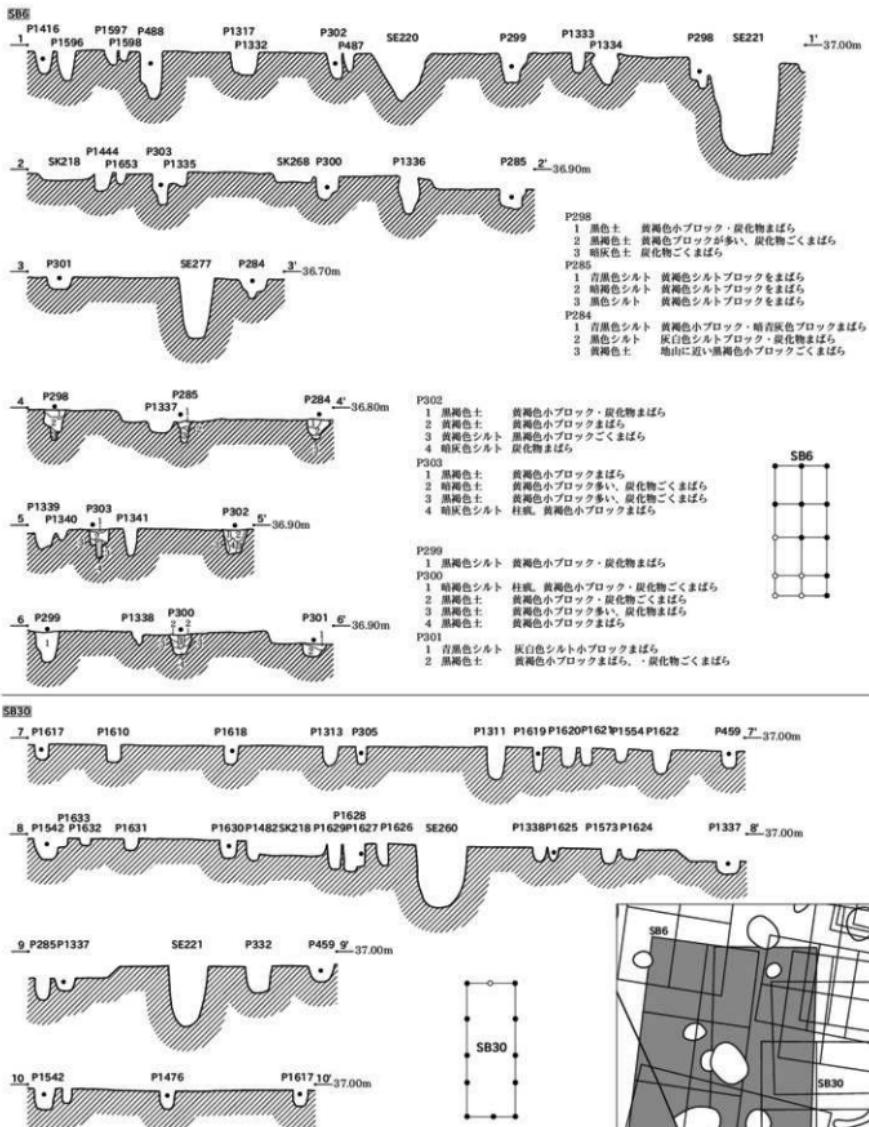
56 SK313 56' 36.80m

SK313  
1 黄褐色砂 黄褐色小ブロック土、炭化物ごくまばら

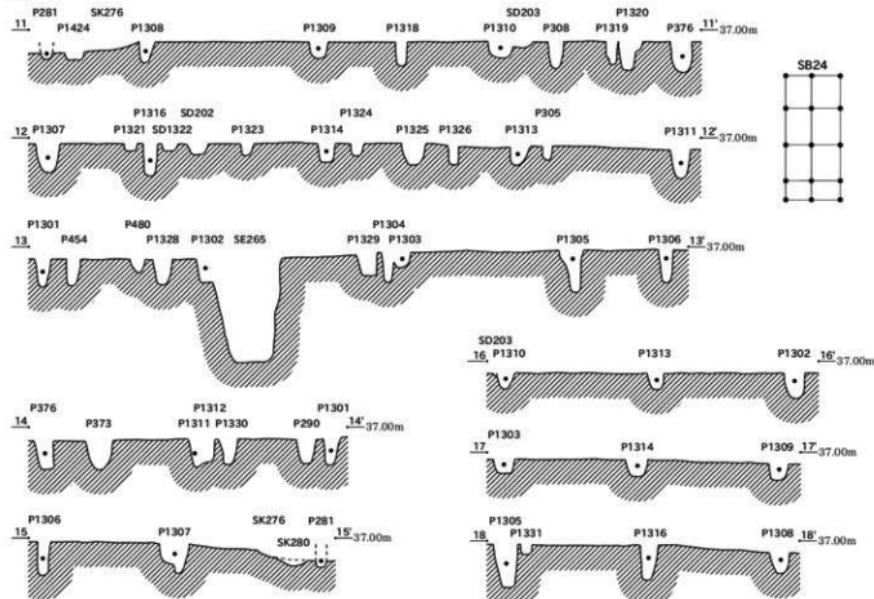


図版 30

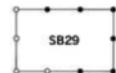
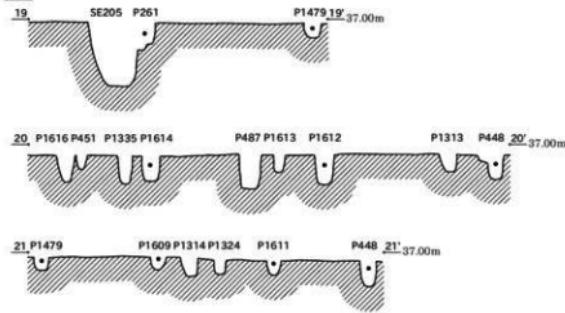
造構個別図 (21) 分割図8 (SB6,SB30)



SB24



SB29



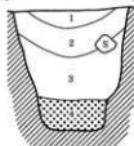
- P261  
1 黄褐色土 黄褐色土をブロックで多量  
2 黄褐色土 黄褐色土をブロックまばら  
SE205  
1 黑褐色土 黄褐色土 黄褐色土をブロックまばら  
2 黄褐色土 1 黄褐色土 黄褐色土をブロック多量  
3 黄褐色土 2 黄褐色土 黄褐色土をブロックまばら  
4 黑色シルト 黄褐色土をまばら  
5 黄褐色シルト 黄褐色シルトブロック多量  
6 黄褐色シルト 黑  
SE206  
1 黄褐色土 黄褐色土 黄褐色土をブロックまばら

- SE206  
1 黄褐色土 黄褐色土 黄褐色土をブロックまばら  
2 黄褐色土 黄褐色土 黄褐色土をブロック多量  
3 黄褐色シルト 黑色シルトブロック  
4 黑色土 黄褐色土  
5 黄褐色土 黄褐色土 黄褐色土をブロック多い  
6 黄褐色シルト 黑色シルト 黄褐色土多い  
P270, P271 黄褐色土 黄褐色土 黄褐色土  
P270, P271 黄褐色土 黄褐色土 黄褐色土

図版 32

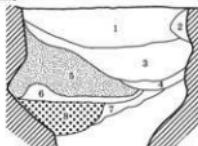
遺構個別図 (23) 分割図 8 (SE207,220,221,260,265,277・SK218,268)

24. SE207 24' 37.00m



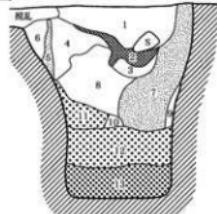
- SE207  
 1 黄褐色土 黄褐色小ブロックごくまばら  
 2 黑褐色土 黄褐色ブロックを帶状  
 3 黑褐色シルト 黄褐色ブロックを帶状  
 4 黑色シルト 腐植土まばら

25. SE220 25' 36.90m



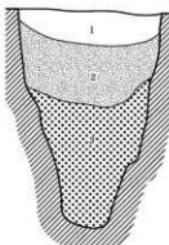
- SE220  
 1 黑褐色土 黄褐色小ブロックまばら、炭化物ごくまばら  
 2 黄褐色土 黑褐色小ブロックごくまばら  
 3 黑褐色土 黄褐色土が帶状に堆積、炭化物ごくまばら  
 4 黄褐色シルト 黄褐色シルト多い  
 5 黄褐色シルト 黄褐色シルト多い  
 6 黑褐色シルト 黄褐色シルト多い  
 7 黑褐色シルト 黄褐色シルト多い  
 8 黑褐色シルト 黄褐色シルト多い  
 9 喻褐色土 黑褐色シルト多量

26. SE221 26' 36.80m



- SE221  
 1 黑褐色土 黄褐色土ごくまばら  
 2 黑色土 炭化物層、黑褐色土ごくまばら  
 3 黄褐色土 黄褐色小ブロックまばら  
 4 黑褐色土 黄褐色小ブロック、炭化物多い  
 5 黄褐色土 畜落土(堆山)、黑褐色土まばら  
 6 黑褐色土 炭化物ごくまばら、黄褐色小ブロック多い  
 7 黑褐色シルト 黄褐色シルトごくまばら  
 8 黑褐色シルト 黄褐色シルト多い  
 9 黑褐色シルト 黄褐色シルト多い  
 10 黑白色シルト 黄白色シルト多い  
 11 黑色シルト 黄白色シルト  
 12 黑色シルト 黑褐色土ごくまばら  
 13 黑色土 腐植物多量

27. SE265 27' 36.90m



- SE265  
 1 黄褐色土 黄褐色小ブロックまばら  
 2 黑褐色シルト 黑褐色シルトブロックまばら  
 3 黑色シルト 黄白色シルトブロックごくまばら

28. SE260 28' 36.90m

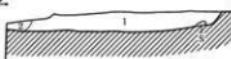


- SE260  
 1 黑色シルト 腐植物ごくまばら  
 2 喻灰色シルト 黑色シルトブロックごくまばら

29. SE277 29' 36.70m

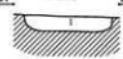


30. SK218 30' 36.90m



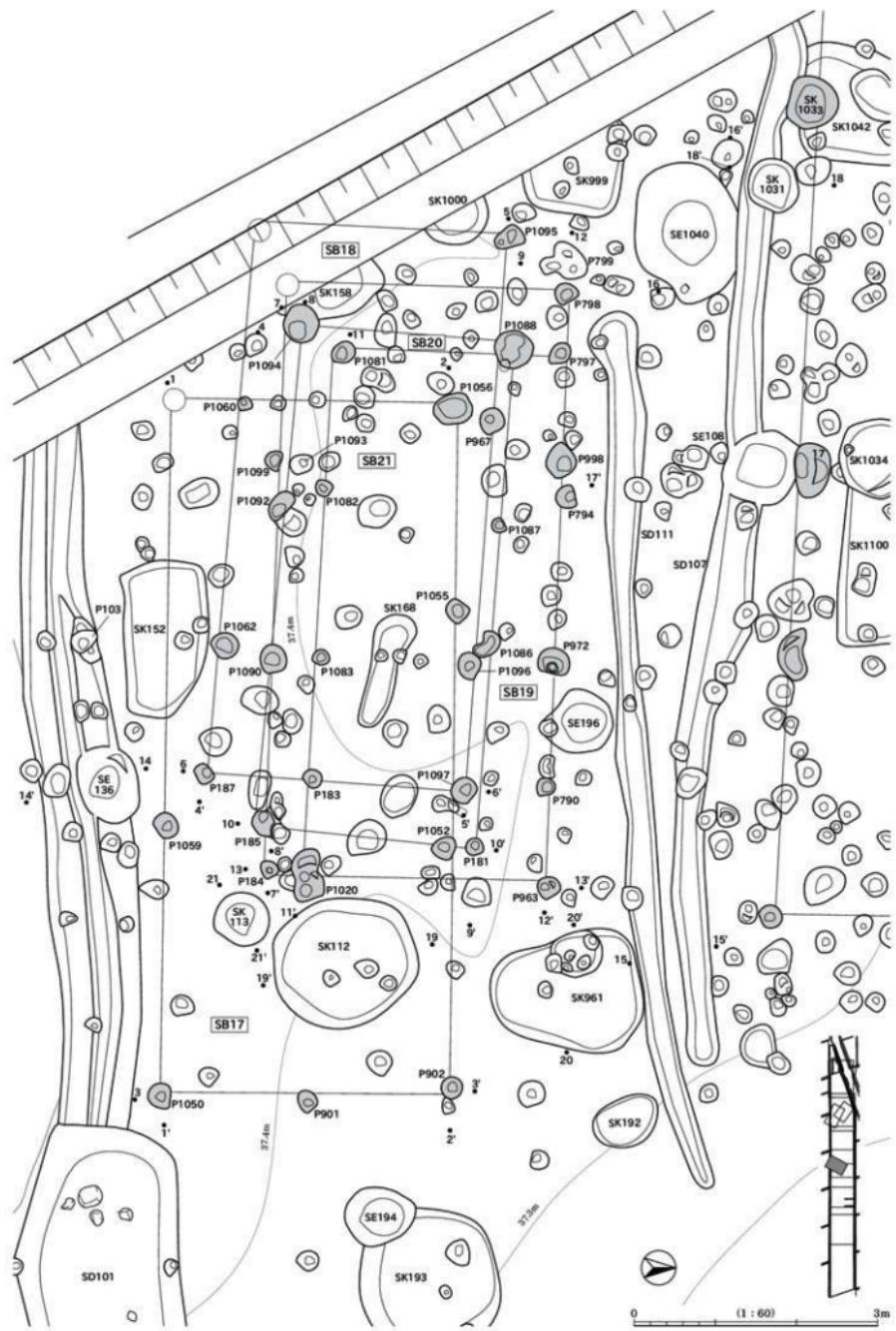
- SK218  
 1 黑褐色土 黄褐色小ブロックまばら、炭化物ごくまばら  
 2 黄褐色土 黄褐色小ブロック多い

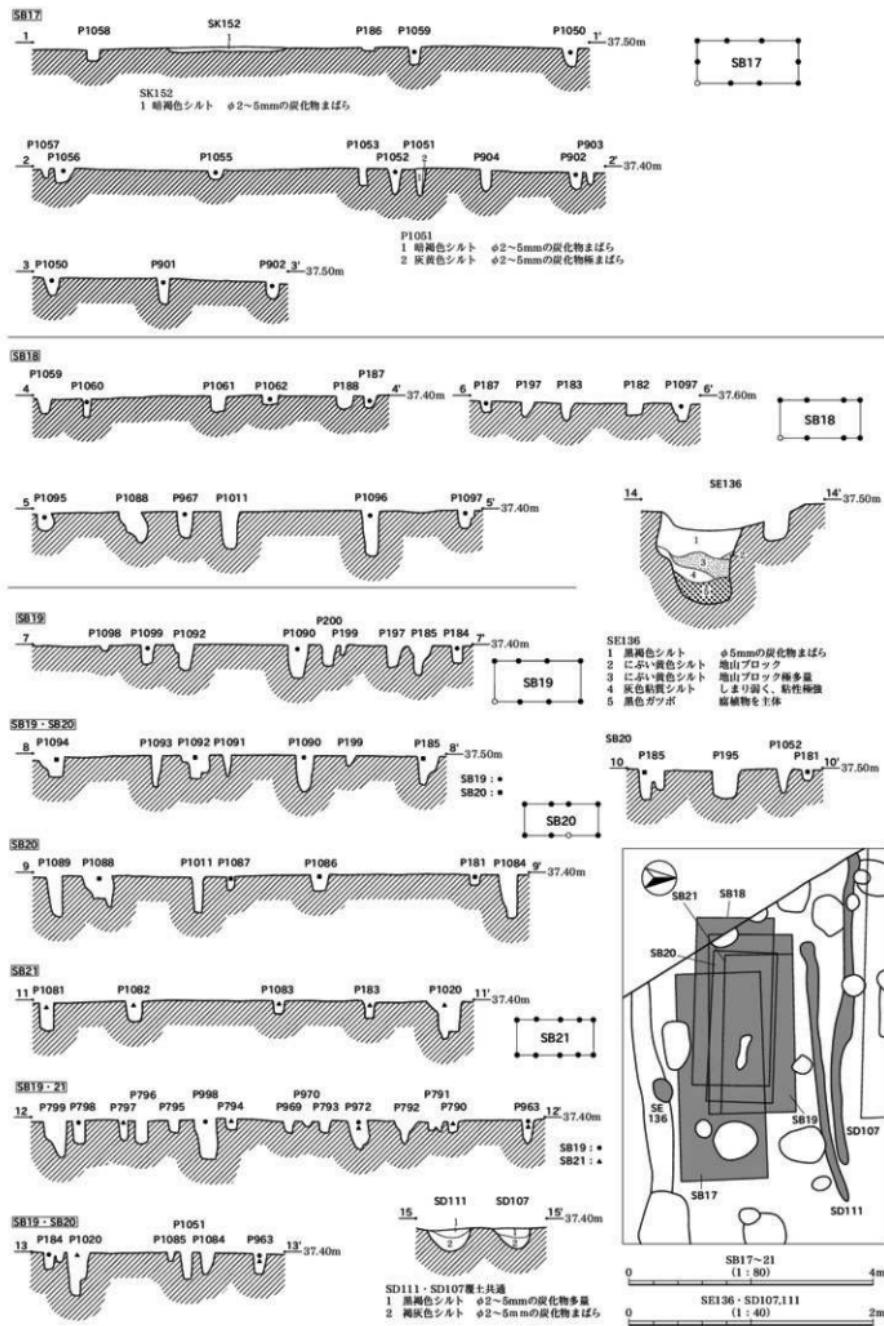
31. SK268 31' 36.90m

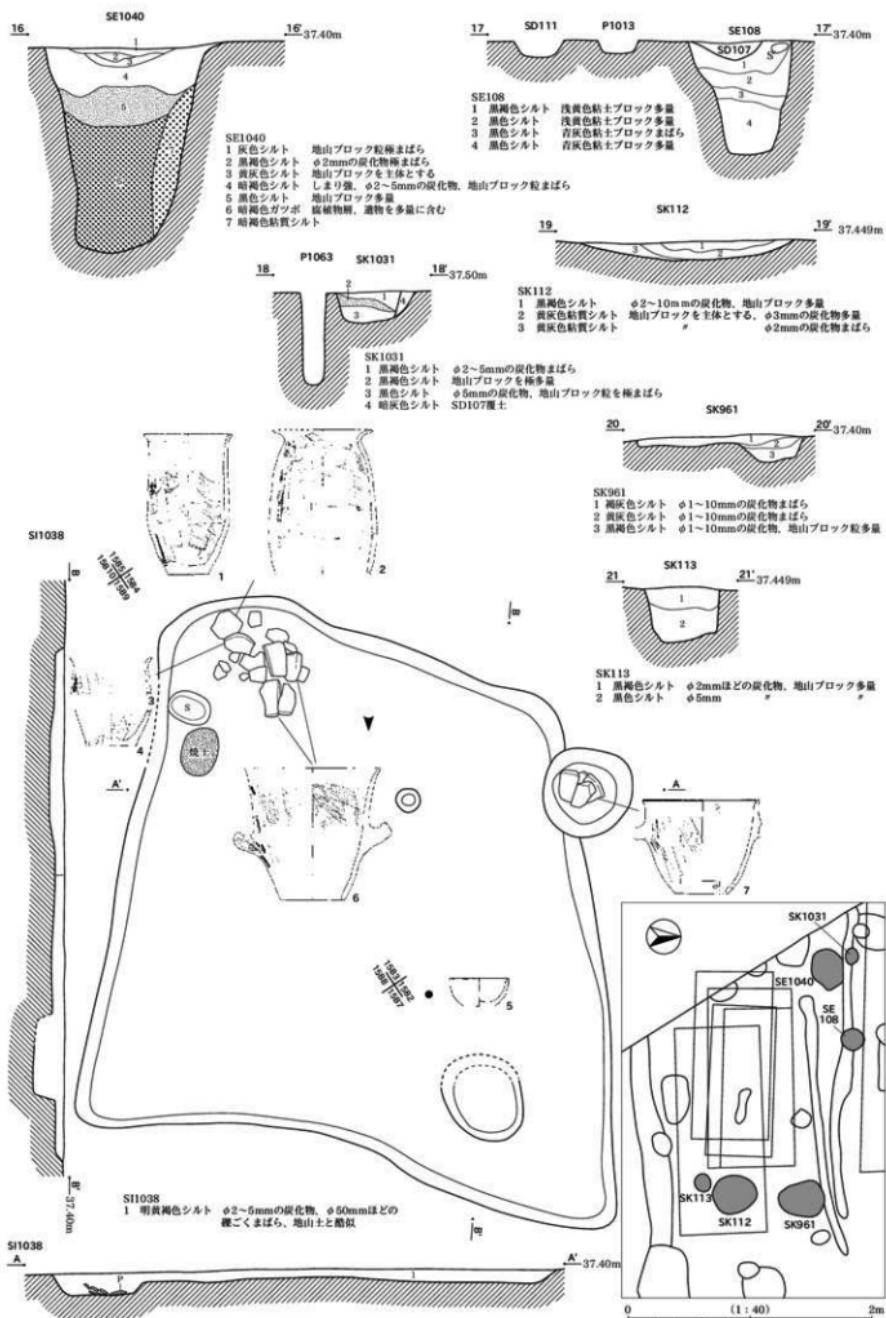


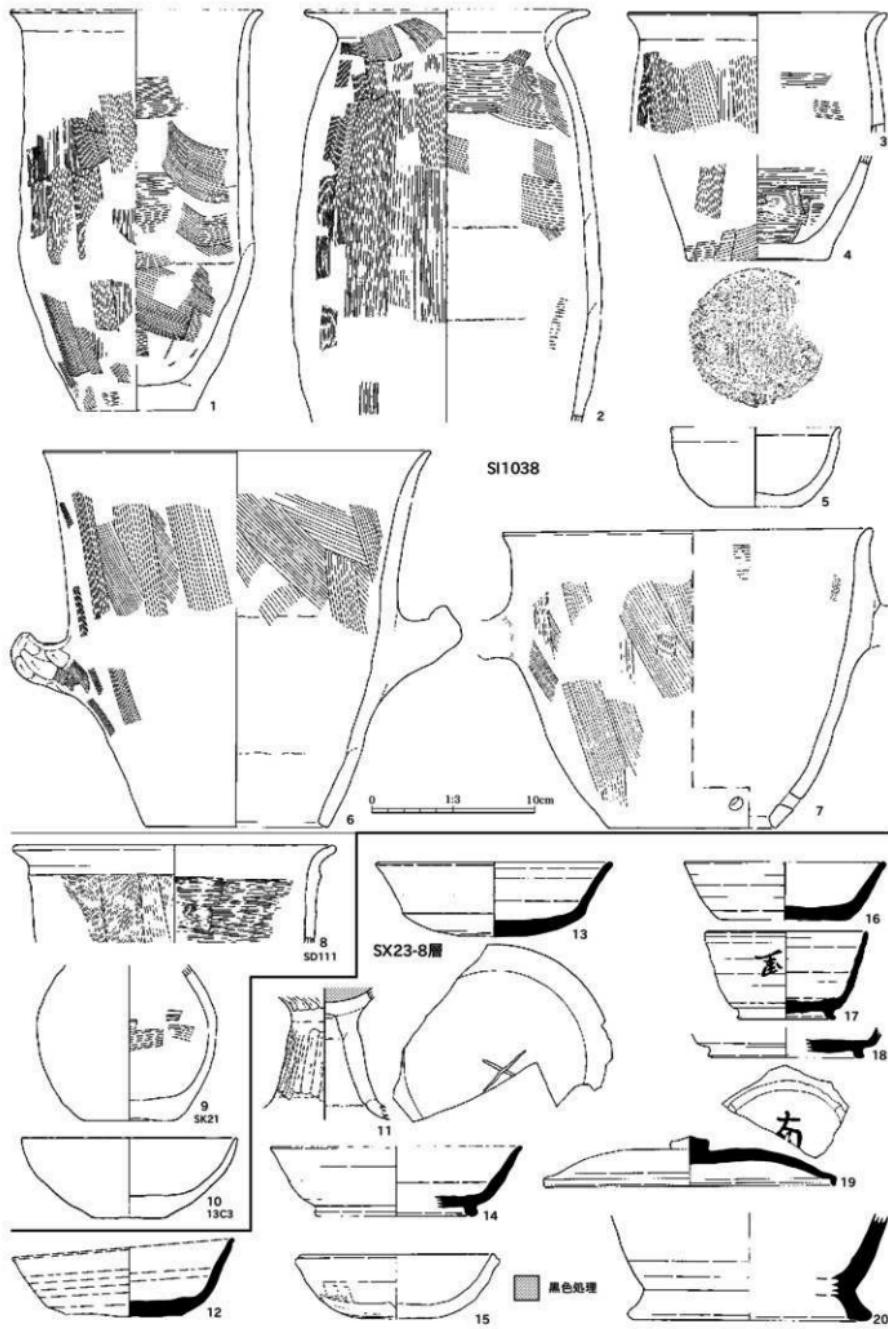
- SK268  
 1 黑褐色土 黄褐色小ブロック・炭化物ごくまばら

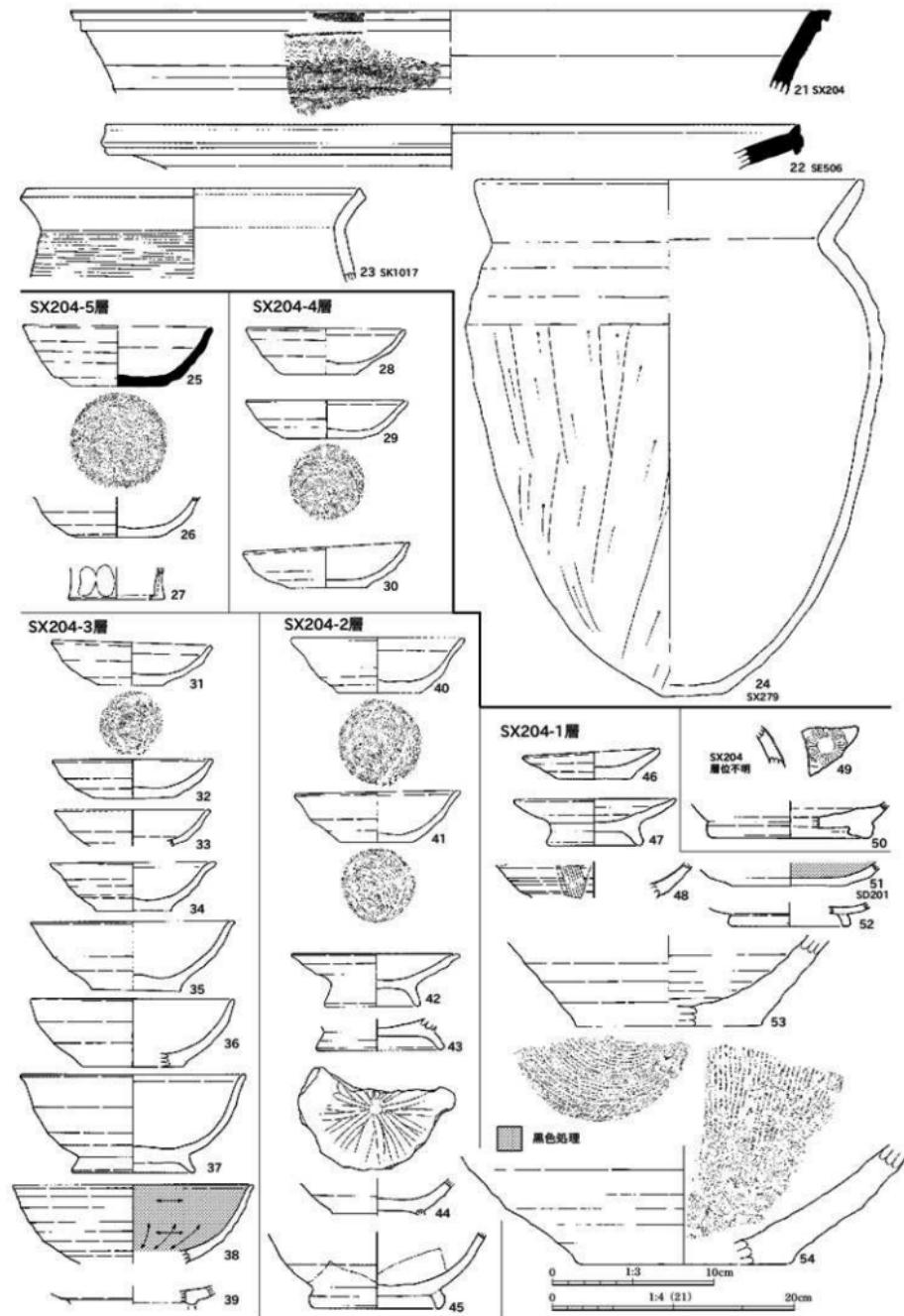


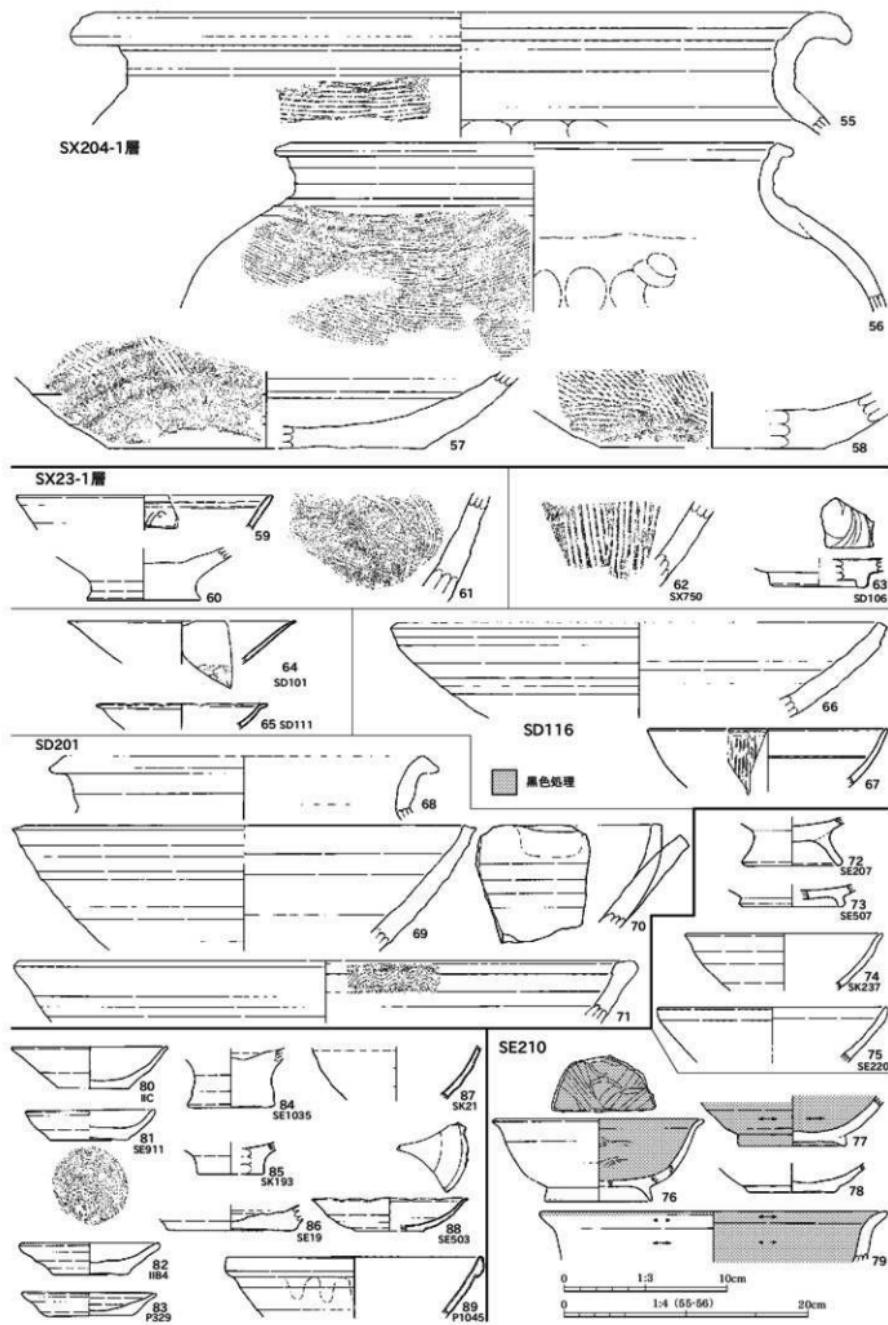


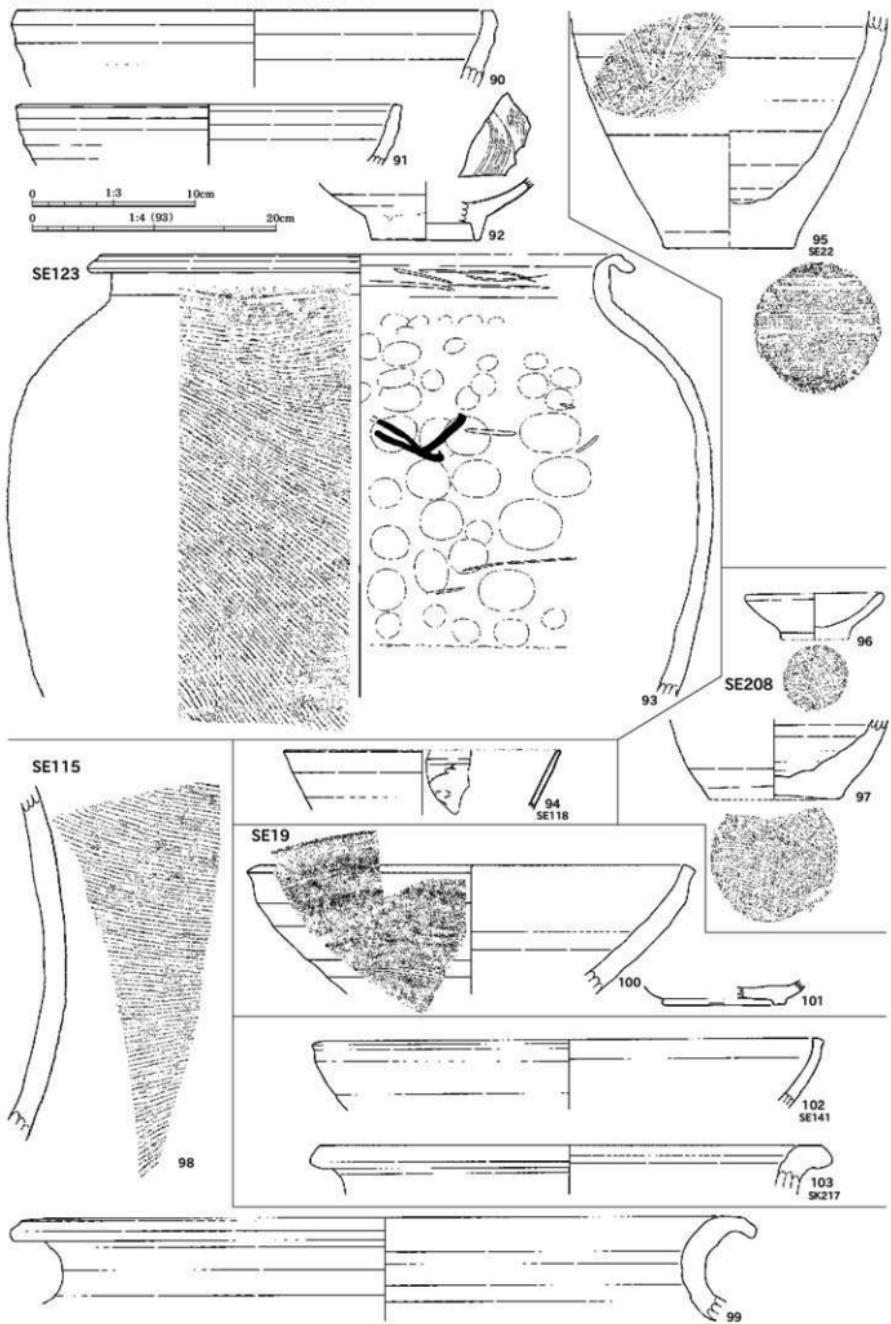


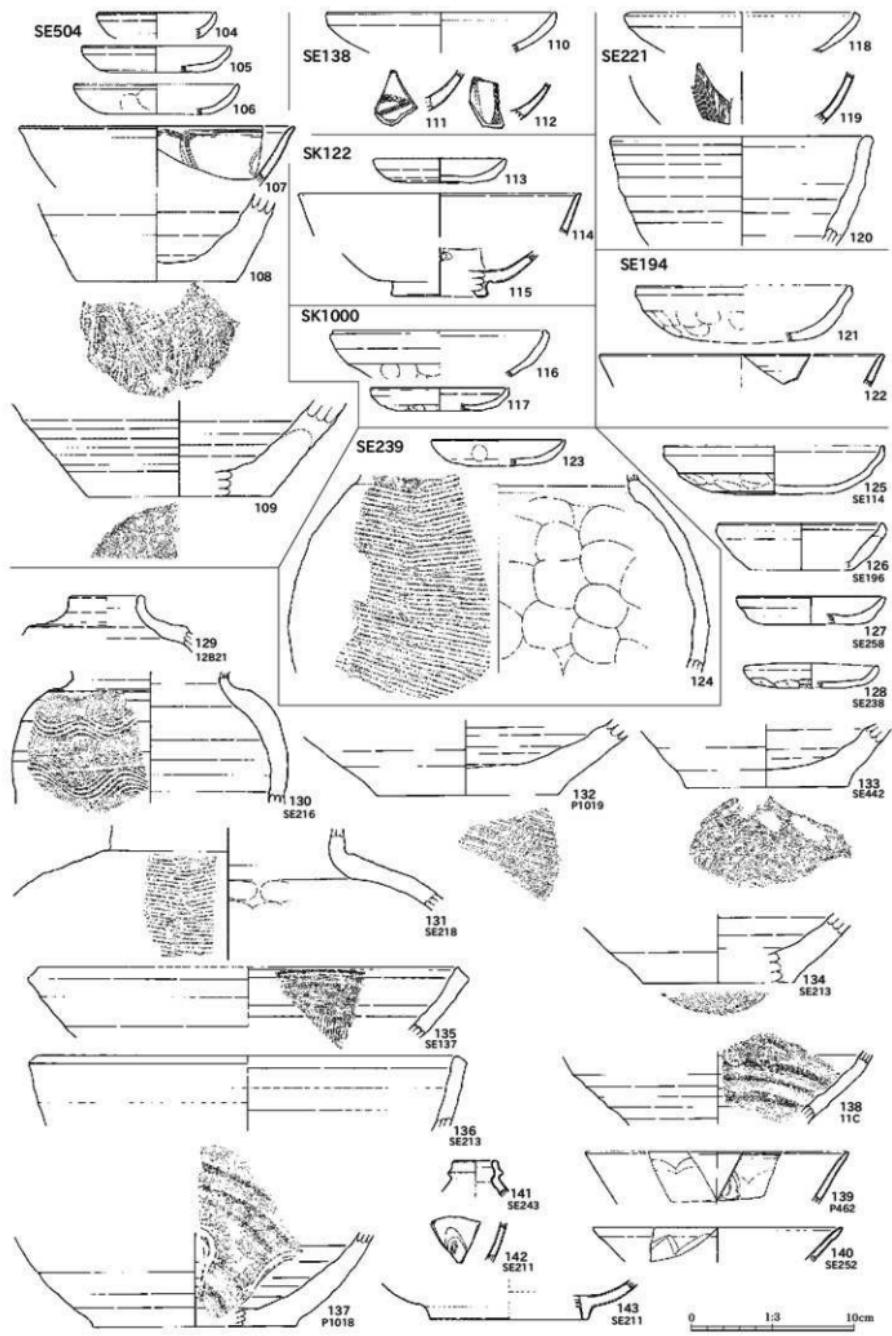


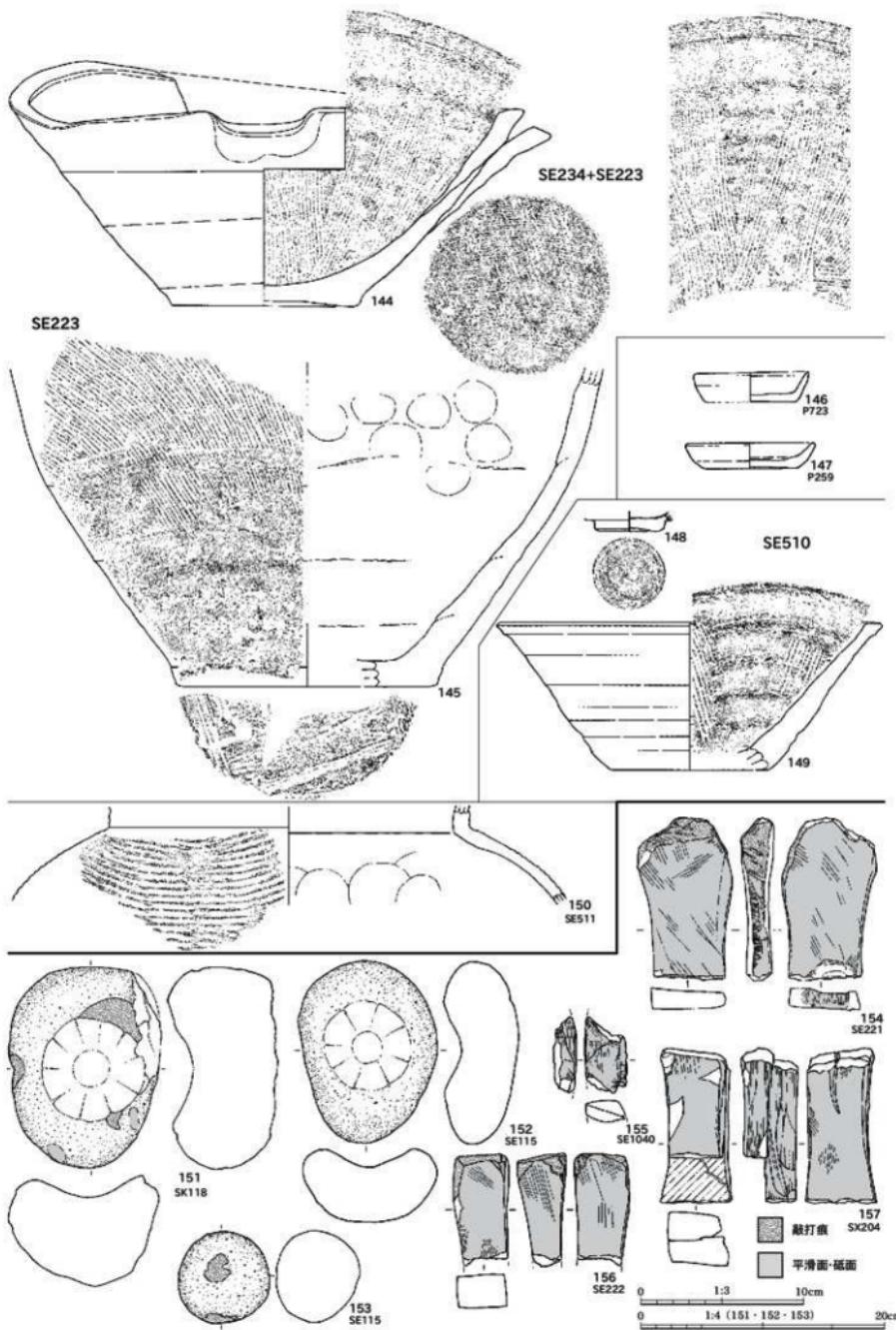


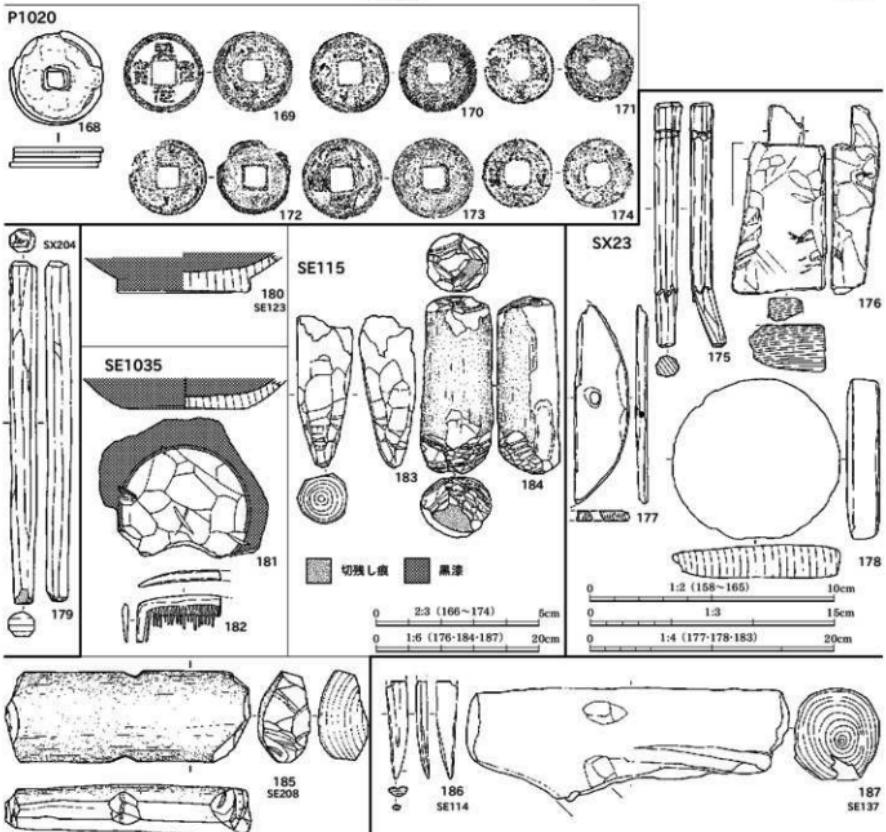
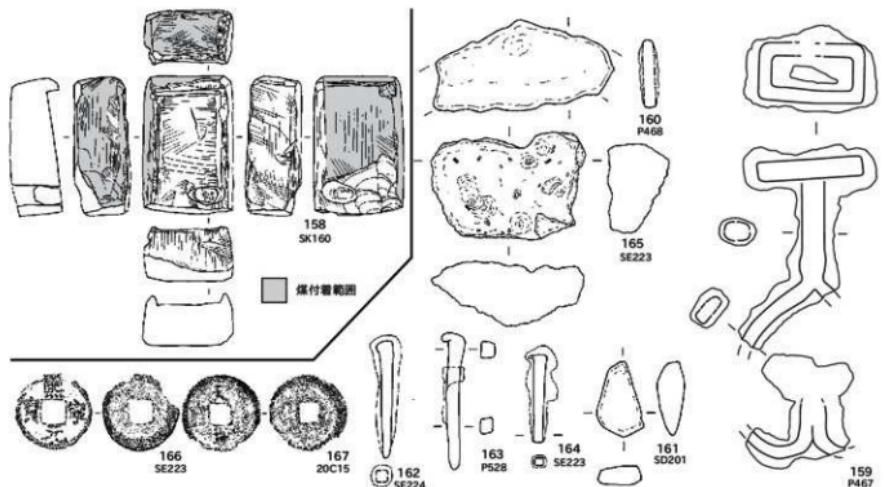


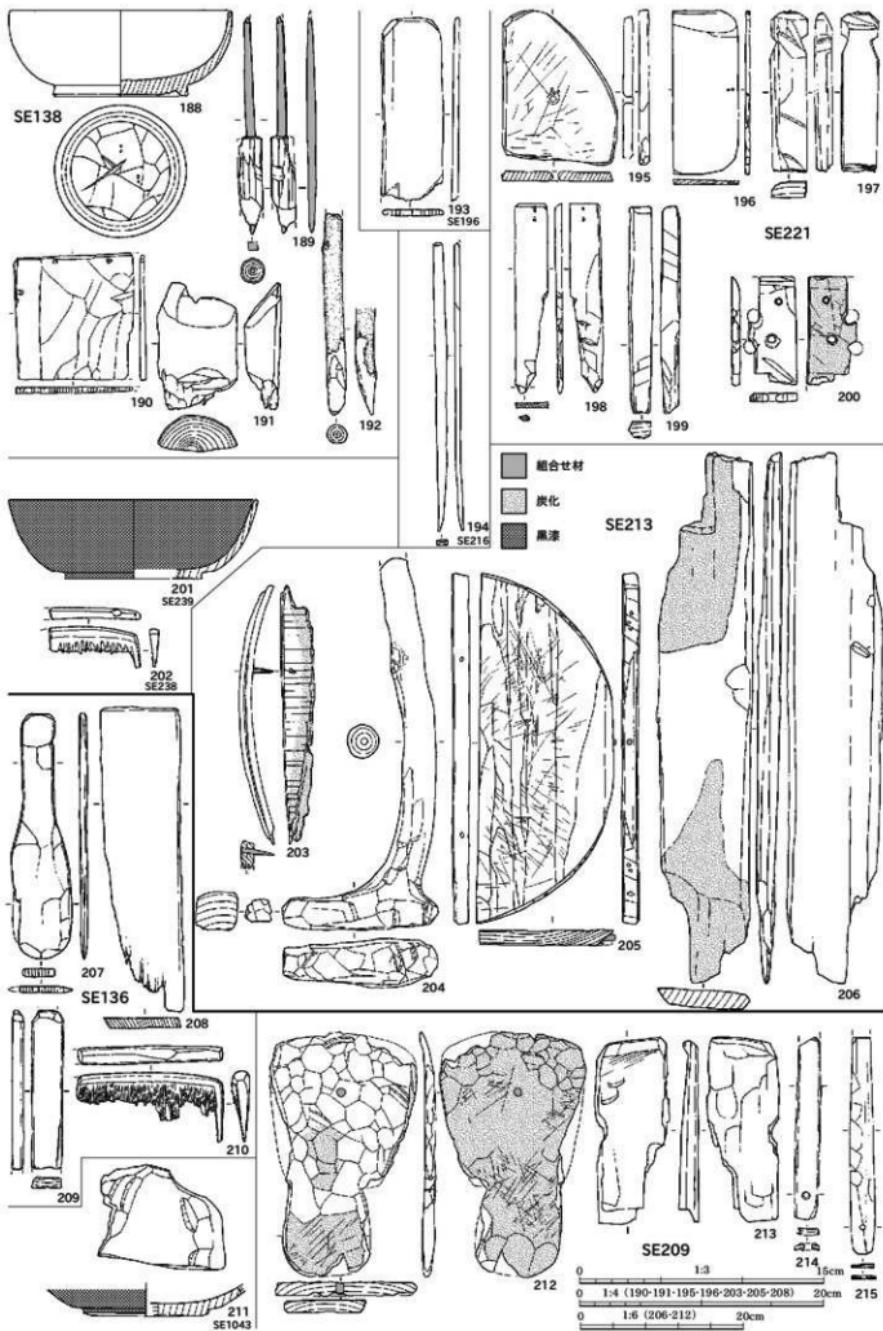


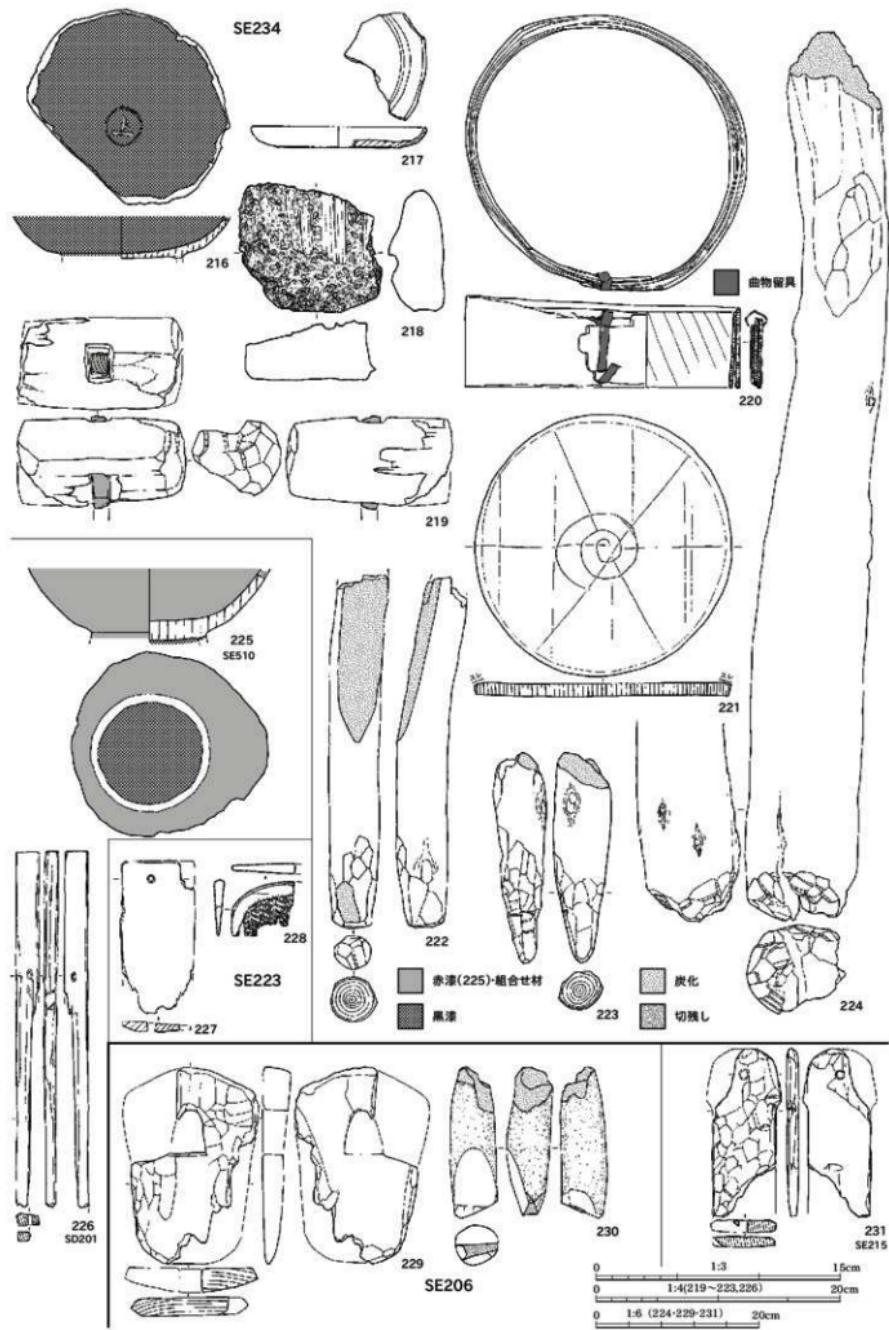


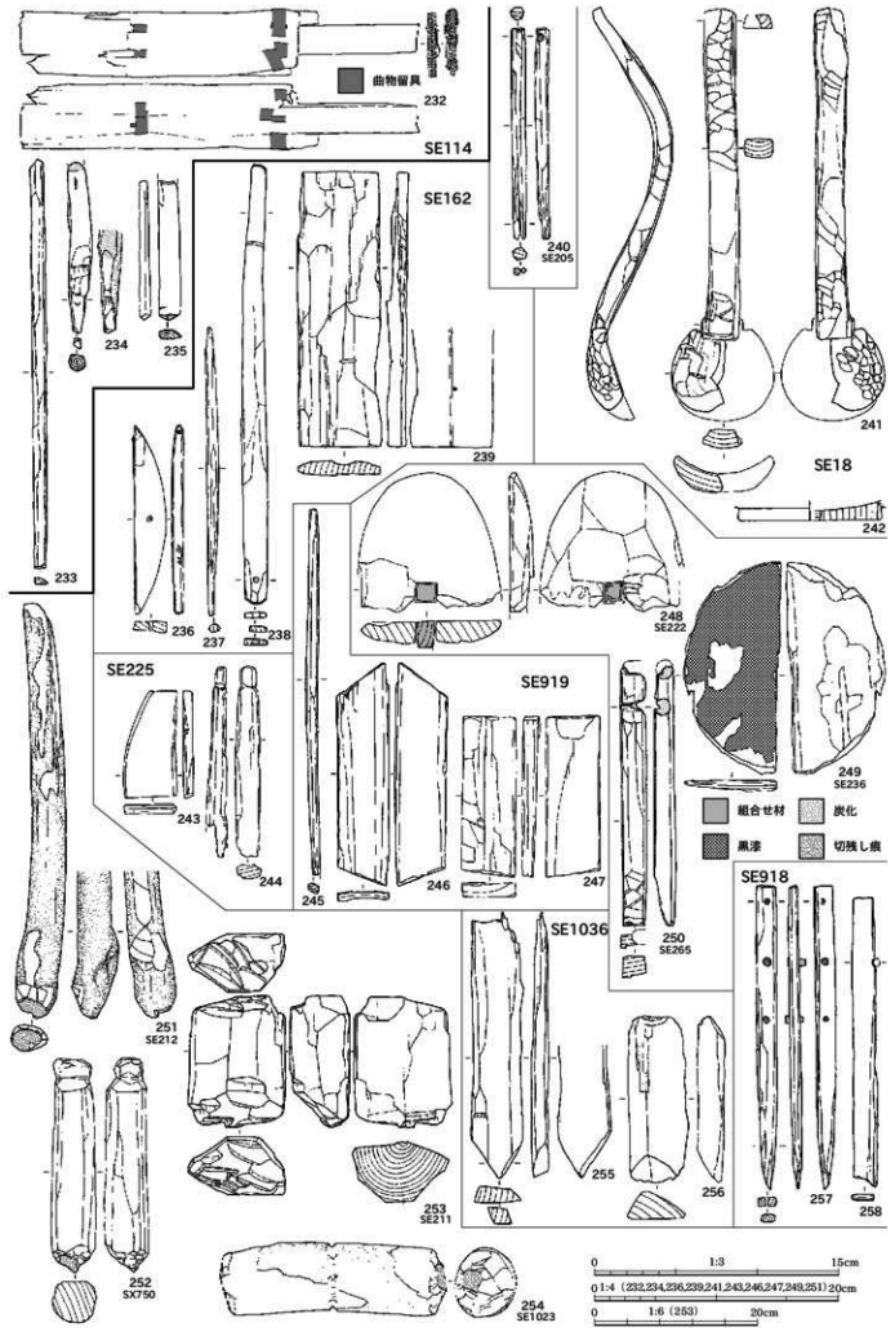


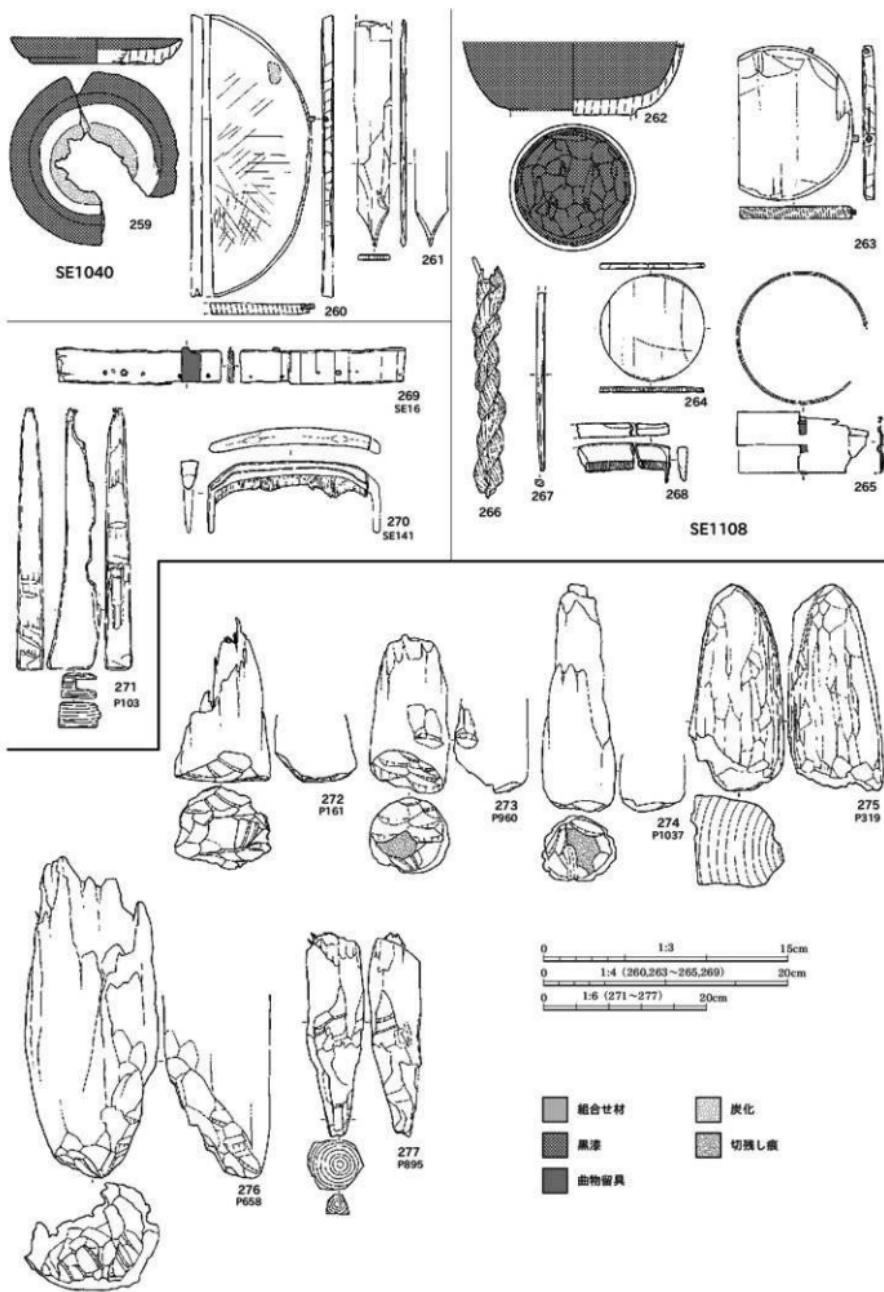


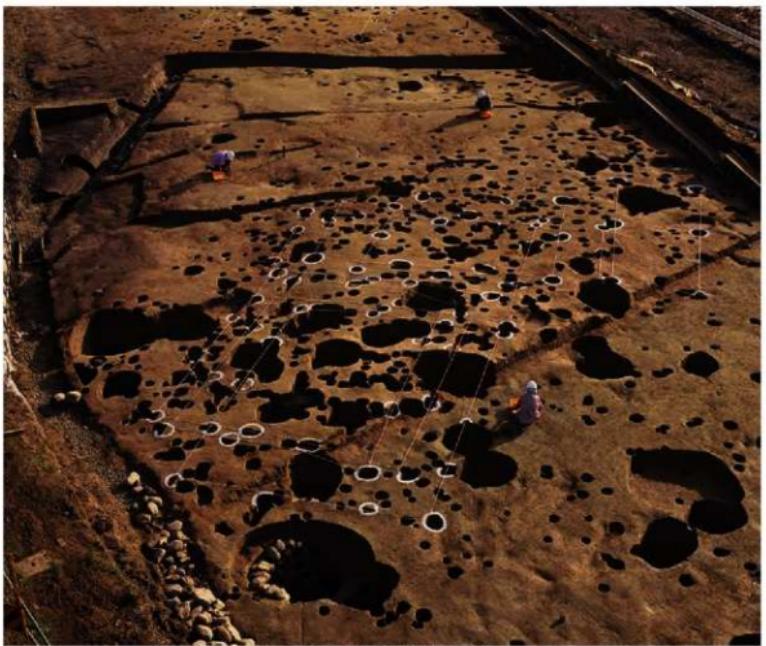












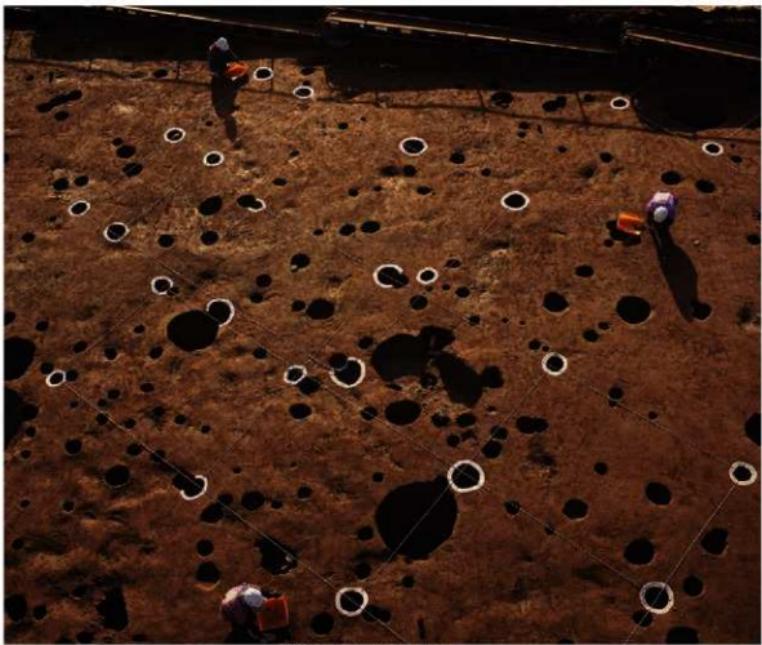
SD201 区画内 完掘（北西から）



石組井戸 SE247 検出状況（西から）



SB15～SB21 完掘（東から）



SB4・SB5 完掘（北東から）



遺跡遠景（箕冠城跡から）



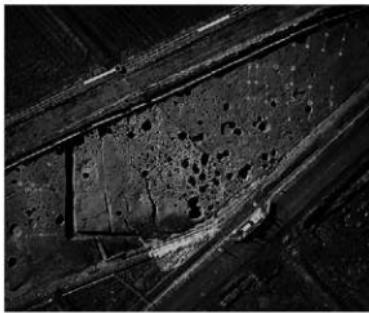
遺跡近景（北西から箕冠城跡を望む）



遺跡近景（北東から）



遺跡近景（南東から高田方面を望む）



SD201 区画内 完掘（上空から）



10列～21列 完掘（上空から）



SD201 完掘（西から）



SB22・SB23 完掘（北から）



遺跡近景（北から）



遺跡近景（東から）



基本層序⑥（10C グリッド）（南西から）



基本層序⑥（10C グリッド）（北から）



基本層序③（17B グリッド）（南東から）



基本層序⑧（C グリッド）（南東から）



SB1・SB2・SK21 完掘遠景（東から）



18～20列付近 完掘（北から）



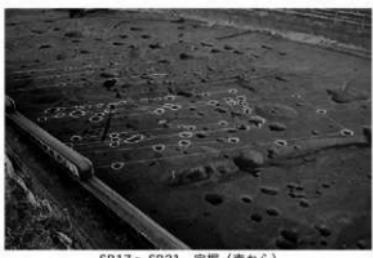
SB1・SB2 完掘（南から）



SB22・SB23 完掘（東から）



SB17～SB21 完掘（西から）



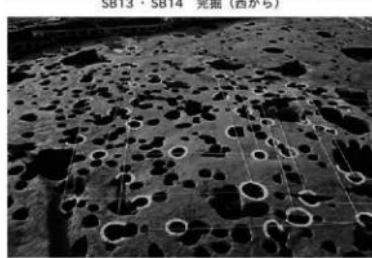
SB17～SB21 完掘（南から）



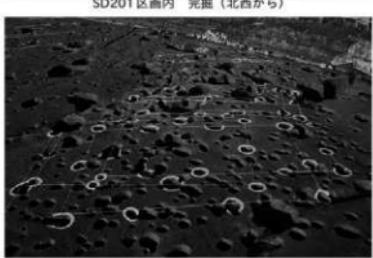
SB13～SB14 完掘（西から）



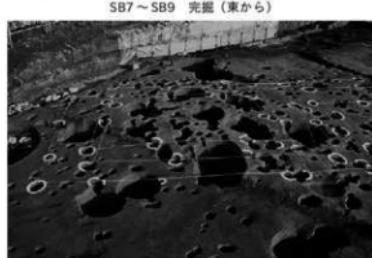
SD201 区画内 完掘（北西から）



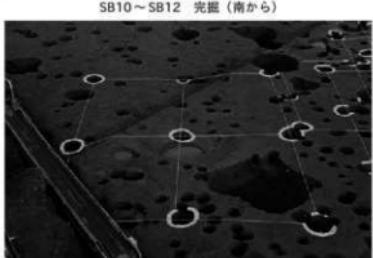
SB7～SB9 完掘（東から）



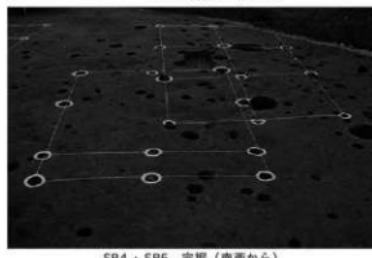
SB10～SB12 完掘（南から）



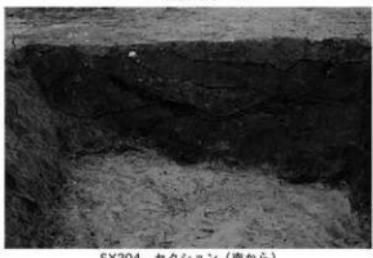
SB10～SB12 完掘（西から）



SB6 完掘（南から）



SB4～SB5 完掘（南西から）



SX204 セクション（南から）



SX204 完掘（東から）



SX204 完掘（北から）



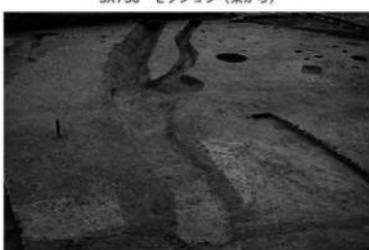
SX23 セクション（西から）



SX750 セクション（東から）



SD13・SD14 セクション（西から）



SD13・SD14 完掘（東から）



SD101 セクション（南から）



SD106 セクション（南東から）



SD102 セクション（南から）



SD117・SD111 セクション（西から）



SD201 検出状況 (北東から)



SD201 セクション (西から)



SD201 セクション (南から)



SD201 セクション (南東から)



SD202 セクション (東から)



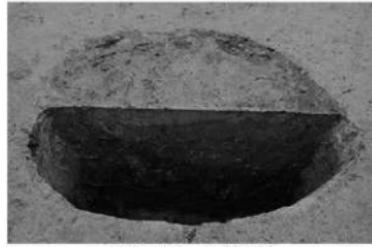
SD203 セクション (西から)



SE16 セクション (南から)



SE16 完掘 (東から)



SE19 セクション (南から)



SE22 遺物 (95) 出土状況 (南西から)



SE108 セクション（北から）



SE114 セクション（南から）



SE115 セクション（南から）



SE115 遺物（152・153）出土状況（北から）



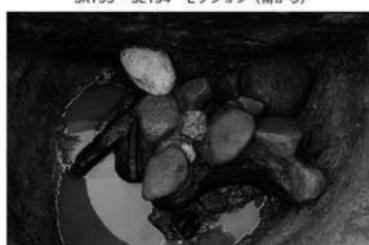
SE138 セクション（東から）



SK193・SE194 セクション（南から）



SE194 セクション（南から）



SE205 硬出土状況（東から）



SE206 セクション（南西から）



SE207 セクション（北東から）



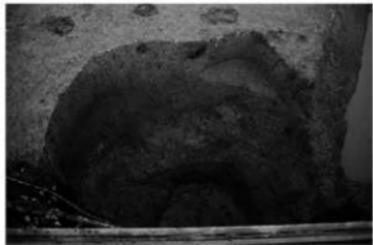
SE206・SE207 完掘（西から）



SE208 セクション（南から）



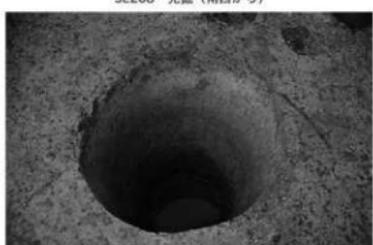
SE208 遺物（96）出土状況（北から）



SE208 完掘（南西から）



SE209 セクション（南から）



SE210 完掘（南から）



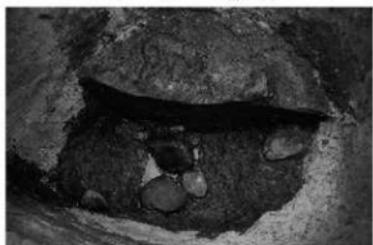
SE211 セクション（南から）



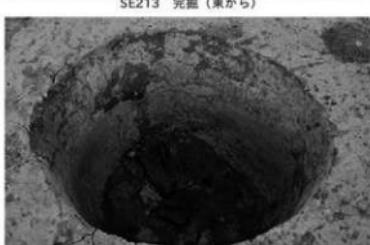
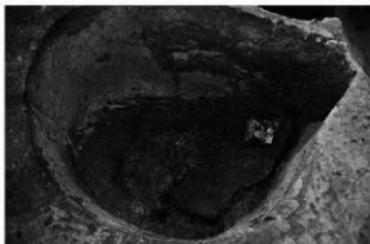
SE212 セクション（東から）



SE213 セクション（西から）



SE213 遺物出土状況（西から）





SE220 セクション（南東から）



SE222 セクション（南から）



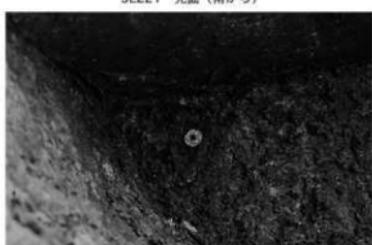
SE221 セクション（西から）



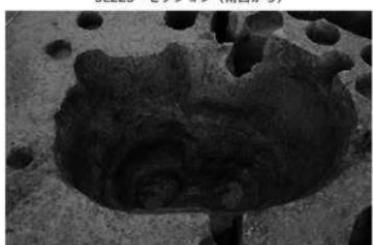
SE221 完掘（南から）



SE223 セクション（南西から）



SE223 遺物（166）出土状況（西から）



SE224 完掘（南から）



SE225 セクション（南東から）



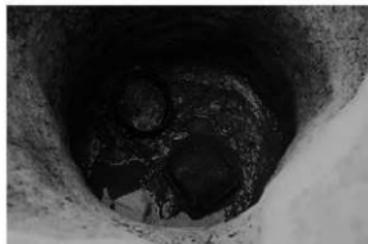
SE234 セクション（南西から）



SE234 遺物（216）出土状況（西から）



SE234 遺物出土状況（南西から）



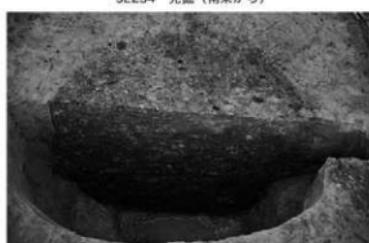
SE234 遺物 (220) 出土状況（北東から）



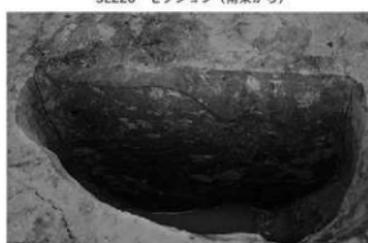
SE234 完掘（南東から）



SE220 セクション（南東から）



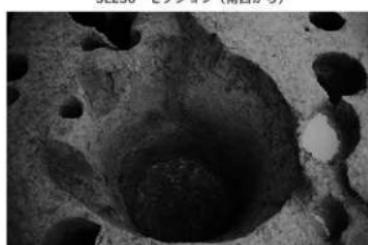
SE235 セクション（南西から）



SE236 セクション（南西から）



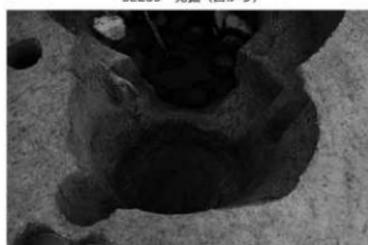
SE239 セクション（西から）



SE239 完掘（西から）



SE242 セクション（南西から）



SE243 完掘（北東から）



SE247 セクション (南東から)



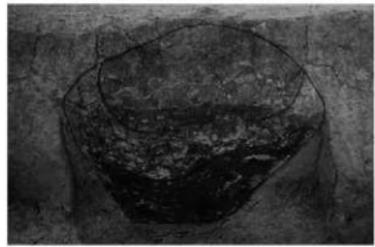
SE247 セクション (北西から)



SE258 セクション (北東から)



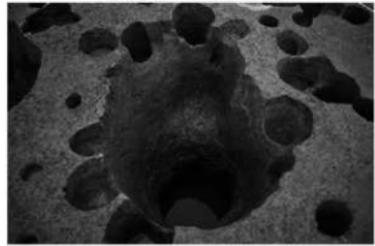
SE264 セクション (北西から)



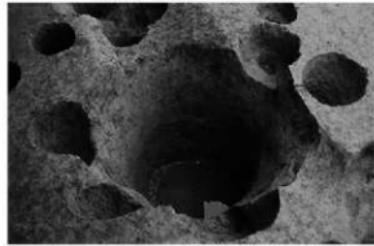
SE266 セクション (南から)



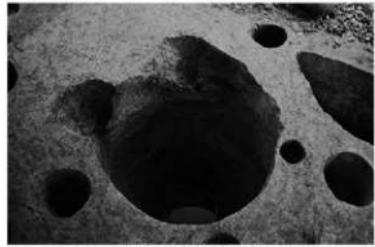
SE243 セクション (南東から)



SE312・SE317 完掘 (南西から)



SE315 完掘 (西から)



SE393 完掘 (南西から)



SE442 セクション (東から)



SE501 セクション（西から）



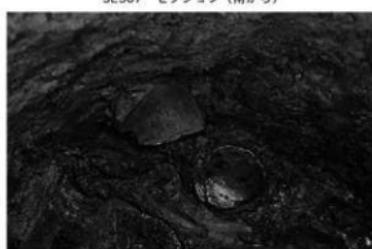
SE502 完掘（南から）



SE507 セクション（南から）



SE508 セクション（西から）



SE510 遺物（149・225）出土状況（北から）



SE510 完掘（東から）



SE511 完掘（北西から）



SE513 セクション（南西から）



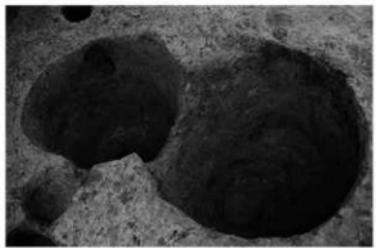
SE919 セクション（東から）



SK939 セクション（北から）



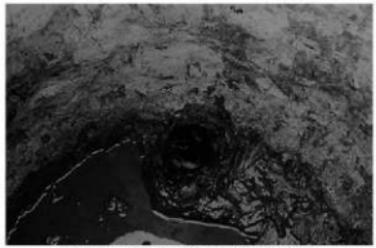
SE1039 セクション (西から)



SK939・SE1043 実掘 (西から)



SE1107 セクション (南西から)



SE1108 遺物 (262) 出土状況 (南から)



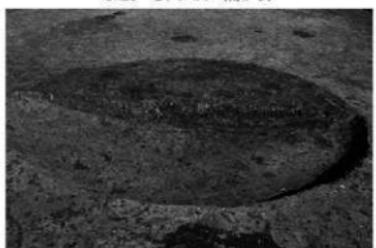
SK17 セクション (南から)



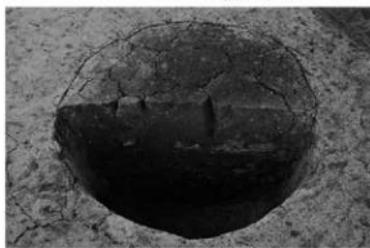
SK20 セクション (南から)



SK21 セクション (南から)



SK112 セクション (南から)



SK113 セクション (東から)



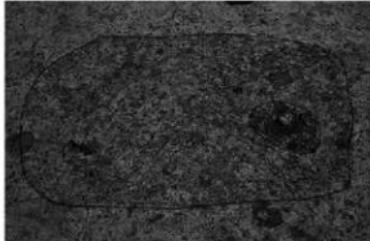
SK118 セクション (南から)



SK160 · P159 セクション（南東から）



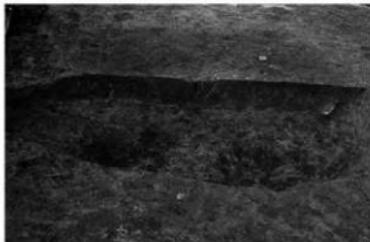
SK217 セクション（南東から）



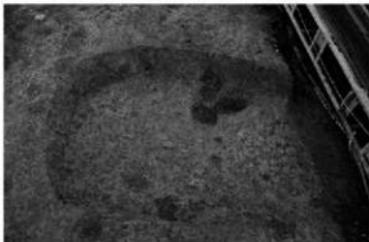
SK174 · P175 検出状況（北から）



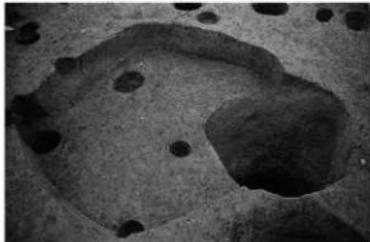
SK174 · P175 セクション（南から）



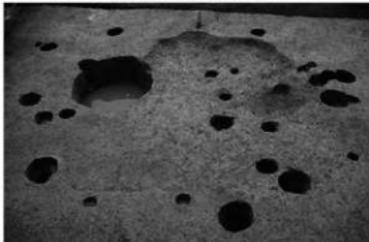
SK218 セクション（南東から）



SK218 完掘（北西から）



SK237 · SE238 完掘（東から）



SK276 完掘（北から）



SE283 セクション（北から）



SK380 完掘（北西から）



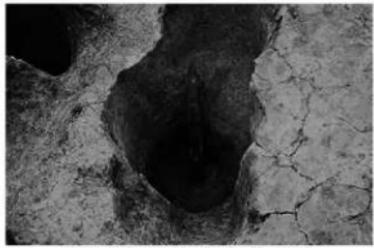
SK996 セクション（東から）



SK1034 セクション（北から）



SK1289 セクション（東から）



P103 遺物(271) 出土状況（南西から）



P259 遺物(147) 出土状況（西から）



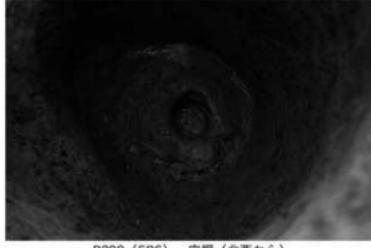
P275 セクション（南東から）



P288・P386 セクション（北から）



P289・P330 セクション（南から）



P299 (SB6) 完掘（北西から）



P363 セクション（北から）



P425 セクション (西から)



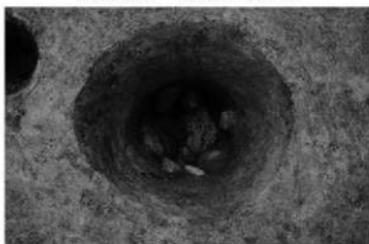
P431・P440・P441 セクション (東から)



P539 (SB4) セクション (東から)



P649 根固め石検出状況 (東から)



P655 根固め石検出状況 (東から)



P658 セクション (北西から)



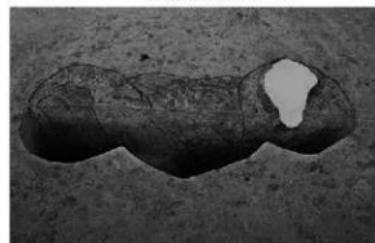
P660 セクション (北西から)



P667 珠洲焼出土状況 (北から)



P681 セクション (西から)



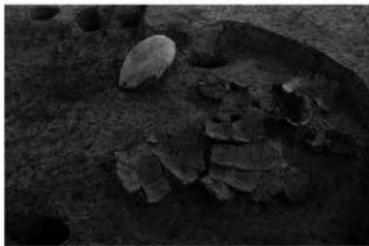
P727・P728・P729 セクション (南西から)



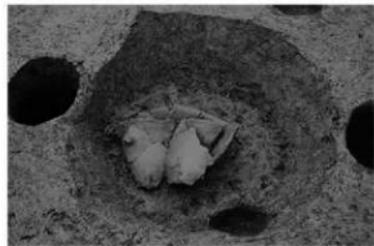
P1199 セクション（東から）



SX279 遺物（24）出土状況（南西から）



SI1038 遺物（2・3・6）出土状況（南西から）



SI1038 遺物（7）出土状況



作業風景



作業風景



作業風景



作業風景（SE247）

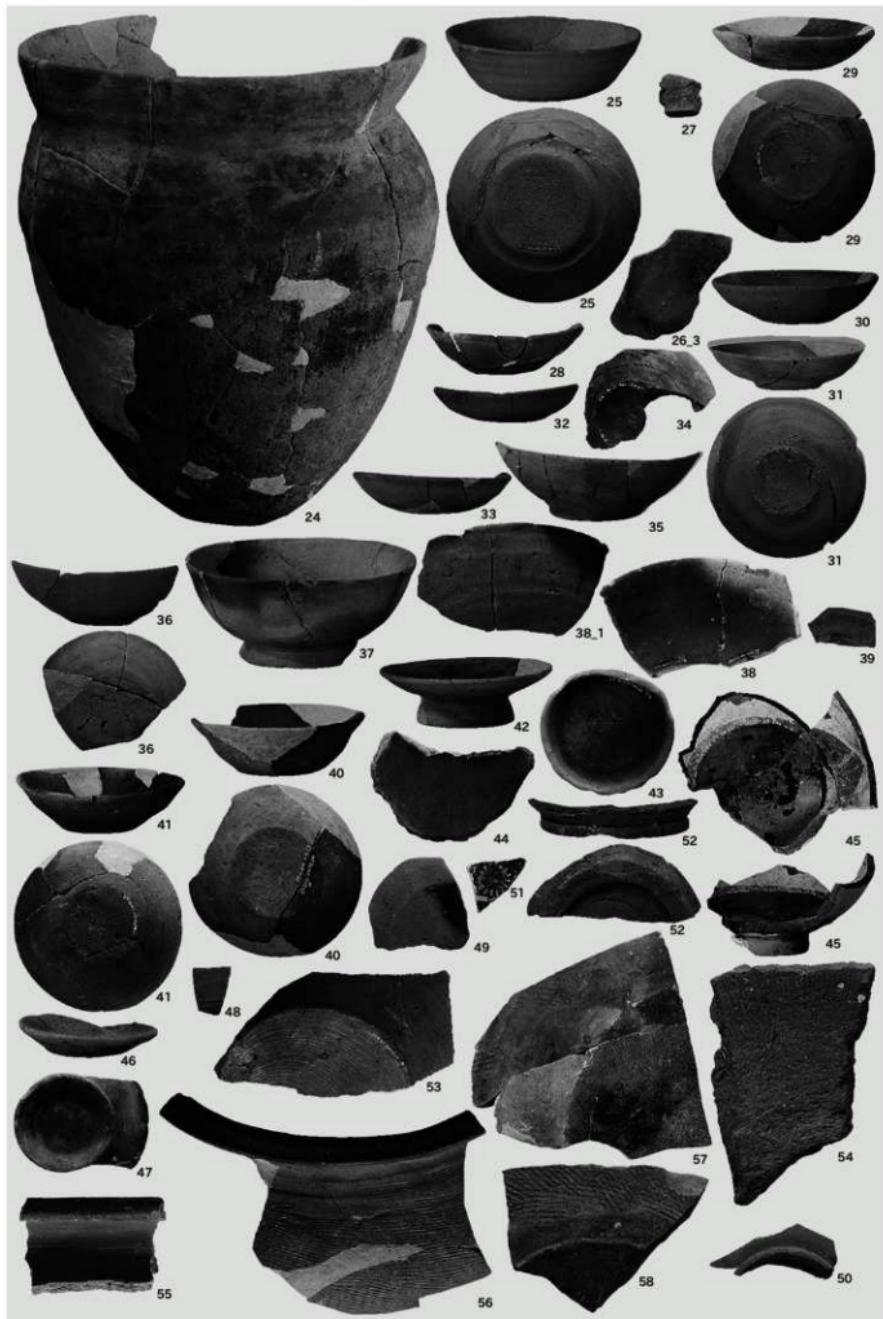


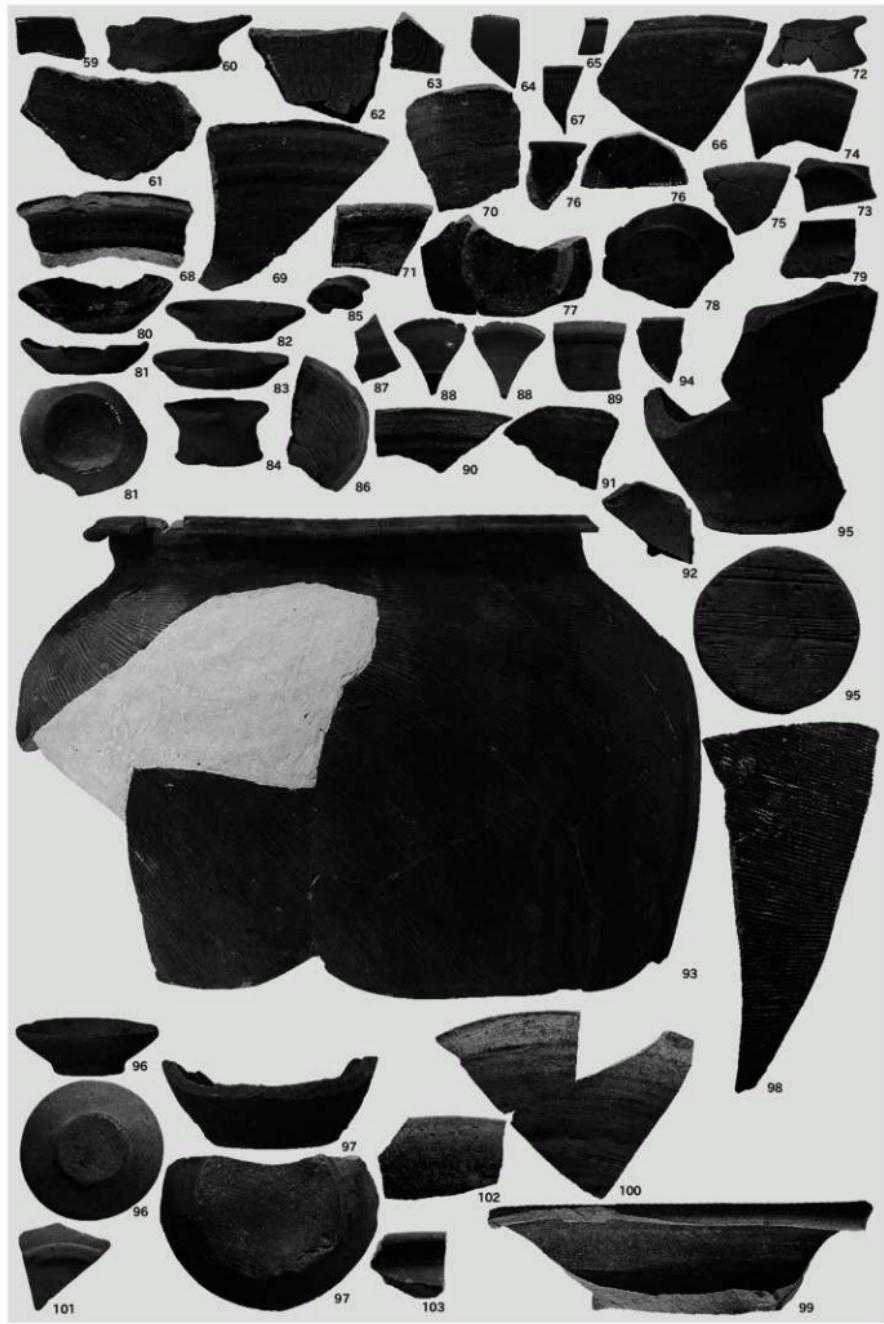
作業風景

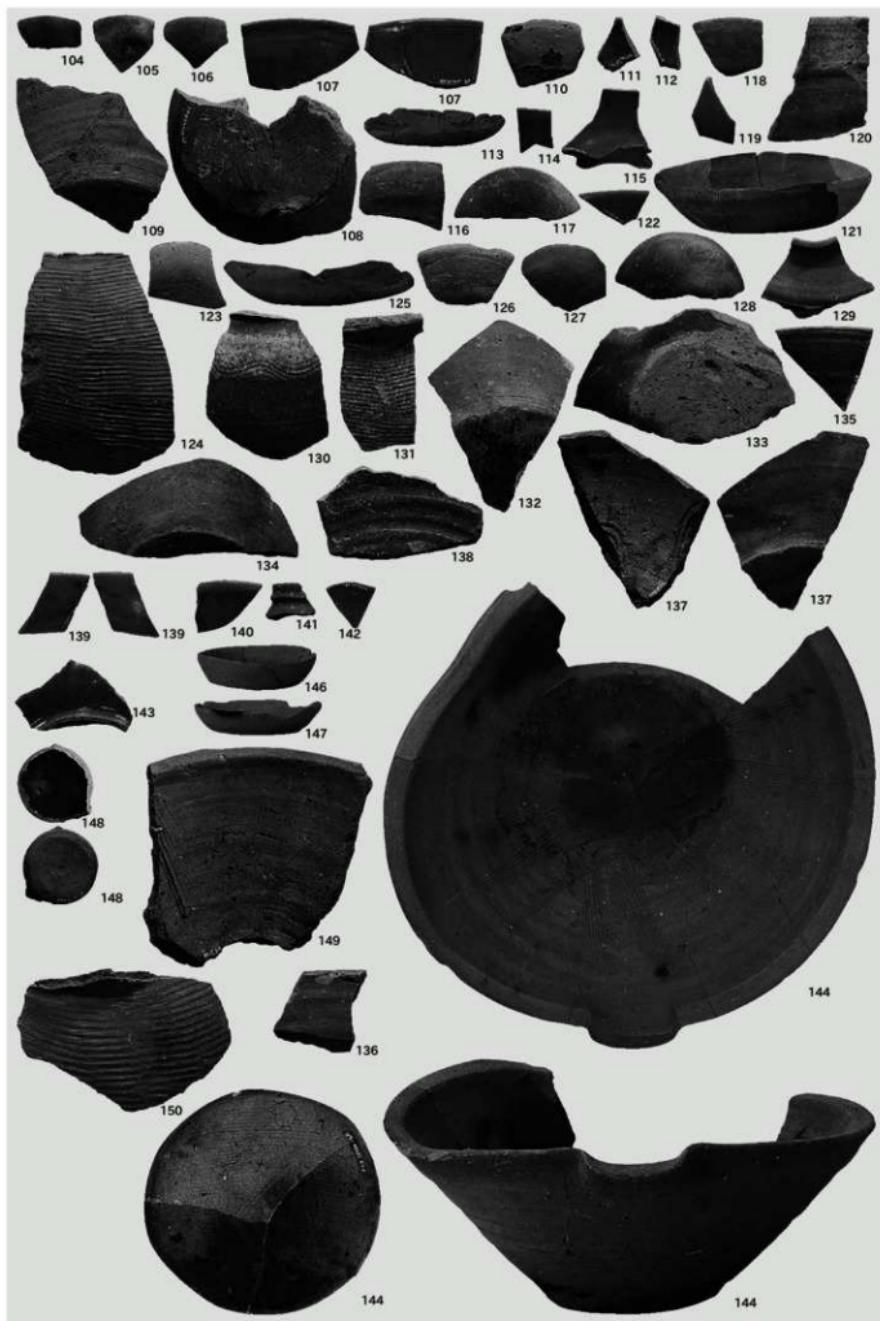


道跡近景

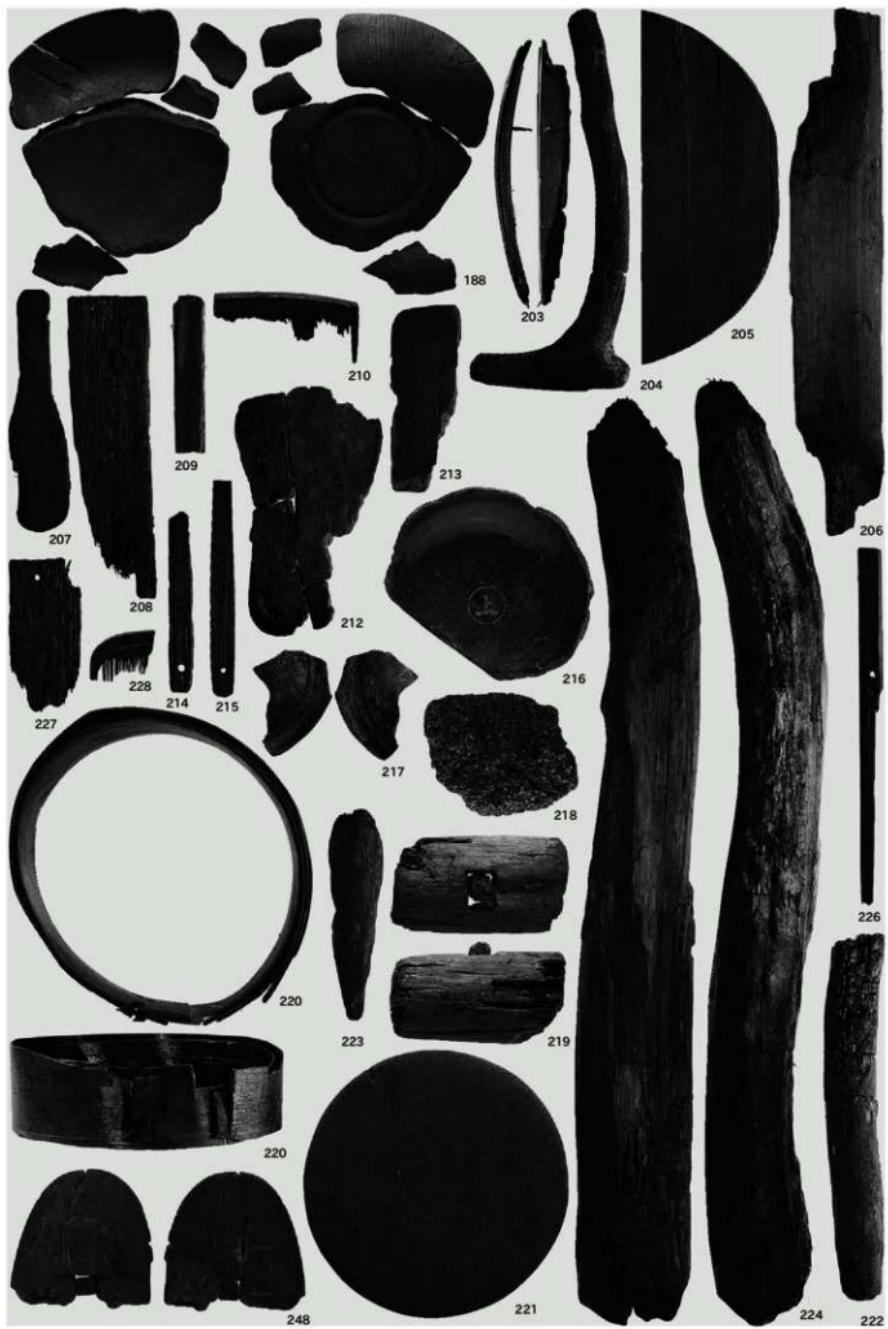














## 報告書抄録

ふりがな	なかだいせき						
書名	仲田遺跡						
副書名	北陸新幹線関係発掘調査報告書						
卷次	II						
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第128集						
編著者名	加藤 学 高崎 敏昭 沢田 福宏						
編集機関	財團法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団						
所在地	〒956-0845 新潟県新津市大字金津93番地1 TEL 0250 (25) 3981						
発行年月日	西暦2003(平成15)年6月16日						
ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村 道路番号	北緯 ° ° °	東経 ° ° °	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
仲田遺跡	新潟県板倉町 大字鷹川字 仲田87ほか	15548	108 02分 29秒	37度 138度 17分 29秒	20020909 ~ 20021220	5,100m <sup>2</sup>	北陸新幹線建設
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
仲田遺跡	集落跡	古墳時代後期	竪穴住居1軒		土師器	7世紀後半の良好な一括資料が出土	
		古代	土坑		須恵器、土師器		
		中世（11世紀後半～13世紀・15世紀）	溝17条、掘立柱建物31棟、井戸85基、土坑59基、方形堅穴状造構1基		珠洲焼、土師器、青磁、白磁、青白磁、木製品、石製品、鉄製品	川辺に営まれた中世集落の変遷が把握された。	

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第128集  
北陸新幹線関係発掘調査報告書II

仲田 遺跡

平成15年6月10日印刷  
平成15年6月16日発行

編集・発行 新潟県教育委員会

〒950-8570 新潟市新光町4番地1  
電話 025 (285) 5511

財團法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団  
〒956-0845 新潟市大字金津93番地1  
電話 0250 (25) 3981  
FAX 0250 (25) 3986

印刷・製本 長谷川印刷

〒950-2022 新潟市小針1丁目11番8号  
電話 025 (233) 0321

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第128集 仲田遺跡 正誤表

ページ	行	誤	正
25	1行目	有する。期の典型例	有する <u>I</u> 期の典型例
28	下から 8 行目	5 木製品 (175~277)	5 木製品 (175~271)